語形から意味へ

機能中心主義へのアンティテーゼ

三枝　令子

目次

はじめに　本書の基本的な考え方と構成 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

第１部　語形の持つ陳述性 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
第１章　活用形の陳述性 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
1　陳述とモダリティ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
2　活用形の陳述性 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
2.1　連用形の陳述性 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
2.2　言い切り形の陳述性 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
2.3　動詞言い切り形のふたつの形（叙述形と概念形） ・・・・・・・・・・ 16
2.4　形容詞言い切り形のふたつの形（叙述形と概念形） ・・・・・・・・・ 23

第２部　語形から機能を知る ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
第２章「ので」「のに」「だけで」「だけに」の分析 ・・・・・・・・・・ 24
1 はじめに ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
2「ので」「だけで」の語構成 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
3「で」の意味と機能 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
4「に」の意味と機能 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27
5「の」「だけ」の意味と機能 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28
6「ので」「だけで」の意味と構文的条件 ・・・・・・・・・・・・・・・ 32
7「のに」「だけに」の意味と構文的条件 ・・・・・・・・・・・・・・・ 35
8 まとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 40

第３部　語形の体系性　「って」の分析 ・・・・・・・・・・・・・・・ 43
第３章　「って」の構文的位置づけ―「と」による引用と「って」による引用の違い 43
1「って」の多様な用法 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 43
2「と」の用法と意味 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 44
3「って」の用法と意味 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 50
4 まとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 60

第４章　「だって」「たって」の本義とその用法の広がり ・・・・・ 62
1　従来の扱い ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 62

2「だって」の起源 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 62
3　引用の「だって」「たって」 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 64
4　逆接の「だって」「たって」と「でも」「ても」 ・・・・・ 65
5　接続詞の「だって」 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 70
6　終助詞の「だって」 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 72
7　まとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 73

第 5 章　提題の「ってば」「ったら」 ・・・・・・・・・・・・・・・ 75
1「言う」の条件形から提題助詞へ ・・・・・・・・・・・・・・・・ 75
2　提題助詞の働きをする「ってば」「ったら」 ・・・・・・・・・・ 76
3　提題の「は」「なら」「って」との比較 ・・・・・・・・・・・ 79
4　終助詞の働きをする「ってば」「ったら」 ・・・・・・・・・・ 82
5　まとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 82

第 6 章「って」の体系 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 84
1「って」の語義 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 84
2　森重敏による「って」の分析 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 84
3「って」の体系 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 85
4　引用の「って」「だって」 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 86
5　逆接の「って」「だって」 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 92
6　「って」の分化と体系 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 94

第 4 部　語形の持つ機能の連続性 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 98
第 7 章　話し言葉における「が」「けど」類の用法 ・・・・・・ 98
1 はじめに ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 98
2　話し言葉におけるデータの分析 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 98
2.1　全体の使用頻度 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 98
2.2　発話内の位置による使用頻度 ・・・・・・・・・・・・・・・ 99
2.3　男女別の使用頻度 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 100
2.4　丁寧化百分率とスピーチレベルシフト ・・・・・・・・・・ 101
2.5　形容詞への接続 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 104
2.6「が」「けど」類の前の「のだ」 ・・・・・・・・・・・・・・ 105
2.7　述語の種類 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 106
2.8　終助詞との共起 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 108
3「が」「けど」類の用法 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 109
3.1　「けど」節類の基本的意味 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 109
3.2　「が」「けど」節類の機能 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 111
4　まとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 113

第 8 章「だ」が使われるとき ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ **115**
1　はじめに ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 115
2「だ」の活用と働き ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 116
3「だ」のモダリティ性 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 117
3.1　文末 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 117
3.2　文中 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 123
3.3　文頭 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 127
4「だ」と「である」の使い分け ・・・・・・・・・・・・・・・ 127
5　まとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 129

第 5 部　品詞の間の連続性 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ **130**
第 9 章　品詞のさまざまなふるまい ・・・・・・・・・・・・・ **130**
1　品詞の転成 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 130
2　名詞の形容詞的ふるまい ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 131
3　名詞の副詞的ふるまい ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 133
3.1　副詞の中での位置づけ ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 134
3.2　独立副使用法の性格 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 136
4　動詞の名詞的ふるまい ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 141
5　形容詞の名詞的ふるまい ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 143
6　ふるまいの異なる同義語 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 146
6.1　イ形容詞とナ形容詞 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 146
6.2　「X の」と「X な」 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 147
6.3　「X い」と「X な」 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 148

おわりに ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ **160**

例文出典 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 166
引用文献 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 168

はじめに

本書の基本的な考え方と構成

語とは何かという問は重い。辞書を作るためには,語の取り出しが必要だが,どう取り出すかという問題はそのまま,その言語の文法をどう考えるかという問題につながっている。日本語は分かち書きをしないから,普段,人は語の切り出しに頭を悩ませないが,日本語をローマ字書きしようとすれば,語をどのように分けて書くかは大きな問題である。単語で区切るのが自然だが,その単語の区切りが判然としない。たとえば,接辞を独立した語として分けるのか,活用形はどこまでひとまとまりと考えるのか,といった点で迷うことになる。ここでは,語とは,自立語,付属語を問わず,意味を持った最小の音形と考える。接辞も実質性はないが,独自の意味を有している点で語と認める。そして,本書では,文法を考えるにあたって,この語を基本に据える。

筆者は,言語の伝達面を重視する機能的な言語観を否定するものではない。言葉が文脈の中でどのように機能しているかを考えずに,言葉の意味はとらえられない。しかし,1970 年代に始まった Communicative Approach は,言語学習・教育はコミュニケーション能力の獲得を目指すというそれ自体は妥当な目的の中で,言語形式の正確さより伝達することを重視する面がある。文法項目を暗記しただけでは言葉が使えるようにならないのは,単に運用の練習が足りないということではなく,言葉は場面の中ではじめて意味を持つということであり,その場面への洞察が不可欠だからである。しかし,日本語の機能を並べて片端から学んでいくだけでは,その語を構成要素とする他の語との関連性がつかみにくく,汎用性に欠ける。日本語を機能的に理解するためにも,語形とその構造の理解は不可欠である。言葉の意味がわからない時,あるいは,言葉の意味を人に説明しようとする時,われわれは,自然,それがどういう語から成り立っているのかを考える。また,語源は何かということを考える。語源を調べる時に,語形を無視することはできない。実際の用法の説明も有効であり必要だが,それだけではわかった気がしないことが多い。その語を構成している論理関係がとらえられてはじめて,腑に落ちると言ったらいいだろうか。

Halliday,M.A.K の機能文法は,言語をコミュニケーション達成の道具とみており,構造主義の言語観から一歩踏み出している。しかし,Halliday（1985）が文法の側面をないがしろにしたわけではない。一方で,平叙文の文法的な選択体系においては直説法,命令法,疑問法があること,そこでの主語と定動詞の位置にルールがあることを述べるとともに,他方で,命令法や疑問法においては品物/行為の交換（この場合は「提供」か「命令」）,あるいは情報を交換する（この場合は「叙述」か「質問」）という意味的な交換選択体系があることを述べている。小泉保（2000）は,「選択体系」における選択は機能側に属し,体系自体は形式側に属するとして,Halliday における機能と形式の相互依存性を指摘している。

相互作用ということで言えば,奥田靖雄（1985）は,「単語は語彙的なものと文法的なものとの有機的な統一物である。」（同 27）と述べて,語彙的なものと文法的なもの

との相互作用を指摘した。奥田はさらに単語の意味するところについて,「《形式》というものは,ものの存在のし方であるし,あるものの内容が他のものとむすびつく,そのし方にほかならないのである。」（同 36）として,形式の持つ重要性を指摘している。

本書の基本的な考え方は,語形をよりどころに言葉の意味,機能を考えようとするところにある。我々が言葉について考える時,語形を頼りに考えを進めていくことは自然で無理がない。そして,できるだけ語形に即してその意味を考えようとすれば,語の成り立ちにも必然的に目を向けざるを得なくなる。また,同じ語形であっても異なる機能を持つために別の語として扱われているものについて,本当にそうなのか一度は疑ってかかることになる。こうしたプロセスの中で,語形の共通性から意味の連続性,時には体系性が見えてくると考える。

本書の具体的な構成は次のようになっている。

第 1 部では,陳述観についての文法諸家の論考を振り返りつつ,活用形が持つ陳述性について考える。かつて「陳述」は,文法上の重要な概念として「陳述論争」と呼ばれるものがあったほど活発に議論された。それは,文が成立するのは何ゆえかという問題意識から出発したと考えられるが,今現在は,陳述よりモダリティという言葉がよく使われている。これは,機能的な文法観,言語教育観が広まるのと歩調を合わせた変化とも受け取れ,必然的な発展の推移ということもできる。ただ,そうした中で,ひとつひとつの語が持っている力が過小評価されているように感じられる。現代語では,動詞の連体形,終止形は同形のため,連体,終止という名称は,位置による区別しか表さない。しかし,動詞の現実の用法には,陳述度の違いがある。本書では,その識別を概念形と叙述形という用語によって行う。そうすることによって,たとえば同形の「の」が同じ動詞を受けていても,そこに違いが生じる理由を説明できると考える。

文法は,大きく形態論と統語論に分けられるが,第 2 部では,形を同じくする表現の分析,具体的には「ので」「のに」「だけで」「だけに」の分析を通して,統語論においても形式の持つ意味が重要であることを述べる。語の意味は用法を通して説明することが多いが,用法の記述は分類を細かくすることになりがちで,かえって語の本質を理解する妨げになることもある。まずは語の形からそれぞれの語の中心的な意味と機能を考え,同一語形のものは,もともとは同じ意味を持ち,文の中での用いられ方によって異なる機能を担うと考える。

第 3 部では,同一語形の体系性を扱う。引用の意味を持つ「って」は,引用の「と」と似た振る舞いをするが,まずその違いを 3 章で観察する。4 章では「って」を構成要素に持つ「だって」「たって」についてその用法を考えてみる。ここには,引用にとどまらず,逆接の「だって」「たって」,接続詞の「だって」,終助詞の「だって」「たって」を同形のものとして取り上げ,その共通性と違いを考える。5 章では「って」の変化形である「ってば」「ったら」を観察し,提題の「は」「なら」との違いを考える。第 3 部終わりの 6 章では「って」が全体として一つの体系を持っていることを述べる。

第 4 部では,同一語形の品詞を超えた連続性を扱う。同じ語が構文によってその文法的性格を変えていくことがあるが,ここでは,「が」「けど」と「だ」を取り上げて,そ

れらが持つ異なる用法を, 語形の持つ基本的性格によって統一的に説明することを試みる。

第 5 部では, 品詞の問題について考える。語は, その語形の持つ文法的性質によって, 品詞分けされる。品詞分けによって語形が確定された単語と構文が文を作る基本単位になるが, 単語は, 同じ形を保ったまま, 品詞の枠を飛び出すことがある。たとえば, 動詞は述語として働くが, 「行くにちがいない」のように格助詞が付加することによって, ＜すること＞という名詞性を示す。このように動作性をもった単語を抽象化, すなわち名詞化することによって, 話し手が日本語の表現の幅を広げることがある。元の品詞が認定できるのは, その単語が持つ形によっているが, 形が同じでも構文によって新たな性質が現れる。それは, ひとつの単語がもともと潜在的にそうなる性質を持っていたと考えることができる。第 5 部では, こうした品詞の間の連続性について考える。

第１部　語形の持つ陳述性

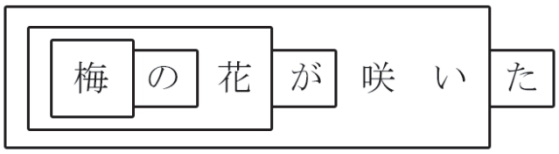
第１章　活用形の陳述性

1　陳述とモダリティ

第１部では,語形が持つ陳述性について考えたい。文法において,陳述は,「文を完結させる営み」を意味し,文の基本として重要な意味を持っている。しかし,その内容,解釈は人によって,また,その時々の文法論の趨勢によって変化している。以下,用言の活用形をどのように位置付けているかに着目しつつ,日本語文法論における「陳述」についての記述を振り返ってみる。

陳述という用語を最初に用いたといわれる山田孝雄（1908,1993：44-45）は,「用言の最も大切な特徴はその陳述の作用をあらはすといふ點にあるのである。この作用は人間の思想の統一作用で,主位に立つ概念と賓位に立つ概念との異同を明にして之を結びつける力をさすのである。」と,用言が陳述の働きをすることを述べている。山田における「陳述」は,概念的な規定にとどまっているように思われるが,次の時枝誠記（1950）では,入子型構造という具体的な構文の構造が示される。

時枝（1950）は,構文は,詞（客観的なもの：名詞,動詞,形容詞,副詞）と辞（主観的なもの：助詞,助動詞）からなると規定し,「詞は,思想内容を概念的,客體的に表現したものであることによつて,それは,言語主體即ち話手に對立する客體界を表現し,辭は,專ら話手それ自體即ち言語主體の種々な立場を表現するのである。」「客體的な表現,詞が,主體的表現,辭によって包まれ,また統一されるといふ関係」（同 204-205）が日本語の基本的な構造であるとする。「梅の花が咲いた」を以下のように図解したものが入子型構造（同 213）と呼ばれる。



そして,動詞の終止形など,辞が形態的に分析できない場合は,「零記号」として現われると考える。たとえば,「あぶない。」と叫んだ場合,「表面上は一語でありながら,零記號の陳述が伴ってゐるもの」（同 199）と考えるので,辞の中で用言に伴って文末に現われるものが陳述であると考えていることになる。

阪倉（1974）は,時枝の詞と辞の考えを踏襲しつつ,以下に見るように,動詞の活用にも陳述を認めている。

「書く」という形には,そこで言い切るという話し手の気持ち,「書け」には,命令しつつ言い切る気持ち,「書き」には,そこでちょっと止める気持ち,がつけ加えられて表現されている。すなわち,それぞれの活用形というものには,概念化して表している事がらのほかに,それに対する,話し手の立場からの判断や情意,すなわち陳述が,同時に表現されていると考えないわけにはいかない。(同 163)

芳賀綏(1954)は,「文を統括し・完結するいとなみたる“陳述”」に二種を認める。すなわち,「文を完結させるいとなみ」と「言語者めあてのはたらきかけ」で,それぞれについて次のように規定している。

「1」 第一種の陳述は,それに先行して客體的に表現された(但し,感動詞一語文の場合に限り客體的表現を欠く)事柄の内容についての,話手の態度[断定・推量・疑い・決意・感動・詠嘆・・・など]の言い定めである。《述定的陳述》或は《述定》

「2」 第二種の陳述は,事柄の内容や,話手の態度を,聞き手(時には話手自身)に向かってもちかけ,傳達する言語表示である。すなわち,[告知・反應を求める・誘い・命令・呼びかけ・応答・・・など]≪傳達的陳述≫或は≪傳達≫

(芳賀綏 1954, 1978 : 298-299)

それぞれにたとえば次のような例があげられている。

第一種の文　　雨が降る。・・・断定による統括

　　雨が降るだろうなあ。・・・推量+感動

第二種の文　　行け。・・・命令

　　乾杯!・・・誘いもしくは命令

第一種の文には,第二種の陳述(伝達)が累加できるので

　　雨が降るよ。・・・断定+告知

　　雨が降るわよ。・・断定+感動+告知

　　雨が降るだろうね。・・・推量+もちかけ(=念を押す)

といった構成になる。ここでは活用も陳述に含まれている。

渡辺実(1971)は,「陳述とは,統叙によってととのえられた叙述内容,または無統叙の素材的要素に対して,言語主体が,その素材,あるいは対象・利手と自分自身との間に,何らかの関係を構成する関係構成的職能である。」(同 106-107)と述べ,品詞で言えば,用言・助動詞の終止形と終助詞とを別次元のものとして区別する。そして,「述語によって叙述のいとなみは完結するのだが,それは言語者めあての陳述のいとなみの為の素材を描き上げる

に止る。叙述の詞的素材性を終助詞が支配して陳述はいとなまれ,始めてここで文が完結する。」（1953,1978：282）と,終助詞に陳述の働きを認めている。

寺村（1978）は,態,アスペクト,テンスの後につけ加えることのできる補助形式として「だろう」「らしい」「ようだ」「そうだ」「のだ」等をあげ,「これらの形式の共通の意味的特徴は,それが客観的な事実に対応する表現形式でなくて,外界の「こと」を素材として,話し手が断定したり推定したり,あるいはそのような判断をさらに正当化したりする主観的な態度を表すという点である。一般言語学でふつう「ムード」と呼ぶものにほぼ該当するといってよいだろう。」（同97）と述べて,「心的態度」を「ムード」と定義し,以降のモダリティという用語の使用に舵を切る。後の寺村（1984：58）では,「現実のいろいろな場で,話し手が,コトを相手の前にもち出すもち出し方,態度を表す部分」を「ムード」と呼ぶことは変わらないが,活用を「唯一の必須的ムード」とし,活用形にもムードを認めている。そして活用形の表すムードを以下のように分類している。

確言形
概言形 ｝言い切りのムード
命令形
条件形・・・あとの文と関係づけるムード
保留形・・・あとの文（主節）がムードを表すまで,態度を保留するムード

寺村は,これらを一次的ムードと呼び,このほかに助動詞,終助詞をそれぞれ二次的,三次的ムードとして区別した。寺村は,ムードを活用形とそれに接続する表現の双方に見ていることがわかる。また,活用形がムードを担っていると言えるかどうか判断が難しい場合もあることや陳述度の強弱という概念も指摘している。寺村は,「ムード」を構文要素のひとつとして認めながら,陳述度の強弱は,それとは別の概念として分けている。寺村の主張した「ムード観」はそれ以降積極的に文法論にとり入れられていく。

こうして幾人かの文法家の陳述観を見てみるだけでも,以下のように異なるところがあるのがわかる。

①用言に陳述を認める立場：山田
②用言に接続する表現に陳述を認める立場：時枝,渡辺
③用言と用言に接続する表現の双方に陳述を認める立場：阪倉,寺村

寺村以降,次第に陳述論はモダリティ論として展開していくようになり,陳述という用語は以前ほど使われなくなる。尾上（1990）は,陳述論的文法論についてその誕生から終わり

までを概観し,「文が文として存立するためにはどのような要素がどのように組み上げられる必要があるのかという唯一の観点から文の構造の全体的把握を目指したところに,陳述論の工夫と栄光がある」（1990, 2001：295）と述べている。三上章は,西洋の言語学も視野に入れつつ,独自の陳述観を展開し,上の分類で言えば③に当たるが,三上については,のちに詳しく取り上げる。

仁田義雄（1989）は,「モダリティとは,現実との関わりにおける,発話時の話し手の立場からした,言表事態に対する把握のし方,および,それらについての話し手の発話・伝達的態度のあり方の表し分けに関する文法的表現」（同 2）であると述べ,次のような例をあげている。原票事態めあてのモダリティは,発話・伝達的態度のモダリティに包み込まれるという関係にある。

発話・伝達のモダリティ
↓
彼も　来る　だろう　ね
↑
言表事態めあてのモダリティ

仁田においては活用形自体が持つモダリティは,叙述内容ということで問題にされておらず,それに後続する表現をモダリティとして注目していることがわかる。

日本語記述文法研究会（2003）では,モダリティとは「その文の内容に対する話し手の判断,発話状況やほかの文との関係,聞き手に対する伝え方といった文の述べ方を担う」（同 1）と定義され,以下のように分類されている。

・文の伝達的な表し分けを表すもの：叙述のモダリティ,疑問のモダリティ,意志のモダリティ（「今日はもう寝よう」）,勧誘のモダリティ（「いっしょに帰ろう」）,行為要求のモダリティ（「掃除しろ」）
・命題が表す事態のとらえ方を表すもの：評価のモダリティ（「ていい」「べきだ」）と認識のモダリティ（「はずだ」「ようだ」）
・文と先行文脈との関係づけを表すもの：説明のモダリティ（「のだ」「わけだ」「ものだ」）
・聞き手に対する伝え方を表すもの：丁寧さのモダリティ（「買った」「買いました」）と伝達態度のモダリティ（「誰かいる<u>よ</u>。」「今日は疲れたなあ。」）

ここでは,活用形,助動詞,終助詞すべてがモダリティに含まれている。「陳述」は,文がどのように成り立つものかという観点から出発していたのに対して,「モダリティ」は,その枠組みを広げ,話し手の意図,伝え方に焦点を移していると言える。

ここで,もともとのモダリティの言語学的な定義をみておきたい。『現代言語学事典』(1988:395) には,モダリティに関して次のように記述されている。

法 (mood)
　直説法　indicative　　I visited Athens.
　仮定法　subjunctive　If I could visit Athens,…
　命令法　imperative　　Visit Athens.
法性 (modality) :法 (mood) の特性。「法性は文法および意味のレベルで認められ,いわば統語論的＝意味論的 (syntactico-semantic) 概念であり,何を法性とするかについては諸説がある。」

すなわち,「ムード」は,直説法,仮定法,命令法という文の述べ方の違いを指している。

Lyons, J.(1995)は,modality,modal,mood という語源的には関連する語について,言語学者と論理学者との間で異なる解釈がなされ混乱が生じていることを指摘した上で,ライオンズ自身は,伝統的な文法で用いられている意味にしたがい,ムードを直説法,仮定法,命令法といった文法的カテゴリーを指すものとして用いると述べている。

小泉保 (2008) は,「法 (modality) は伝達内容についての話し手の見方を表している。」として,語形変化によるもの「叙法 (mood) 」と,語形変化によらないもの「法的表現」を区別しており,ここには西洋の言語学的視点が感じられる。

Bally ,C. (1950) は,よく知られているように,dictum と modus を区別する。Bally は,文という
ものはふたつの部分,ひとつは表象を構成する過程,たとえば＜雨＞,＜治癒＞といった＜事理＞ (dictum) と,もうひとつは,文の要となる思考主体の心的操作とかかわる＜様態＞ (modus) から構成されると考える。ただし,Baly の言う様態性の表現は,＜様態動詞＞とその主体からなるもので,ここでの様態動詞は,たとえば,「信ずる」「悦ぶ」「願う」といった動詞を指しているので,日本語で今日言うモダリティとは異なる。

Halliday,M.A.K. (1970) は,モダリティ (Modality) を蓋然性,可能性等にかかわるシステム,ムード(Mood)を平叙,疑問等に係るシステムと区別したうえで,モダリティ(modalities)とモジュレーション (modulations) について,前者は,蓋然性等に係る話し手のコメントである対人的な要素,後者は, 内容という観念的要素と定義し,モダリティにはテンス,肯否,態が含まれないと述べている。

Palmer ,F.R. (2007)は,mood と modal system とを区別するべきだと言う。そして,前者の mood は直説法,仮定法の区別を指し,後者の modal system については次のように下位分類する。(同 22)

Propositional modality	命題のモダリティ	
Epistemic	認識に係るモダリティ	John may be in his office. John must be in his office. (同 25)
Evidential	証拠に係るモダリティ	(報告,知覚)
Event modality	ことがらのモダリティ	
Deontic	義務的モダリティ	You may/can go now. You must go now. (同 71)
Dynamic	活動的モダリティ	My destiny’s in my control.I can make or break my life myself. (同 77)

右の文が Palmer のあげている例だが,これを見ると,助動詞によってもたらされる命題のあり方が問題となっていることがわかる。

もともと Modality の概念は,直説法,仮定法,命令法という法の特性を意味していたが,一般言語学においても,ムードの概念を従来の法の特性とするのではなく,いわば「ことがら」と「述べ立て」といったそれまでとは異なるとらえ方をしていることがわかる。翻って日本語を考えてみると,日本語では法と活用形の区別が厳密ではない。むしろ法を動詞の活用形と考えるのが普通である。「書く」と「書いた」はともに直説法であって,活用形の異なりだから,「書く」「書いた」の違いを法として扱うことはできない。また,日本語の「書けば」「書け」は「書いた」と同様,「書く」の活用形の違いととらえるのが自然である。すなわち,日本語では,法が英語の場合のように構文的に区別されるのではなく,活用形の中にテンスもモダリティも含まれていると考えられる。奥田 (1985) にも「日本語のような言語では,単語は文法的なむすびつきとかかわりとを表現するために,変化して,かたちをかえる。たとえば,動詞が叙述形になったり命令形になったり,意志形になったりするように。」(同 22) とある。しかし,日本語の文法論では,時代が新しくなるにつれて,陳述は,活用形の問題でもなく,むしろ,動詞の後に付加される叙述表現の問題ととらえられ,それに伴って,名称を陳述からモダリティに言い換えている。それと同時に,活用形自体がもっている陳述性,日本語の用語にあわせてモダリティと言い換えてもよいが,それは考慮されることが少なくなっているように見受けられる。もとより,同じ活用形でも陳述度の違いがあることについて言及した分析がないわけではない。先にあげた阪倉,寺村にもその指摘はあるが,次に正面からそれを論じた論考を見てみる。

なお,本書では,活用形の陳述性に焦点を当てて論じるが,陳述というものは,今日の文法家が指摘するように,用言に接続するいわゆる助動詞,終助詞にも認められるものであり,また,イントネーション,さらには非言語的行動によっても示されるものと考える。古くは,三宅武郎（1934）が,語気に陳述があることを指摘している。三宅は次のように述べる。

雪が降る。
雪が降る！
雪が降る？

「！」も「？」も「。」とひとしく立派な陳述です。そういふ,いろいろな「結びの語氣」をあらはすものが「か・よ・ね・サ」などだとすれば,それも一種の語気述詞ではないか。もちろん,それは他の語気述詞のやうに,本來,實質的な述詞から出たものではない。けれども,それだからといつて「語氣」といふ陳述活動に目を掩つてはならない。（同 1934, 1978：152）

また,森岡・宮地・池上・南・渡辺（1974：229）は,「古池や蛙とびこむ水の音」において,どこにも動詞の終止形がないが,完結性があり,陳述の作用が働いている,陳述はいろいろな手段によってまっとうされる,すなわち,終助詞だけでなく,様々な手段,たとえば,イントネーションも陳述を担い得ることを指摘している。

2　活用形の陳述性 (1)

陳述,それは現在ではモダリティと呼ばれることの方が多いが,ここで問題にしたいのは,活用形の中に含まれているそれをどう考えるかである。以下では,その点を中心に論じている論考を見てみる。

三宅武郎（1937）は,「花の咲く樹」「人の住まぬ家」について,山田孝雄の,この下線部は厳密に言えば陳述ではないとの指摘に対して,「厳密に言えば」という条件は必要なく,連体形には完全に陳述の力はないと述べている。動詞,形容詞の連体形は,連体詞と「形式の力」において同等のものと見る。

渡辺実（1953）は,「（略）,終止形の述語が果たしている役割は,すべて連体形の連体修飾語によっても果たされていて区別がなく,ただひとつの叙述がより独立的であるかより依存的であるかという程度の差だけを有して,両者は相互に連続するものだと言えると思う。」（同 267）として,次の例文をあげている。

(N) 自発的に煙草をやめる患者が次第に増えて来て居ります
(M) よくも煙草をやめる気になったものだね

(L) 煙草をやめる前の最後の贅沢なんだ
(k) ねえ,煙草をやめる事ぐらい一寸の決心よ
(J) 明日から煙草をやめるのは体のためばかりではないのです
(I) おいおい,今日から煙草をやめる筈じゃなかったのかい
(H) 何か煙草をやめるだけのわけがあるのでございましょう
(G) 決心した日からすぐに煙草をやめる様な人なんですの
(F) 煙草をやめるよりもっとつらいことだと？
(E) 煙草をやめるやら酒を減らすやら病はいやなものですわい
(D) みんな煙草をやめるのにお前だけはやめないつもりか
(C) もう煙草をやめるからもらったら誰かに上げてしまいなさい
(B) ほんとに煙草をやめるかい
(A) 明日から煙草をやめるよ

渡辺は,「つまり被連体語には,一様に上の叙述全体を綜合し体言化してうけとめる力が備わっていると思われるが,その力も被連体語の意味の具象度に正比例して強弱があり,(N)に近い程うけとめる力が明確であり,従って上の連体形の依存性が強く,(A)に近い程うけとめる力が曖昧となり,従って上の連体形に表現の重点が移り始め,薄れてゆく依存性に反比例して次第に独立性が強くなるのである。」(1953：268)と述べ,叙述の力が終止形と連体形とで異なること,そして,被連体語,すなわち,どのような語を動詞が修飾するかによって陳述の程度が異なってくることを示した。

三上章(1953)は,西洋語のムードと活用の概念とが一致することに注目し,活用形について,「現代の活用形としては,独立して使われる語形だけを取り,ムウドによって,まず連用,仮定,終止連体,推量,命令の名称を数えることになる。そして,たとえば「行ケバ,見レバ,何々スレバ」の形を仮定形と言い,「行カウ,見ヨウ,何々シヨウ」を推量形と言う。」(1953,1987:159)とし,「日本文法においては,陳述は連続的な程度をもってあらわれる」(1953,1987:182)と考えて,三宅,渡辺らより踏み込んで,活用形全般にわたって次のように陳述度を例示した。陳述の力は終止形が1と考えた時,条件法,中立法の順に陳述の力が弱まり,ゼロの不定法になると丁寧化することもないが,動詞の資格は保っているとする。

表1-1　三上による動詞の陳述度(三上1959,1987:148-151から)

不定法	0	買いに行く,雨が降りはしたが,習うより慣れろだ,このことを光が回折すると言います
中立法	1/4	手紙を書いて　読み返した。
条件法	1/2	書けば,書いたら
終止法(係り)　{連体法}	3/4	書く,書いた　(1953では1/2)
終止法(文末)	1	書く,書いた,書こう,書け

三宅, 渡辺, 三上とみてきたが, このように, 活用形がもつ陳述性に注目した論考もある。しかし, 一部の文法家をのぞいては, 活用形自体の陳述性については言及が少なくなっているように思われる。

2.1　連用形の陳述性

陳述には, 語形の持つ陳述性と文の持つ陳述性のふたつがあると言える。ここでは, 用言の活用形の中で使用頻度の高い連用形と, 言い切り形すなわち連体形と終止形を取り上げ, その活用形自体が持つ陳述性について考えたい。

連用形には「書き」の形と,「書いて」のふたつの形がある。そこで, 前者を中止形, 後者を「テ形」と呼び分けることにする。中止形は継続を表せず, テ形は,「帰って来ての話」「開けてのお楽しみ」という表現にも示されるように, その動作がすでに行われていることを示す。動詞の複合形では, 中止形は動作のありようを表現し, テ形は前の動作に次の動作を加えることを表現する。たとえば,「出し入れする」と「出して入れる」。また,「書き出す, 書き上げる, 書き終わる, 書きつくす, 書きかえる, 書きすぎる」と「書いてしまう, 書いてあげる, 書いてみる, 書いておく」の違いも, 両者の違いを反映していると言える。三上（1953, 1987：229）は, 次のような例をあげて, 上の文が正しい区切りであることから, テ形のほうが連用形よりも前後を緊密に結びつける力を持つことを指摘している。

三越ヘ行ツテ　洋書ヲ買ヒ　丸善ヘ行ツテ　ねくたいヲ買ツタ
三越ヘ行キ　洋書ヲ買ツテ　丸善ヘ行キ　ねくたいヲ買ツタ

松田剛史（1985）は, 高校の国語教科書についての数量的データをもとに, 500 例のテ形について動作性用言に接続するか, 状態用言に接続するかを調べている。それによれば, テ形による接続は,「て」の直前に位置する用言が動作性のもので, かつ, 前件後件の主語が同一の場合が 87%を占めた。このことから松田は, テ形の基本的用法は, 前件の動作・作用が完了・成立し, 次に現れる後件の動作・作用に連続していくことにあるとしている。三上（1953）や日下部文夫（1956）は, 中止形とテ形をそれぞれ未了, 完了と言い分けている。確かに, そのほうが動作のアスペクトが端的に示される。テ形がアスペクトを含み, 一方, 中止形（たとえば「書き」）は無色で, 動詞ではあるがもっとも動詞としての性格が希薄だという点に中止形から名詞が作られる原因がありそうだ。そして, この中止形から作られた名詞では, 名詞化することで意味が固定されると同時に意味の幅も狭められる。

テ形は,「村をあげての祝い」「さしあたっての処置」といった連体助詞の「の」が続く言い方がしやすく, さらに「読んではいけない」「せいてはことを仕損じる」と, 名詞性が強い。こうした言い方が固定して, 助詞相当の働きをするものに「おいて」「ついて」「関

して」等の表現がある。また,副詞的な「決して」「かえって」「あえて」「往々にして」にも,もはや動詞の持つ叙述性は感じられない。

2.2　言い切り形の陳述性

言い切り形には連体形と終止形のふたつがある。現代語においてはこのふたつは形は同じだが,その陳述度には異なる点がある。三上（1953）がその点を詳しく論じているので,改めてみてみよう。三上は,活用形の陳述度を分ける基準として,①連用補語を食い止めるか否か,②連体として収まるか否か,③普通体を丁寧体に変更することがふさわしいか否か,の三点をあげている。

①の連用補語を食い止めるか否かというのは,次の用例で（1）文は「手紙を」が動詞の連用形を食い止められずに「読み直し」にもかかるのに対して,(2)では,「手紙を」が後文の述語にはかからないことをさしている。

(1)手紙を書いて,何度も読み直した。
(2)手紙を書いたら,よく読み直してよ。

もちろん(2)の文でも,後件は「手紙」を目的語としているが,これは文脈了解的にそうなるので,基本的には「手紙を」は「書いたら」にかかれば役目は終わると考える。

②の連体法に収まるかどうかということについては,三上は次のような例をあげている。

(3)雨が降るので遠足をやめた連中が映画館へ押し寄せた。
(4)雨が降るから遠足をやめた連中が映画館へ押し寄せた。

この例文で,「ので」の場合（動詞が連体形の時）には,（雨が降るので遠足をやめた連中）と一続きになるのに対して,「から」の場合（動詞が中止形の時）には,「連中」にかかるのは「遠足をやめた」だけである。三上はこうした連体に収まらないものだけを接続助詞としている。

③の普通体を変更することがふさわしいか否かというのは,あまり厳密な基準でないとしながらも,文全体の丁寧さを次第に高めていった時,従属節の述部がそれに伴って丁寧になり得るかどうかを見るものである。こうした基準から三上は,終止形の陳述度を１とした時,連体形のそれは1/2位としている。

三上の考察にもあるように,一般に,連体形は陳述度が低く,終止形は陳述度が高いと考えられる。連体形の陳述度が低いのは,どんな叙述があろうと体言に連なれば,結局そのことがらはものごととして提示されて,話し手と現実との関係は断ち切られるからである。「私が食べたいもの」は「いま私が食べたい」こととは必ずしも関係がない。ところが,終止形になると,その動詞は,話し手の意向を表す。実際,文末では言い切り形は叙述性がある。そこで,言い切り形の陳述度の差は,体言に連なるか文末で使われるかという用法の違いによってもたらされると考えたくなる。しかし,この説明が不十分なのは,次のように文末でも叙述性のない用法がある点である。文末でも陳述度の低い用法がある[(2)]ということから,そもそも言い切り形に異なるものがあると考えられる。

(5)シューベルト,ここに眠る。
(6)猿も木から落ちる。
(7)水は100℃でふっとうする。(高橋2005:92)
(8)大企業が,中小企業などを圧迫するのもこれにあてはまる。(高橋2005:92)
(9)＜ト書き＞忠治が歩み出る。一同ハット驚いて・・・。(尾上1982,2001:370)
(10)＜新聞の見出し＞二階堂氏が調整に動く,＜映画の題＞カルメン故郷に帰る(尾上1982,2001:371)

これらの文では,話し手,聞き手は表現内容に関与していない。そもそも同じ語形でありながら,その陳述度が文内の位置や文の持つ意味によって変わるという根拠はきちんと説明されなければならないだろう。この点について筆者は,もともと言い切り形がふたつの要素,すなわち,叙述を担う場合(以下,叙述形と呼ぶ)と,ちょうど英語の不定法のように概念だけを担う場合(以下,概念形と呼ぶ)とを含んでいるということだと考える。ただし,英語においても,不定法はすべて概念形だ,とひとくくりにしてよいかは簡単には言えない。Givón(1995)は,ふたつのことがらをひとつのことがらに統合して叙述する場合,その統合の程度を以下のようにコード化している。統合度が高い場合には,その動詞の陳述度が低いと考えることができる。

表1-2　The binding scale of event integration (Givón1995:57)

MOST INTEGRATED

a. She *let go* of the knife	CO-LEXICALIZED COMP.(一語化された動詞)
b. She *made* him *shave*	BARE-STEM COMP.(原形不定詞補語)
c. She *caused* him to *leave*	INFINITIVE COMP.(to不定詞補語)

d. She *told* him to *leave*

e. She *wanted* him to *leave*

f. She *wished* that he *would leave*　　SUBJUNCTIVE COMP.（仮定法補語）

g. She *agreed* that he *should leave*

h. She *knew* that he *left*　　INDIR.QUOTE COMP.（間接話法補語）

i. She *said* that he *left*

j. She *said*:”He *might leave* later”　　DIR.QUOTE COMP.（直接話法補語）

LEAST INTEGRATED

この表は,動詞がふたつある場合に限られるが,動詞の陳述度を比べているとみることができる。この一覧から,同じ to 不定詞補語であっても,たとえば,c の「彼を行かせた」と d の「彼に行くように言った」では,前者のほうが一文への統合度が高いということが示されており,日本語とも対応していて興味深い。Givón は,補語の場合しか扱っていないが,to 不定詞には,名詞的用法 To see is to believe. もあり,また,補語でも,We go to school to learn. のように目的を表す場合はどうなのかという問題もある。原形不定詞については,この表では使役動詞の例しかあげられていないが,知覚動詞 I did not hear you call. や助動詞に続く場合 You may use my phone. はどうなのかという疑問も起こる。

日本語では,後に見るように,言い切り形は,基本的には,連体形の場合に動詞が概念化され,終止形の場合に動詞の陳述度が高くなることが多い。しかし,この原則が常に成立するとは限らない。そこで,もう少し細かく,どういう場合に叙述形と概念形が現れるのかを見てみたい。なお,高橋四郎（1931）は,なぜ動詞の終止形が辞書の見出し語に用いられるかを考察し,動詞の終止形である語自体は客観的概念を示しているだけで,特定の主体的表現はその語に加えられるイントネーションが受け持つと述べている。この指摘はまさにその通りだが,ここで行おうとしていることは,語とイントネーションを切り離して考えるのではなく,イントネーションも含めて構文的条件によって終止形を含む言い切り形がどのように用いられているかを考えようとしている。本書で「概念形」と「叙述形」という用語を用いることについて一言説明しておく。この用語自体は,日下部（1967）で紹介されている。また,寺村には「ムード性のない概念的表現」という記述がある。野田（1989）は,モダリティにふたつの側面,真性モダリティと虚性モダリティがあることを指摘している。しかし,ここでは,モダリティではなく,語にふたつの側面があると考える。「形」と言い切ることは,固定的なものととられる恐れがあるが,言い切ったうえで中間的なものがあることを指摘したほうが概念が明確に示されると考え,この名称を用いる。

ここまで言い切り形としてル形を取り上げてきたが,言い切り形にはタ形もある。三上,寺村の活用表では,まず,テンスによって動詞をル形とタ形に分けた上で,それぞれに分類される活用形の違いをムードとして扱っている。しかし,そうした活用表を提示した寺村は,一方でタ形にムード性の高い表現があることを指摘している。たとえば,停留所でこれから乗るバスを目にして「バスが来た！」と叫ぶ場合や,「今日は3時から会議があった。」と3時前に言う場合等である。しかし,これらのタ形については,金水(2001),定延(2010)が基本的にはテンスの枠組みで扱うことが出来ることを指摘している。タ形にムード性の高い表現があることは事実だが,ここでもル形とタ形の対立はテンスと考える。

2.3　動詞言い切り形のふたつの形（叙述形と概念形）

動詞の言い切り形の形（活用形で言うところの連体形と終止形）が文の中で取る位置はいろいろである。叙述形,概念形の違いは,この文内での現れ方によって知ることができる。そこで,ここでは,言い切り形が文の中でどのように使い分けられているかということとその動詞の陳述度について考える。

まず,「行くがいい」「知るに足る」「見ると聞くとは大違い」のように格助詞を伴う言い切り形は,本来名詞の格関係を示す格助詞を伴っているので,話し手の主観を表すムードはもちろんのこと,アスペクト,テンスも含まない。さらに,連用形から派生した名詞と違って,形容詞はもとより連体修飾の「の」格も受けない。すなわち,連用形の名詞では「（布のノビ）を調べる」というように,「名詞＋の＋連用形」という形があるが,言い切りの場合,「日程のノビルに任せる」は（（日程がノビル）に任せる）ということで,「名詞＋の＋言い切り形」という形ではあり得ない。また,連用形のテ形の「見ての楽しみ」「村をあげての祝い」とい用法は,言い切り形で同様の表現はしにくく,「なぐる,けるの乱暴」といったセットになった表現や,「まぜるなどの工夫」と「など」を用いてセットを暗に示す表現を取って,ことがらを並べ立てるようにするのが普通である。三上（1959：148）は,似た語句をふたつ並べると,対置によって形の安定を得てSyntacticになると述べている。

動詞が形式名詞を伴う場合には,言い切り形の陳述度を一律に論じることはできない。どんな形式名詞が接続するかによって陳述度は変わってくる。渡辺が指摘したように,たとえば,「食べる人」「食べる時」「食べるところ」「食べるもの」といった場合には,「食べる」には話し手の意向は関わっていない。ところが,「ため」「よう」「はず」等の形式名詞が接続すると,言い切り形の陳述度が高くなる。しかし,どういう形式名詞の時に陳述度が上がり,どういう形式名詞の場合には陳述度が下がるかを明確に言うのは難しい。

(11) 彼が話すのは,まちがいだ。
(12) 彼が話すことは,まちがいだ。

用例 (12) は二義的である。すなわち,彼が話す内容と,彼が話す行為自体を指す場合とがある。(11)は行為しか意味しない。評価を表す「いい」「正しい」「たしかだ」「本当だ」「まちがいだ」といった語が述部に来る時に,こうした多義性が生じる。この場合,話す内容の解釈の時には名詞性が高く,話す行為の解釈の場合には動詞性が高いので,後者の陳述性が高いと考えられる。この違いは,「ガノ可変の有無」(三上 1959,1987 : 45-47)によって知ることができる。「ガノ可変の有無」とは,「私 {が/の} 持っている傘は小さい。」という文で「ガ」の「ノ」への言い換えが可能なのに対して,「電車が来るのが遅れたので,・・・」という文では「電車 {が/の} 来るの {が/＊の} 遅れたので」とはならないことをさす。次の文を見てみよう。

(13)あなたが持っているので書いてみなさい。
(14)あなたが持っているので私は買わない。

(13) の文では,「あなた {が/の} 持っているので書いてみなさい。」とガノ可変が可能だが, (14) では「あなた {が/＊の} 持っているので私は買わない。」と,ガをノにかえることはできない。主格の「が」を「の」に代えることができないのは,従属句が名詞化せず,まさに叙述として存在しているからである。そこで,ガノ可変が可能な場合は概念形,不可能な場合は叙述形が用いられていると考える。「ので」を理由の接続助詞とする人もあるのはこのためもあるだろう。 (13)(14)文の違いは,次のようにアクセントやポーズの置き方にも示されている。

(13)’あなたが持っているので書いてみなさい。
(14)’あなたが持っているので　私は買わない。

しかし,(13)文には(14)’のアクセントを用いることも可能なので,アクセントを識別の条件にすることはできない。同じ「の」が使われていながらそれを読み手,書き手が異なる意味に解釈できるのは,前後の文脈に加えて,「の」の前の動詞の叙述性が異なるからだと考えるが,こうした同じ形式名詞を用いる文で動詞の叙述性が異なるということをガノ可変の有無によって知ることができる。

形式名詞が受ける言い切り形の陳述度は,形式名詞に続く語の性質によっても変わる。次の文を比べてみよう。

(15)あなたが持っているのが安心だ。
(16)あなたが持っているので安心だ。

上の文で,どちらも同じ形式名詞の「の」が使われ,ガノ可変ができない。しかし,そうした共通点があるにもかかわらず,「持っている」の陳述度は(16)文の方が高いと感じられる。上のふたつの文の違いは「が」と「で」にしかないのだから,陳述度の違いはそこから生じていると考えられる。(15)文では,名詞化された表現内容を「が」が受けることで,述語に対して主格という明確な役割を果たしている。ところが(16)文では,「だ」の連用形の「で」が表現内容を受けることで,無色の状態で述語にかかっている。述語の方から見れば,その叙述性がさえぎるものなく従属句にも及んでいると言える。ちなみに,寺村(1984)は,ガノ可変ができない「ハズ」「ワケ」「トコロ」「ツモリ」等の「形式名詞＋ダ」を助動詞とし,三上(1953)は,「手紙{の・が}来たのが遅れたのだ」のふたつ目の「が」はガノ可変ができないことから「のだ」をひとつの準用言とみなした。

以上見てきたように,言い切り形に形式名詞が接続する場合には,ガノ可変の有無や形式名詞に続く述部の叙述内容によってその陳述度がかわる。名詞の前の動詞にテンスの対立がある場合に陳述度が高いという考えもあるかもしれないが,先にあげた(9)(10)の例では,どちらの解釈にも「話す一話した」というテンスの対立は可能だから,テンスの対立の有無が直接陳述性に影響しているとは考えにくい。「話す」「話した」はそれぞれモダリティ性を持ち,テンス,アスペクトはモダリティと交差するものではあるが,テンスがモダリティに包含されるものとは考えない。

次に,引用で用いられる言い切り形の陳述度を考えたい。まず,直接話法と間接話法の違いを考える必要がある。

Wierzbicka,A.(1974)は,直接話法と間接話法の意味するところが同じではないことから,引用によって他者の言葉を伝える人は,他者の役割を演じ,その他者とその場を聞き手に思い描かせようとする,すなわち,直接話法の基本的な性質は,その劇のような性格にあるとした。Li,C.N.(1986)は,Wierzbickaの,伝える人は,元の発話者のようにふるまうという理論を用いて,英語の直接話法と間接話法を次のように区別する。

直接話法　reporter-speaker identifies reported speaker

reporter-speaker	⇒	acts as reported speaker	→	form content non-verbal	→	direct reported speech

messages

間接話法　reporter-speaker identifies reported speaker

reporter-speaker　→　form

non-verbal　indirect

messages　reported

reported　speaker　→　content　speech

図1-1　直接話法と間接話法のありさま(Li1986：38)

すなわち,直接話法では,伝達者が元の話し手のようにふるまうことで,聞き手に元の話し手が表現しているように信じさせる意図を持ち,一方,間接話法では,伝達者は元の話し手の役割を演じることはなく,聞き手に元の話し手の内容のみを伝え,そのコメントとして,形式（たとえば,イントネーション）や非言語的メッセージを通して伝達者の内容についてのフィーリングを伝えるという。先にあげたGivónのふたつの動詞の統合度を一覧にした表1-2では,直接話法はもっとも統合度が低く位置づけられていた。すなわち,直接話法では引用句の動詞の陳述度が高いということになる。

では,日本語の直接話法と間接話法において,動詞の陳述度はどのように考えたらよいだろうか。野田尚史（1989）は,次の２文を比較し,ア）の文を「真性モダリティ」が示されている文,イ)の文を「虚性モダリティ」の文と考える。

ア）沖縄の海で泳いでみたいなあ。

イ）大空を飛んで,自分の住んでいる街を見てみたい。そんな思いから,愛媛県喜多郡内子町川中,農林業西谷一徳さん（四一）は,自宅前の山林と・・・。（同131）

「真性モダリティ」とは,発話時の話し手の感情表出で,１人称,現在形,平叙文,そして,文末に使われるという条件を持つ。一方,真性モダリティを持たない文が表す「虚性モダリティ」は,こうした条件を満たさない。「虚性モダリティ」の文は,映画,テレビのあらすじ,料理の作り方,機械の使い方等の手順の説明に用いられ,①丁寧体が現れない,②「たい」の人称制限がない,③ほかの文の従属節になり得る,④引用節で使われるといった特徴がある。この考えは大筋では納得できるものだが,たとえば,「西谷さんは,大空を飛んで,自分の住んでいる街を見てみたいと言った」という文の「見てみたい」は,上の条件からすれば,虚性モダリティと考えられるが,「見てみたい」に注目すれば真性モダリティととることができる。藤田（2000）は,「引用句「～ト」の中の引用されたコトバが直接話法と読まれるか間接話法と読まれるかは,それが形式として顕在であろうとなかろうと,伝達のムードを帯びたものと読まれるか否かによって決まるのだと考えることができる」（同150）と述べている。「虚性モダリティというのは,後続文脈の存在に支えられて後続文に取り込まれるような場合が典型だと考えられるので,野田（1989）は,「伝達のムードを帯びたものと読まれるか否か」の条件をあげたものとることができる。

藤田（2000）は,引用の定義として,表現されるべき対象を言語記号で抽象化して描く代

わりに,同等の実物を差し出して伝達行為を行うことを「実物表示」と呼び,「引用」の本質は,この「実物表示」にあたるとした。そして,直接話法と間接話法については,直接話法の表現は,「伝達のムードを伴う「生きた」文を引いてくる形の表現であり,間接話法の表現とは,「生きた」文が伝達のムードを失って,全文の話し手の立場から秩序に従い,引用構文全体の中の一部分へと従属させられたものだ」(同151-152)と述べている。ここにはGivónと通じる考えがみられる。

日本語の引用の場合,直接話法と間接話法の境界は明らかでないことも多い。三上(1963)は,次のような例をあげて,その点を述べている。

> [福沢諭吉]先生はその場で巻紙を取ってかなり長い手紙を書かれて,koreを持って波多野[三井銀行理事]を訪ね,手紙以外のことはwatasiから話し手よく頼んでみなさいtoいうことだった。(高石真五郎)(同137)

直接話法なら,kore,kimiが使われ,間接話法なら,sore,watashiが使われるのが順当だが,この例のように,直接話法から間接話法へ,あるいは間接話法から直接話法へ,話の途中でシフトしてしまうことはよくある。三上は,直接話法と間接話法の共通点と異なる点を以下のようにあげている。

共通点:①ムードが不変である。
　　②テンスが不変である。
相違点:①代名詞等の単語を引用の場面に合うように変更する。
　　②スタイルを下げ,終助詞を切り捨てる。
　　③有題が無題化することがある。

最後の③は,セリフ「私wa・・・した」が間接話法では,「彼は,自分ga・・・したって言ってたよ。」となることを指している。ここでは,言い切り形の陳述度を考えているが,三上のあげる「ムードが不変である」というのは,

吉川氏は,「あなたもやってごらんなさい」と言われた。
吉川氏は,お前やってみろ,と言われた。

のように,間接話法になっても命令法というムードが変わらないことを言う。確かに,形の上ではムードは変わっていない。しかし,次の例にもあるように,ムード表現が使われていることは,その叙述に陳述性があることを保証しない。

> 十日の本紙社説に「みんな<u>歩こう</u>」と出ているが,私は若いころから歩くことが好きで,乗り物はなるべき使わないようにしている。(朝日1986. 10.20　藤田:115)

引用の場合,直接話法と間接話法とは明確に線が引けるものではないが,その典型を考えた時には,藤田のあげる直接話法の表現は,「伝達のムードを伴う「生きた」文を引いてくる

形の表現であり,間接話法の表現とは,「生きた」文が伝達のムードを失って,全文の話し手の立場から秩序に従い,引用構文全体の中の一部分へと従属させられたもの」(同151-152)と考えられ,直接話法の存在する意味は,この「生きた」文を伝達したいという意図にあると考えられる。そこで,陳述のあり方としては,直接話法の場合は叙述形,間接話法の場合は概念形が使われていると考える。

本書では理由を表す「ので」は,語構成の上からは「の」と「で」の二語からなると考える。しかし,「から」「が」「けれども」等,南（1974）のC段階に入る,いわゆる接続助詞と呼ばれるものが接続する場合には,言い切り形の陳述度は高い。それは,「きれいだから」と終止形が現れることからも,また,三尾（1942,1995：279-285）の丁寧化百分率にあるように,接続助詞の前では丁寧体が現れやすいという指摘からもわかる。同じ「が」の接続でも,「行くが　いい」と「彼は行く　が」では「行くが」のアクセントが異なる。

文末の言い切り形は,陳述度がもっとも高い。ただ,時の観念を含まない場合には文末でも陳述を担わない。渡辺（1971）は,言い切り形が陳述度が高い理由について,「言わば陳述素材としての叙述内容は独立性を与えられ,その独立性を契機に断定の陳述が下される」（同 370）と論じている。これに対して,尾上（1979）は,「“断定”“意志”その他の意味を自身の内に帯びているからではなく,このように,他への連続,顧慮を絶した叙述内容の独立性をその意義とするゆえに,終止形は肯定判断文の終止にも用いられる」（同105）とし,終止形に終る命令文が可能である根拠を終止形の素材表示的な意味におく。これは自動車教習所の教官の「ブレーキ」「アクセル」という指示と等しいという。しかし,「ブレーキがおかしい」という場合と「ブレーキ！」という場合の「ブレーキ」とはイントネーションが異なり,終止に使われる語が素材のみを示すとは考えにくい。ここではこうした用法の終止形を叙述形が用いられていると考える。

こうして言い切り形の使われ方を見てみると,そこにはレベルの差はあるが,動詞でありながら話し手の気持ちを表していない名詞性を帯びた用法もあることがわかる。そうしたものをここでは概念形と呼び,おもに終止形に表れる叙述性の高いものと区別した。以上述べたことを整理すると,次の一覧表 1-3 のようになる。

表 1-3　動詞言い切り形の陳述度　概念形と叙述形

概念性が高い

↑　○格助詞を伴う

例：行くがいい。行くに限る。見ると聞くとは大違い。

○文末で「テンス」が関与しない。

例：漱石,明治 X 年に逝く。

○間接話法

例：彼は行くと思う。

○形式名詞を伴う

例：行く人がいない。

行くことができない・

彼が行くのは意外だ。

行くようだ。行くはずだ。行くために金が必要だ。

彼も行くので,私も行こう。

彼が行くのに,私は行かない。

○接続助詞を伴う

例：先に行くから,あとで来なさい。

彼は行くが,私は行かない。

○直接話法

例：彼は「行く」と言った。

○文末

例：僕は行く。早く行く！　君も行く？

↓

陳述性が高い

2.4　形容詞言い切り形のふたつの形（叙述形と概念形）

形容詞にも動詞と同じように概念を表す場合と叙述を表す場合とが認められる。言いきり形が叙述を担う場合は,「いたい」「うれしい」「かなしい」等の心情を表す形容詞や動詞に接続する「たい」が,文末に用いられる場合である。三宅（1934）が語気の強さと指摘した形容詞の促音化現象（「いたっ！」「あつっ！」）は,これに当たる。一方,言い切り形が概念を表すのは,動詞と同様,格助詞を伴う場合,直接話法を除く引用句内,形式名詞の名詞性が高いものに接続する場合と言える。

(17) うまい, まずいは口にしないことにしている。
(18) いい, 悪いを問題にしているのじゃない。

言い切り形が助詞をとる際,動詞は単独でもこうした用法が可能だが,形容詞の場合は,「赤いは酒のとが」「色の白いは七難隠す」といった慣用句か,上の(15)(16)のようにペアを組んで使われるのが一般的なようだ。古典語では,「新しき年」「悪しきを捨つ」のように形容詞の連体形が名詞修飾や名詞的用法に用いられたが,イ音便化と,連体形が終止形と同形になることにより,現代語では「色の白きは」と言わなくなっている。

注

（1）本節は三枝（1993）の内容を発展させたものである。

（2）尾上圭介（1982）や高橋太郎（2005）は,こうした用法を細かく分類している。

第２部　　語形から機能を知る

第２章　「ので」「のに」「だけで」「だけに」の分析 (1)

1 はじめに

「ので」と「だけに」,「のに」と「だけで」には,次のように似た表現がある。

（1）外国へ旅行するので,まとまった金が必要だ。
（2）外国へ旅行するだけに,まとまった金が必要だ。
（3）ちょっと旅行するのに,そんなに金が必要か。
（4）ちょっと旅行するだけで,そんなに金が必要か。

「ので」と「のに」,「だけで」と「だけに」にも,相互に意味的に近い表現がある。

（5）旅をするので,まとまった金が必要だ。
（6）旅をするのに,まとまった金が必要だ。
（7）ちょっと旅行するだけで,そんなに金を使うのか。
（8）ちょっと旅行するだけに,そんなに金を使うのか。

第２章では,「ので」「のに」「だけで」「だけに」の分析を通して,語形からそれぞれの語の意味と機能を考えるということを行いたい。このよっつの語を取り上げるのは,形に共通するところがあり,また実際,上の例に示したように意味的にも共通しているためである。あるひとつの言葉の意味が,同義の語との異同によって明らかになるように,これらの語の意味も,よく似た語との比較によって明らかになる部分があると思われる。「ので」「のに」は,従来,それぞれ既定の順接条件,逆接条件の意味を持つとされている。また,「だけに」にも因果関係を示す役割があるとして,他の理由表現とどう異なるかという視点で取り上げられることが多い。しかし,ここでは,上のような用例の存在から,これら四語が単語として別々の機能を持っていると考えるのではなく,「の」「だけ」「で」「に」という語の組み合わせから全体の意味が成立していると考える。こう考えることによって,この四語それぞれの意味と機能について,より体系的で妥当性のある解釈が可能になると思われる。

2「ので」「だけで」の語構成

理由の「ので」を品詞的にどう見るかについては,様々な見解がある。たとえば,①準体助詞の「の」に格助詞の「で」が接続したと考えるもの（たとえば,永野（1951）),②すでに接続助詞として一語と取るもの（たとえば,三尾（1942),日野（1963),寺村(1981)),

③名詞化辞の「の」に「だ」の連用形が付いたと考える立場（松下（1930）, 日下部(1968), 氏家(1969)）, ④「のだ」の中止形とするもの（三上（1953）, 国広（1992））等である。筆者は, 理由の「ので」を接続助詞とすることについて, それを否定するものではない。「ので」が接続助詞化しているという原口（1971）や吉井（1977）の通時的な考察もある。しかし, 語構成の面からは,「ので」は「の」と「で」の二語からなると考える。そして,「ので」の「の」は, 格助詞の「私の本」の「の」とは異なるが, いわゆる準体助詞から「のだ」の「の」までの用法の広がりを持ち, また,「ので」の「で」は助詞ではなく,「だ」の連用形の性格が強いとみる。すなわち, 上の③の立場に近い。ただ, 松下(1930)とは「ので」に「のだ」の活用形としての側面も含まれると考える点で異なり, また, 氏家（1969）とは準体助詞的な機能も「ので」の「の」に認める点で異なる。上の②と④の「ので」を一語とみる解釈については次のように考える。

まず, ②の接続助詞とみる立場については, 三尾（1942）と日野（1963）を取り上げる。三尾は,「あなたが言ったから行ったので, 行きたくて行ったわけではない。」のような文の「ので」は, 1)「から」に近い意味はないこと, 2)「のでして」と丁寧な表現になりえる, すなわち, 形態そのものが文体性を持っているとして別立てにし, 理由の「ので」は接続助詞とする。すなわち, 三尾の主張は,「ので」の語構成を問題にしているというより, 上の②と④とは異なるものだというところにある。しかし, 筆者は, ②と④の用法は, もともと同じ語形が文脈によって使い分けられていると考える。一方, 日野は,「ので」が二語ではなく一語からなる根拠として,「あまり暑いので行かなかった。」という文において,「あまり」は「ので」にかかっていて,「あまり暑いの＋で」と見ることはできないと主張している。しかし,「あまり暑いのは苦手だ」という表現もあるから,「あまり＋形容詞＋の」という語構成は可能だと考える。

④を主張する三上は, 終止形に続くものだけを接続助詞とするので, 連体形に続く「ので」「のに」は準詞「のだ」の連用形とみる。その理由として, 三上は, 1)「ので」も「のに」も軟式（三上の用語で連体法に収まること）であること, 2) ガノ可変を失っている「の」は「のだ」「ので」「のに」のみっつだけであること, をあげている。この指摘は,「から」と「ので」「のに」との陳述性の違いを厳密に定めたという点で重要なものである。ただ, このふたつの条件を満たすものは「ので」「のに」に限らない。たとえば,「だけで」も次のように連体法に収まる。

(9) a 雨が降るから（遠足をやめた連中）が・・・
　　b（雨が降るので遠足をやめた連中）が・・
　　c（雨が降っただけで遠足をやめた連中）が・・・

また,ガノ可変も,「ので」「のに」に限らず,述語全体を受ける「の」でも起こらない。次は「のが」の例である。

(10)どれがいいか。― 君｛が/の｝持っているのがいい。
(11)鍵をどこに置いておこうか。 － 君｛が/＊の｝持っているのがいい。

こうした性格を持つ「の」が「ので」「のに」以外にもあるということは,「で」と「に」が問題なのではなく,むしろ「の」で受けている部分がガノ可変に影響していると考えられる。一方で,このことは,「ので」「のだ」が二語からなるという傍証にもなろう。「君が持っているのが安心だ」と「君が持っているので安心だ」という二文は,「が」と「で」が違うだけである。語形の共通性を考慮せず,機能の面からみて後者のみ接続助詞とするのは,語構成を考えると疑問である。

「だけで」が「だけ」と「で」の二語からなると考えることについては,名詞「丈」が起源とされる「だけ」[(2)]のほうが「の」より名詞性が強く感じられるので異論が少ないだろう。「ので」と「だけで」が二語からなるとなれば,この二語は「で」という共通の語の意味と機能を共有していることになる。そこで,次に,「で」の意味と機能について考えてみる。

3「で」の意味と機能

山田（1922）は,格助詞の範囲を広くとって,「顔は人で,心は鬼だ。」のように,普通,活用形の連用形とされるものまでを格助詞に含めた。一方,松下(1930)は「で」を助詞に含めず,動助辞,いわゆる助動詞に入れている。「小刀で鉛筆を削る」は「小刀をもって」の意味にとれるし,「火事で家が焼ける」は,「原因が火事であって」と置き換えられ,この「で」にはたしかに叙述性があると認められる。さらに松下は,「東京で学問する」の場合も,「東京において」と解してはならず,「場所が東京であって,そうして学問する」と,場所の概念を主体とした叙述と考える。時枝（1950）は,「庭で遊んでいる」の「で」は格助詞とするが,「耳で聞く」については,指定の助動詞とも考えられるとして,結論は述べていない。「台風で家が壊れた」という文で,この「で」を道具格の「で」か,「だ」の連用形かを議論することにさほど意味があるとは思えない。道具格の「で」も「だ」の連用形の「で」も,もとは同根とみることもできる。形が同じで,しかも意味が同じならあえて分ける必要はないだろう。助詞と助動詞を分けるものは,助詞が格関係を示すところにあると考えるなら,構文によって,「で」が助詞的性格を示す時と,助動詞的性格を示す時とがあるとみること

ができる。理由を表す「ので」のように,名詞成分に「で」が接続し,しかもそれが,主文の述語の格成分にはなり得ない時には,助動詞的性格が強いと言える。

4「に」の意味と機能

「に」は,幅広く用いられるため,文脈によって以下の右にあげたような意味によって分類されることがある。

遊びに行く。	↑	目的
先生になる。		
京都に行く。		動作対象の人,場所
君に本をあげる。		
壁にポスターを貼る。		
京都にある。		場所,時間
机の上に本がある。		
9 時に始まる。		
地震に驚く。		原因
雨に濡れる。		
元気に働く。	↓	

山口(1980)は,「に」のもっとも基本的な意味は「場面性」にあるとしている。国廣哲彌(1962)は,もう少し具体的に「に」の意義素を「密着の対象を示す・副詞的意義質」と考える。前に来る語が「場所」「時間」を表す場合には,まさにその時間,場所を指し,「影響・作用を受ける」場合には影響を与えるものに密着すると考えるのである。文の中での「に」のふるまいを考える時には,基本的な意味は密着性にあるとしても,こうした幅広い用法の「に」のどれを助詞とするか助動詞とするかということが問題となる。さまざまな分け方がなされているが,「10 分後に来てください。」と「すぐに来てください。」の「に」に本質的な差は認めがたい。松下(1930)は,「乗る,貸す,居る」等の必ず何かに依拠して行われる動作がとる「に」だけを静助辞(いわゆる助詞)とする。そして,「息子を医者にする」に見られる「する,なる」等の一致性の動詞,もしくは一致性を帯びた動詞(たとえば,「嫁に行く」「売りに行く」「刺身に切る」)がとる「に」は断定の動助辞(叙述性のある助辞の意味で,いわゆる助動詞)として,助動詞の用法を広くとらえる。山口(1980)は,「に」が格助詞としての関係表示機能を句と句の関係に広げ,指定の助動詞性を帯びたと考える。時枝(1950),日下部(1968)は,「に」と「で」はむしろ「だ」の変化形とし,日下部は,格

助詞相当の機能もそこに認める。「食べるのに箸がいる。」と　「食べるのに太らない。」という二文を,片方は助詞の「に」で目的を表すとし,片方は「のに」という逆接の接続助詞とするのでは言葉を構造的にとらえられない。「電話を受けながらメモをとる。」と「電話を受けながら人に伝えない。」が順接と逆接という別の意味に解釈されるからといって,「ながら」の品詞を別に立てることはしないし,「食べるために箸が要る。」と「食べるために太る。」にも同じことが言える。ここで問題にしている「のに」についても,語形の同一性から,基本的な意味は共通しており,前後の文の意味と構文によって異なる用法を示すと考えるのが妥当と考える。ただ,「食べるのに箸が要る。」の場合は,たしかに格成分として助詞的性格が強く,「食べるのに太らない。」の場合は,叙述性が感じられる。これについては次節で検討する。

３節と４節で,「で」と「に」はともに「だ」の連用形と考え得ることを示した。「で」と「に」とで異なるところは,「で」は動詞の中止形と同様,叙述が途中で止まり完結していないので,前件はことがらの発端,きっかけを意味する。一方,「に」の場合は,後件のことがら,動作の成立する「場面」を示す意味合いが大きい。次の例文で,(12)(13)のｂ文はいずれも前件が副詞句のように後件に係っているが,ａ 文は,前件と後件の関わり方が異なるのが感じられる。

(12)ａ人を増やすだけで,いい仕事ができる。
　ｂ人を増やすだけ,いい仕事ができる。
(13)ａこういう人は練習するだけに,上手になる。
　ｂこういう人は練習するだけ,上手になる。

次に,「の」と「だけ」という名詞相当語の意味と機能について考えたい。

5 「の」「だけ」の意味と機能

「の」にはさまざまな用法がある。「私の本」のように連体修飾語を作ったり,「戦争のない世界」のように主格を表したりする「の」は助詞と定めて問題がない。さらに「の」は,次のように「もの」「ひと」「ところ」等,形式名詞とよばれるものに置き換えられる。

(14) 私はきのう学校で花子に本を渡した。
　　私がきのう学校で花子に渡したのは,本だ。（もの）
　　私がきのう学校で本を渡したのは,花子（に）だ。（ひと）
　　私がきのう花子に渡したのは,学校（で）だ。（ところ）
　　私が学校で花子に渡したのは,きのうだ。（とき）

私がきのう学校で花子に渡したのは,無茶だった。（さま）

そこで「の」は,こうした名詞の意味が抽象化されたものと考えることができる。ここで問題となるのは,こうした準体助詞とよばれる「の」と,いわゆる「のだ」の「の」とを区別するのかしないのか,もし区別するならその基準は何かということだろう。

(15)私が持っているので間に合わせよう。
(16)私が持っているので,心配しなくていい。

従来,この二文を区別するために,例文(15)の「の」は体言に準ずるとして準体助詞とし,例文(16)の「ので」は接続助詞とすることが多い。この二文が異なることは,次のような文でも明らかだ。

(15’)私が持っている。それで,間に合わせよう。
＊だから,
(16’)私が持っている。それで,心配しなくていい。
だから

例文(15)の「の」は名詞の「それ」で受けられるが,(16)の「の」は名詞では受けられない。一方,例文の(16)しか理由の接続詞でつなぐことができない。さらに,「おそらく私が持っているので」のような陳述表現は,（16）の「ので」の前にしか来ない。だからこそ,これまで接続助詞として扱われてきたと言える。

たとえば,松下(1930)は,名詞代行の「の」と「のだ」の「の」とを区別する理由として,事物を指すか,事物の動作形容を叙述するかという点をあげている。しかし,こうした違いは,「の」が本来持っているものだろうか。これは,文の中での用いられ方によって違いが表れているのではないだろうか。ここでは,上の二文の叙述性の違いは,「の」の違いではなく,前件の述部の陳述度の差にあると考える。

一般に,終止形と連体形が言い切りの形をとる。しかし,終止,連体という名称は,文の中の位置による区別に過ぎず,動詞の持つ陳述度を識別していない。なぜなら,文の終止に使われる動詞は,「早く食べる！」や「私は行く。」のように叙述性を持つことも多いが,また,「燐は四十四度半で融ける。（三上（1953））」のように叙述性を持たないこともある。そこで,第1章2節で述べたように,活用形の言い切り形,つまり終止形と連体形には,概念を担うもの（概念形）と叙述性のあるもの（叙述形）があると考える。例文(15)の名詞代

用の「の」は概念形を受け,例文(16)のように叙述全体を受ける「の」の場合には叙述形を受けていることになる。このことは,すでに1章で述べたが,次のようにガノ可変の有無と,また,日下部（1961）に示されているように,平板式に限るがアクセントの違いにも表れている。

(15”)私｛が/の｝持っているので（,）間に合わせよう。
(16”)私｛が/＊の｝持っているので,心配しなくていい。

さらに,「の」の前の用言の叙述性の違いとして,読点の必要性,すなわちポーズのあるなしもあげられる。用例(15)ではポーズを置かないのが普通だろう。

次に「だけ」について考える。国立国語研究所（1951）では,「だけ」の用法を,①限度を画する形で程度を示す，②範囲をそれに限定する，と「程度」と「限定」のふたつに大きく分類している。この場合の「程度」にあげられている例は，指示代名詞＋だけ，「～ば～だけ」「～それだけ」「できるだけ」「～だけのことはある」「だけあって」「だけに」で,「限度」の例は，主に格助詞に上接する場合，「だけだ」とその活用形である。大ざっぱに言えば，格の中にあるか格の外に出ているか，すなわち「だけ」が陳述に係わっているか否かの違いである。しかし，実際にはここで「程度」に分類されている「だけ」にも「限定」の意味があり，「だけ」の基本的な意味を「限定」と考えた方が「だけ」の用法全体をより統一的に説明できると思われる。それは，次のように「ほど」と,比べた場合に,いくつかの明らかな相違点があるからである。

(17) 石垣島では屋根がとぶほど強い風がふく。
(18) 何を言っているのかわからないほど声が小さい。

こうした主文の内容の程度を修飾する用法は「だけ」にはない。逆に，次のような量を限定する用法は「ほど」にはない。

(19) 規模が大きくなっただけ，仕事は忙しくなった。
(20) おとなになると好きなだけお菓子が食べられていいな。（朝 90．5．12）

「ほど」と「だけ」が非常に似ているように見えるのは，次の従属句に仮定条件がついて主文の内容がその仮定の程度に応じて変化するということを表現する場合であることが多い。

(21) a 魚は，時がたてばたつほど鮮度が落ちる。
b　　たてばたつだけ
(22) a 考えれば考えるほどわからなくなる。
b　　考えるだけ

これは文全体に変化の意味があるため一見「だけ」も程度を表わすように見えるが，この条件をとった易合，「魚は，時がたつほど鮮度が落ちる。」という「ほど」の文は成立するのに対して，「魚は，時がたつだけ鮮度が落ちる。」という「だけ」の文は成立しない。一方「考えるだけむだだ。」と言えるのに対して，「考えるほどむだだ。」とは言えない。さらに主文が過去形になった場合，次の例にみるように，「だけ」が下接する文は過去形になり得るが，こうした変化は「ほど」には起こらない。すなわち，「ほど」は程度を表わすため，テンスを含まないと考えられる。

(23) a 働けば働くだけもうかる。
b 働けば働いただけもうかった。
c 働けば働くだけもうかった。
(24) a 働けば働くほどもうかる。
＊b 働けば働いたほどもうかった。
c 働けば働くほどもうかった。

従来「程度」に分類されている「だけ」が同じく「程度」の「ほど」と異なることは，次のように指示代名詞で従属句を受ける場合にも観察される。

(25) あの店は高い。が，それだけ品がよいことも確かだ。
＊それほど

すなわち，「だけ」には主文の内容の程度を修飾する用法がないこと，一方，量を限定する用法は「ほど」にはないこと，さらに「だけ」と「ほど」が同じように使える場合でも「ほど」を使った文は基準を必要としない比例表現であり，「だけ」は,基準からの距離を指定する「分量の限定」を表わしていると考えられる。

ところで，「だけ」に先行する部分が可能形や「ほしい」「～たい」等の希望表現，また指示代名詞の場合には「だけ」に二通りの意味が生じる。

(26) 食べられるだけ持って行ってください。
(27) ほしいだけとることができる。

「食べられるだけ」は，「食べられる量」の意味と「食べられる限界いっぱい」の意味とがある。これはアクセントによっても区別される。どちらもことがらとしての内容は同じことを表現しており，後者の場合もある意味で「限定」と言えないことはない。しかし，「できるだけ」の場合には，多用されるためであろうか，すでに「可能なら」という意味の副詞になっていると見ることができる。次の（28）はふたつの意味があるが，（29）の例は述部が時の副詞で修飾されているため，「できるだけ」は分量限定の意味にはならない。

(28) できるだけやらせる。／やった方がいい。
意味１　（できる分量を）
意味２　（可能なら）
(29) できるだけ７月４日に発表してください。

「だけ」は,前に来る名詞を限定する働きがあると同時に,「だけ」が接続することによって句全体を名詞化する形式名詞の働きを持っている。「こと」「ひと」「もの」がさらに抽象化した「はず」「よう」「そう」等と同類と考えられる。そして,「だけ」の本性は過不足のない，そのものという限定にあり，しかもこのことは,「だけ」が名詞に下接する場合のみならず，格の外で陳述に係わる場合にも共通していると言える。

6　「ので」「だけで」の意味と構文的条件

「の」「だけ」「で」「に」が結合した「ので」「だけに」の意味と機能も,基本的にはそれぞれの語の意味と機能を引き継いでいる。そこで,「ので」の「で」の性格には,助詞的なものから助動詞的なものまでが見られる。先の（15）(16)のように,意味でしか区別できない場合もあるが,一般には,助詞の「で」が用いられている時には,前件が後件の格成分になっており,一方,助動詞の「で」が用いられている時には,前件に主語や陳述副詞が来る。すなわち,前件が文になる。

「だけで」の「で」が助詞的か助動詞的かは,名詞が「だけ」に接続する場合を除いて,「ので」以上に判然としない。名詞の場合には,次の例に見るようにその名詞が格成分になっているのか,前件が文であるかは明らかである。

(30) a もの書きだけで　グループを作る。

b もの書きなだけで　大変な収入だ。

「ので」と「だけで」は理由に使われることもある。理由表現としては,従来「から」「ので」がよく取り上げられているので,「から」を含めて考えてみる。まず,「から」の品詞と意味について定めておく。

「友だちが北海道から来た。」という場合の「から」は,起点を表す。理由の「から」を接続助詞に分類する考え方もあるが,もともとは同じものだろう。石垣（1955）による通時的考察もあり,また,現代語に限って考えても,次のような文の違いは「から」自体にあるとは考えにくい。

(31)彼がこう言ってからこうなった。
(32)彼がこう言ったからこうなった。

二文の違いは,「から」にあるのではなく,「から」の前に来るアスペクトにあると考えられる。このように考えると,いわゆる理由の文の「から」も,その前件を後件の事態の起点として統一的にとらえることができる。次の（33）は,岩井（1988）があげている例だが,このような唯一の理由,条件を示す論理文には「から」しか使えない。また,命令文や誘いかけの文に「から」が用いられるのも,命令したり誘いかける時にはその根拠がひとつでなければ勢いに欠けるからだろう。

(33) $3^2=9$,$(-3)^2=9$であるから,９の平方根は３と－３の二つである。（同75）
(34) うるさいから,静かにしなさい。
(35) 天気がいいから,散歩しましょう。

理由の「から」の前には,「好きだから」と用言の終止形（叙述形）が来る。このことは,「から」の前にすでに話し手の主観が表されていることを示す。

次に「ので」では,前件のことがらを,話し手が一歩退いて提示している。

（36）a 朝早く起きて,ご飯を食べた。
b 朝早く起きたので,ご飯を食べた。

a 文は単に二文を接続したものだが,b 文は,前件を「の」で受けて名詞化している。すなわち,前件で述べられていることがらが客観性を帯びて既成の事実として示されていることになる。寺村（1984）は,「「P ハ Q ノダ」という文型は,基本的には典型的な題述文「X ハ Y ダ」という文型と同じものだ」（同 307）と言えるとして,「先行する文,あるいは状況を P として取り立て（言語化するかしないかは別として）それについて説明する（あるいは説明を求める）のが,～ノダの最も一般的な使い方である。」（同 310）と述べている。

また,大津(1993)は,英語の分析を通して,日本語で「のだ」を使うのは,文を静的にし,事象を確認し,観念化するためととらえる。「ので」全体としては,前件の客観性のある事態に引き続いて後件の事態が生じることを表しているので,いわば「こういう状況で」という意味を持つ。松村（1944）には「『ので』は或事実の断定を受けて,それによって下の事実が生ずることを表す」との指摘がある。

「だけで」においては,P 文のことがらが限定される。ほかに多くの可能性があるかもしれないが,ここでは一応他のことは何もない,しないと限定している。（37）（38)文とも「だけで」は前件を限定している点が「ので」と異なる。

(37)昔から親しく付き合っている　ので,　出入りが許された。
　　だけで,
(38)弁償する　から,　勘弁してください。
　　ので,
　　ことで,
　　だけで,

前件,後件のつながりがただひとつの関係で成り立っている時,それは,因果関係のことが多いが,ほかの要素の存在が前提にないため,「だけで」は使いにくい。

(39)雨が降っている　ので,　道が濡れている。
　　＊だけで,道が濡れている。
　　だけで,売り上げが落ちる。

逆に,次のように前件と後件が継続関係になく,対比的背反的な意味を持つ時は,「ので」は使いにくい。

（40）見る　＊<u>ので</u>,　取ってはいけない。
　　<u>だけで</u>,
（41）a　旅行する<u>ので</u>,まとまった金が必要だ。
　　b＊旅行する<u>ので</u>,まとまった金が必要か。
（42）a　旅行する<u>だけで</u>,まとまった金が必要だ。
　　b　旅行する<u>だけで</u>,まとまった金が必要か。

「の」「だけ」とも連体形かつ概念形に接続するので,話し手の主観は「ので」「だけで」節には含まれない。しかし,「ので」節と「だけで」節を比べれば,「ので」節の前は丁寧体に変更可能な点からも「ので」節のほうが動詞に叙述性が感じられる。ただし,どちらも後件には命令や誘いかけの文が来にくいという点では「から」と異なる。

7　「のに」「だけに」[3] の意味と構文的条件

「に」は目的から原因までさまざまな意味を持つが，それに「の」「だけ」が結合した場合も同様に意味の多様性が認められる。動詞に接続する「のに」の用法は，大きく次のふたつに分けられる。

(43) a 車は　赤いのに　決めた。
　　b 信号が赤いのに　止まらない。
(44) a 彼は　歩くのに　杖を使う。
　　b 彼は　歩くのに　彼の息子は車を使う。

従来，a の用法は目的，b の用法は逆接と呼ばれている。そして，品詞の解釈としては目的の場合には，「に」を格助詞と考え，逆接の場合には，①準体助詞の「の」に助詞の「に」が接続したと考えるか（松下（1930）），②接続助詞として一語と取るか（橋本進吉（1959），三尾（1942）ただし，「歯の痛いのに困った」は助詞＋助詞とする），あるいは，③「のだ」の連用形と考える（三上（1953））。しかし，ここでは，「のに」も「ので」と同じように二語からなると考え，その「に」には格助詞としての性格が強いものから助動詞的な性格の強いものまであると考える。「見るのに金が必要だ。」と「見るのに見えない。」の意味の違いは，文脈によってもたらされるとみる。その文脈とは，具体的には，前後の文脈と「の」が受ける前件の述部のアスペクトによって決まる。すなわち，目的の「のに」の場合は，前件は動作文になる（例文（45））。また，後件には例文（46）のように「必要だ」「いい」といった意味の語が来ることが多い。

（45）電車に乗るのに切符を買った。
（46）このほうが持って歩くのに便利だ。

このことは，後件に「必要だ」「いい」といった語が来るから，前件が「目的」の意味に取れると言った方がむしろ正しいだろう。その点で「のに」という語自体には目的の意味は希薄で，基本的には「～際に」といった意味合いしかない。森田（1985）には，外国人の誤用例として「いい成績を収めるのに努力しなければならない。」という文があがっている。「いい成績を収めるのに努力が必要だ。」という表現は可能で，一方，「いい成績を収めるために努力しなければならない。」という文が可能なことからも，「のに」の持つ目的の意味は弱いことがわかる。

前件の述部が状態を表す場合には，次の例のように，「のに」の意味は二義的になる。

（47）皮膚が薄いのにカミソリを当てる。

そして，逆接の場合には，前件，後件に対比的な要素が必要である。そのため，逆接の前件と後件は，対照化が可能な現在の状況のみで，後件に話し手の意向や命令は来ない。

	逆接		目的
忙しいのに	行くらしい。	歩くのに	杖を使うらしい。
	行かなければならない。		使わなければならない。
	行きたい。		使いたい。
	＊行こう。		使おう。
	＊行け。		使え。
	＊行った方がいい。		使った方がいい。
	＊行ってくれ。		使ってくれ。
	行くか。		使うか。

「目的」の「のに」場合は,前件には動詞の言い切り形現在しか来ないが,「逆接」の場合は,タ形,テイル形,さらに,ラシイ,ヨウダ,ソウダ等の表現が可能である。

次に「だけに」を考えてみると,「だけに」には，原因理由の意味合いがあるので,次のように理由の「から」で置き換えられる例も多い。

(48) アンチ巨人の経営者は最近イライラが高まっている｛だけに・から｝，要注意。（日経 90．4．23）

(49) そうはいっても，暴落続き｛だけに・から｝株式や転換社債は，客に勧めにくい。（朝日 90．4．16）

(50) しかし，こうした法改正は中小小売店に大きな影響を与える｛だけに・から｝，野党だけでなく自民党内にも反対がある。（日経 90．4．7）

これらの例では「だけに」を「から」に置き換えても，ニュアンスが異なるという程度の差しか感じられない。しかし，次のような例では，話し手の意図が異なって解釈されるだろう。

(51) 逆にその裏，東北が二死二塁から加藤の二塁内野安打で一挙に本塁を狙った杉田の好走塁は，接戦だっただけにキラリと光っていた
から （朝日 90．3．28）

(52) 道路が混雑しているこのごろだけに，コースの選び方や隊列の組み方など事前の準備が大切です。 だから (KWIC1)

(53) それ（車椅子）は 11 キロでだいぶ軽く，自動車に積んで運ぶことも楽だった。しかし軽いだけに全体がきゃしゃに出来ており，車輪が小さく，わずかな凹凸
から
でもガタガタして乗りごこちは悪く，長く乗っているとおしりや背中が痛い。
（朝日 90．5．18）

(51) の場合「から」で接続すると「接戦でなければ，キラリと光っていなかった。」という意味が言外に存在することになる。すなわち，「から」の場合は，従属句と主文の結び付きが強く，そのほかの理由の存在を話し手は考えておらず,唯一の理由として従属節の理由をあげている感じが強い。しかし，実際には杉田の好走塁はたとえ接戦でなくとも注目に値するものであったに違いない。こうした例の観察から「から」と異なる「だけに」の基本的な意味は,「場面,状況の限定」と考えられる。「高いだけにおいしい。」という文を考えた場合，おいしい (Q) という感情が生起する場面状況はいろいろ考えられる。たとえば「あなたが作ってくれた，肉が国産品である，みんながおいしいと言っている」等である。この P1，P2，P3　といういろいろな場面の可能性の中からひとつの P を，Q という判断もしくは状況の成立に特に関係あるものとして取りあげる，これを「だけに」の基本的な働きと考える。では,この場面の限定とは具体的にはどのようになされるのだろうか。

(54) 穀倉地帯だけに稲の被害は甚大だろう。 (KWIC1)
(55) 人手不足が深刻になっている時だけに新入社員が逃げ出せば，管理職失格の烙印を押されかねない。（日経 90．4．16）
(56) 日本文化の発生の地であるだけに，神社やお寺の数も多い。 (KWIC1)

(54) ～ (56) のように，「だけに」の従属句が主文が成立する空間的時間的な場面を限定している例は多い。しかし，従属句の述部が「とき」や「ところ」を表わす名詞でない場合には，主文と従属句の具体的な意味的関係はいろいろであって特定しにくい。これは「だけに」が取り立てているものが，主文全体の内容を受けている状況場面であることによる。すなわち，主文は取り立て助詞「は」を伴うことが多いが，この「は」で取り立てられているものが「だけに」の述部で限定されることが多いため，格関係が見えにくくなっている。

(57) 三上さんは上村陽生九段が優勝した年に高校選手権に出場した強豪で，スペインでの囲碁普及に大いに力のあった人だけに，その同行は心強かった。（日経 90．5．16）

(57) の主文は「三上さんの同行が心強かった」コトを示し，その同行が心強かった根拠となる状況として，三上さんがどんな人であるかそのひとつの側面を取り立てている。このように「だけに」はその文の「は」が取り立てているものを限定することが多い。また，「だけに」の従属句には,次のように同じ名詞を重ねる表現がある。

(58) 役柄が役柄だけに正直アッちゃんももうおしまいかと思った。 (KWIC1)
(59) ところがことがことだけに，いざとなるとどうも実行に踏み切れないというのが， (KWIC1)

(60) 先生が先生だけにいじめもなかなかなくならないだろう。

こうした例では，ふたつ目の名詞は初めの名詞を質的に規定している。しかし，名詞の表現する内容は明示されないから，その規定の仕方はわれわれの社会の持つ常識に依存している。

ところで，従属句，主文とも形容詞の場合には，「だけに」と「だけ」がかなり意味的に近く感じられる。

(61) a 高いだけ，おいしい。
b 高いだけに，おいしい。
(62) a 会社の規模が大きくなっただけ，仕事は忙しくなった。
b 会社の規模が大きくなっただけに，仕事は忙しくなった。

これは a 文の従属句も主文も属性形容詞のため，その叙述内容の範囲が限定されにくいためであろう。次の例のように, 従属旬の述部が動詞の湯合には, 意味がはっきり異なる。

(63) a お金があるだけ，金の延べ棒を買った。
b お金があるだけに，金の延べ棒を買った。
(64) a 練習しただけ，上手になった。
b 練習しただけに，上手になった。

「だけに」も「のに」と同様, 用法に幅があるが, 基本的には次のふたつが代表的なものだろう。

(65) あなただけに教えましょう。
(66) 緑の保全が叫ばれているだけに, 活発な意見が交わされた。

(65)の「に」は格助詞の性格が強く,「限定」の意味を表し，(66) の「に」は助動詞の性格が強く文の中では副詞的に機能し,「だけに」は接続助詞的に機能して「理由」の意味を表している。しかし, この違いは基本的に文脈による。たとえば, 次の二文は二義的である。

(67) 旅行するだけに, 莫大な金がかかる。

「旅行以外のことではなく, 旅行することにのみ」ともとれるし,「旅行するから」の意味にも取れる。次の文はどうだろうか。

(68) 肉体的精神的に弱い人の場合, たとえ離婚しても生活苦など他の苦労が増すだけ

に・・・

ここまででは,「だけに」の「に」が格助詞として機能するか否かはわからない。次に来る文によって決まる。「苦労が増すだけに,よく考えた方がいい」とも言えるが,この実例は「終わりかねない」と続く。（日経 92.9.18）一般的に,助詞的な「だけに」は,動詞との結びつきが強く,目的語としての役割を持って,ほかではなくその目的語を限定する。一方,副詞的な「だけに」は,後件の成立条件を,ひとつの場面に限定することによって取り立てる。そこで理由の意味に近くなる。動詞の場合は,「だけに」に接続するのは,「ている」形が実際の用例には多い。動詞が言い切りの形で接続するのは「ある」「持つ」「要る」「わかる」や自動詞的な状況表現,また,「必要とする」「経験がある」「課題となる」等のように,動詞が実質的な意味を持たない状態性の表現が多い。形容詞の場合には,「だけに」に接続するのは「高い」「多い」「少ない」等の客観的な属性形容詞が多く,「うれしい」「はずかしい」等の感情形容詞や「ほしい」「～たい」等の願望表現は,現在形では「ので」に,比べて現れにくい。しかし,動作性の動詞や感情形容詞が「だけに」の前に来ないというわけではない。

(69) 高く飛ぶだけに,安全面への配慮が必要だ。
(70) うれしいだけに,言葉も弾む。

ただ,こうして動作動詞が「だけに」の前に来る場合も,それは動作ではなく,ものの性質を表している。このことは,名詞の場合に端的にあらわれる。

(71) 相手が子供だけに,配慮が必要だ。

この場合の「子ども」は,「子供だけにあげる。」の「子ども」とは違って,子どもの性格付けがなされている。つまり,「だけに」の前では,ものの本生,属性が「これだけ」と限定されていると言える。

(72) a？熱があるだけに　外出はやめなさい。
　　b　熱があるだけに　外出はやめた方がよい。
　　c　熱があるので　外出はやめなさい。

このように「だけに」は「から」「ので」に比べて主文に対する従属度が高く,文としての独立性が低い。さらに,「から」「ので」には人称制限がないが,「だけに」は用例を見てみると二人称には使わず,一人称の用例も少ないこと,疑問表現には使えないこと等から,「だけに」が状態的意味にすぐれ,話し手の主観を交えず場面と事実を客観的にとらえる表現と言える。「から」の場合は,主観的に因果関係を結び,「ので」は客観的事実を因果関係でつなぐのに対して,「だけに」は,主文の成立する状況場面のうちからもっともふ

さわしいと思われるものを取り上げるという関係である。その関係は,実際には因果関係であることが多いが,話し手は主観を避けて判断を示すことができるので,客観性が求められる新聞やニュースに用いられることが多い。

これまでの「だけに」の意味的解釈の中から寺村（1991）の説明をあげておく。寺村は,「だけに」について,「この型の文の言いたいことの重点は,『Y についてP（原文のまま：筆者注）』というところにあるのだが,そのことについて聞き手の共感を得るために,『X が P』という聞き手にとって既知の事実を持ってき,『X が P なら,Y が Q なのは当然だ』と論理的な筋道で聞き手を納得させようとするものである。その「論理」というのは,つまり社会的な常識ということである。」（寺村 1991：172）と述べている。ただ,前件は必ずしも既知のことがらである必要はない。寺村氏も述べておられるように社会的な常識で納得できることであればよい。この文型がことがらの本性を取り立てていることが,話し手,聞き手に無意識のうちにも了解されているので,たとえ前件の内容が既知のことがらでなくても自明のことがらとして提示される。提示の仕方に主観が入っていない分,話し手の主張の正当性を高める効果を持つ表現となる。

8　まとめ

以上,語構成の上からは,「ので」と「だけで」,「のに」と「だけに」それぞれのペアに共通するところがあり,一方,いわゆる形式名詞の持つ名詞の性格という点では,「ので」と「のに」,「だけで」と「だけに」が共通することをみた。名詞が共通するということは,さらにその名詞に接続する述部の叙述性にも共通性があることを意味する。そこで最後にそれぞれの語がどんな陳述表現をとるかを見てみる。「のに」や「だけに」には明らかな用法の違いがあるが,ここではそうした個別の用法は考慮せず,接続が可能な場合があるか否かで検討する。基本的には助動詞的性格の「に」の場合に,陳述表現が現れるということが言える。比較のために「から」も加える。

表 2-1　従属節に現れる陳述表現

	から	ので/のに	だけで/だけに
だろう	○	x	x
まい	○	x	x
ようだ（推量）	○	○	x
らしい（推量）	○	○	x
そうだ（伝聞）	○	○	x
つもりだ	○	○	?
予定だ	○	○	○
そうだ（予想）	○	○	○
という	○	○	○

この表で,「から」しか「だろう」「まい」と共起し得ないのは,その接続の形から自明のことであるが,このことはそれぞれの語に接続する前件の述部の主観性という点で,「ので」「だけに」と明確な違いを示している。次に,「ので」と「だけに」の異なるところは,「ので」が推量の「ようだ」以下すべての陳述表現と共起し,一方,「だけに」は,話し手の意思を表すものとは共起しない点にある。すなわち,「限定」できるのはあくまで人が客観的に判断できることがらである。伝聞の「そうだ」は,一見,人の言葉をそのまま伝える完全に客観的な描写表現のように思えるが,日本語の「そうだ」は当の発話者が目の前にいても使われるという点で,たとえば,印欧語の伝聞表現とは本質的に異なったところがある。伝聞というよりその使われ方は「婉曲」に近く,ムード性が高い[(4)]ので,「だけに」が「そうだ」に接続できないと考える。

一方,後件にはどのような陳述表現が現れるだろうか。理由の「から」「ので」の係り方については山口佳也（1982）の考察がある。理由の「だけに」は「ので」とほぼ同じ条件と言える。これは,「から」では前後に陳述表現が現れるところから前件後件が対等に節として呼応しているのに対して,「ので」「だけに」では「から」に比べて前件に叙述性がない分,主節の叙述性が文全体を支配していることになる。ただ,「から」「ので」の場合は,そこで文を言い終わることもできるが,「だけで」「だけに」はできない点,また,「から」「ので」の前の述部は丁寧体になり得るのに「だけに」はなりにくい点から,理由表現に限って言えば,「から＞ので・のに＞だけで・だけに」の順で,陳述度が低くなる。

「だけで」「だけに」と「ので」「のに」の違いは,「は」と「が」の係り方にも現れている。

(73) 母｛は・が｝楽天的な性格なので,父は大きな事業に取り組めた。
(74) 母｛は・が｝慎重な性格なのに,父は大きな事業に取り組めた。
(75) 母｛＊は・が｝楽天的な性格な｛だけで・だけに｝,父は大きな事業に取り組めた。
(76) 母｛は・が｝楽天的な性格だから,父は大きな事業に取り組めた。

「だけで」「だけに」を含む従属句では,主語は「が」によってしか示せないことがわかる。野田尚史（1986）は,南不二男(1974)の従属句の分類を「は」と「が」の係り方の観点から見直したもので,その分類においてもAからDまでの4段階が区別されている。A段階は「ながら」「まま」等の「は」「が」の係り方に影響を与えないもの,B段階は「たら」「ば」等で「が」は従属節に係りがとどまり「は」は文末まで係る。「ので」「のに」「から」はC段階に含まれ,C段階では「は」は次に別の主語が現れるまで係る。ここで取り上げている「だけで」「だけに」は野田の分類ではB段階ということになり,「は」と「が」の係り方にも違いのあることがわかる。そして,この違いは,先にあげたそれぞれの語が共起し得る語の陳述度に対応していると考えられる。

注

(1)本章は,三枝(1990)(1993)の内容に加筆したものである。

(2)『日本文法大辞典』1971：427

(3)「だけあって」との違い

「だけに」とよく似た表現に「だけあって」がある。

・かれは　わかいころ　からだをきたえただけあって，いまでもしゃんとしている。(鈴木重幸 1972：241)

・城はベテランだけあって，歌は実にうまい。(KWIC1)

両者の大きな違いは，「だけあって」は，動詞によって前件後件が結び付けられ，「だけに」を特徴付ける場面性の性格が従属句にない点である。用例を観察する限り「だけあって」の「だけ」は，状態表現に下接してその叙述内容の限界を示す場合の意味に近い。すなわち，「従属句で叙述されることに相当する意味価値を有して」といった意味合いがあり，そのためか次の例にみるように従属句と主文のつながりが否定的な意味合いを持つことはない。

・あい手が子供だけに，しかるわけにはいかなかった。(鈴木 1972：241)

＊だけあって，しかるわけにはいかなかった。

・日本棋院の台所事情を知るだけに，口に出せなかった。

＊知るだけあって

(4) 三枝(1989)で論じた。

第3部　語形の体系性　「って」の分析

第3章　「って」の構文的位置づけ―「と」による引用と「って」による引用の違い[1]

1　「って」の多様な用法

「斉藤，今度名古屋に転勤なんだって。」，あるいは，「今日中に届けるって話です。」という文に用いられる「って」という表現を我々は日常頻繁に使用する。外国人のための日本語教育でもこうした「って」は取り上げられているが，もっぱら話し言葉で使われることが指摘され，また，その意味は，「って」を含む文全体の意味に応じて「と」「という」「というのは」等に置き換えて解釈されることが多い。

「って」は歴史的には「とて」の変化したものと考えられる（湯沢 1957，此島 1973）。そして，この「て」は，助動詞「つ」の連用形がもとと言われる（松村編 1971）が，用言にしか接続しないので，「と」と「て」の間には動詞が省かれていると考えられる。もとより時枝（1950）のように「と」に活用を認めればそうした動詞を想定する必要は，接続の上ではない。ただ，その場合でも，「と」は抽象的な意味しか持たないから，話し手は「と」と「て」の間に，その文の意味にあわせて具体的な意味を補って解釈するのが普通である。たとえば，湯沢（同 596）には，江戸言葉の例として次のような文があげられている。

(1) うぬひとり游げるとって，人の心もしらずにこんな趣向をつけるといふがあるものか
(2) いそいでくるとって，ついあそこでころびやした

(1)の「とって」は，「游げると言って」，(2)は「来ようとして」の意味にとれる。また，現代語でも次のような例がある。

(3) 人を愛したいって気持ちだけは充分持っている。
(4) どう考えたって，こっちの方が大変だ。

(3) には「いう」の他に「思う」という動詞を感じ取ることができるし，(4) の「って」には「たとしたって」と「する」を差しはさむことができる。しかし，一般的には，「って」に「言う」の意味が見出されることが多い。

(5) 冬場ならマスクって手があるんだが。（家族熱）
(6) 自分が正しいからってあんまりいばんなよ。（冬）

実際，次のように，「いう」が顕在化して「って」に続く場合も多い。

(7) 金を貸してくれっていう奴がいる。（冬）
(8) でも確かに乗ってきたんですよ。上段がいいからって言って，僕と替わったんだから。（三毛）

こうした用例の存在から，現代語では「って＝とて」なのではなく，「って」が場合によって単に「と」に置き換えられる場合と，動詞の性格が加わった意味を持つ場合とがあることがわかる。

一方，「って」の後ろへの係り方はいろいろである。まず，次のように名詞に接続する場合がある。

(9) パンダ見に行かない？－パンダって年か。（冬）
(10) この子どうかなって女の子見つけたら教えなさい。（冬）

また，次のように，「って」の後ろに文が来る場合もある。

(11) 看護婦さんて，ふた通りあるらしいわよ。（びっくり）
(12) 納豆に出刃包丁突き刺すってどういうことよ。（冬）

こうした例は「というのは」で置き換えられることが多い。この使い方は提題の「は」と共通するところがあり，それが係助詞として扱われる所以である。さらに，文末に現れて，あたかも終助詞のように機能する「って」もある。

(13) これ兄貴だってさ，オレだとばかし思ってたら（家族熱）
(14) あの年で，新しいとこ入ったって，うまくいかないって（家族熱）

上の（9）～（14）の中で「と」に置き換えられるのは（13）ぐらいしかない。こうした観察から，「って」は，「と」に，比べて前後の語句，文脈に依存して使われる面がずっと大きいことがわかる。「って」の基本的な意味を考えるに先だって，「って」と関係の深い「と」の基本的な意味をまず考える。

2「と」の用法と意味

「と」の語源については，小林好日（1936）が次のように述べている。

『「と」は「それ」「されば」などの指示の意味のある「そ」「さ」と語根を同じくするもので（s－t の変化），「とかく」「とまれかくまれ」「とある家」などの「と」とも関係があり，名称・状態・目標等を示す語に添えて「それ」と指示するために用いるのが本義，引用の語句に「云々と云った」と云うのは，上の句をさして「さう云った」と云うこと』（同 229）

「と」の用法については，一般に，格助詞，接続助詞，並立助詞に分けることが多い（たとえば,国立国語研究所（1951）,松村編（1971）等）。どういった用法を格助詞とみるか,接続助詞とみるかについては，人によって多少異なるところがあるが，これまでの扱いで注目したいのは,「と」に助詞の働きだけではなく,活用を考える文法家がいる点である。松下（1930）は，副詞的に使われる「と」「に」をそれぞれ独立した助動詞「と」「に」の活用形と考えて，「と」「に」に叙述性を認める。時枝（1950）は,「と」や「に」を「だ」の活用形と考える。

表 3-1　時枝（1950）の「だ」の活用形

活用形／語	未然	連用	終止	連体	仮定	命令
だ	で	で に と	だ	な の	なら	○

時枝は，「だ」の連用形である「と」の用例として，たとえば，次のような文をあげている。

①隊伍整然と行進する。

②花が雪と散っている。

③「今日は行かない」と云っていた。

④腰をかけると，窓を閉めた。（同①-③156,④ 192）

ここで扱われている「と」は，松下の副詞を作る「と」よりさらに広い。③文は，「引用」の「と」，④文は接続助詞とされているものである。これらは，いずれも連用修飾的に述語に係るという点で，明らかに共通している。「と」の用法をすべて指定の助動詞

「だ」の連用形として説明するには，その係り方に違いがあるように思われるが，語源的にも格助詞の「と」とそれ以外の「と」とを分けなければならない必然性はない。そこで，ここでは従来の品詞分けにこだわらず，できるだけ統一的に「と」の意味と働きを考えることにする。

「と」の用法のうちで，副詞的に働く「と」は，「自然と，ゆっくりと」のようにその語幹部分に名詞，副詞が来る場合が多い。また，「どっと笑う。クスクスと笑う。」といった擬態語・擬声語を受ける「と」も大きくは副詞に含まれるだろう。朝山（1931）は,古代語における「と」と「に」を比較しているが,それによればすでに万葉集において,①「とどと」「ひしと」「そよと」,②「しののに」「ゆくらゆくらに」「しほほに」,③「み山もさやに」「手珠もゆらに」と,「と」「に」の使い分けがあったことがわかる。朝山は,①の「と」は,「最も端的に音響を模写したいはば純粋擬音辭たる語幹が形成辭を取って直ちに構成された語」,②③の「に」は,「語幹の音義が前者ほど感詞（exclamation）的でなく,かなり一般語的な手續きを経て成立し,意義も形態も若干普通的な固着性を有する」(同8）と分析している。小林幸江（1979）は，現代語の「に」のつく副詞と「と」のつく副詞を比較検討し，結論として「「に」のつく副詞は，述語との結び付きが強く，述語の様態を叙述的に表したものである。（略）これに対して，「と」のつく副詞は，文の構成成分としては独立の関係にあり，擬声語，擬態語，及び句を引用して，述語の状態を具体的，描写的に表したものである」(同 142) と述べており,日本語の用法の連続性が見て取れる。ここでは，擬声擬態語を受ける「と」と，引用の「と」は同列に扱われている。「クスクスと笑う」「シクシクと泣く」には，「笑い方」とともに実際の笑い声も示されており,また,「きっぱりと断わる」「そよそよと風が吹く」「さらさらと砂がこぼれる」は，主文の事態，行為に伴う動きの様子を取り出しており,どちらも副詞句として述部に係っている。

引用の「と」を考えるにあたって次の文を比べてみたい。

（15）a　（私は）フグを食べたい。
　　b　太郎は　フグを食べたがっている。
　　c　太郎は　フグを食べたい　と言った。
　　d＊　太郎は　フグを食べたがっている　と言った。（鎌田修 2000：196）
　　e　（花子は）太郎が　フグを食べたがっている　と言った。

ｄの「太郎はフグを食べたがっていると言った」が言えないのに対して,「太郎はフグを食べたいと言った」が言えるのは,引用句の中では,元の発話者の視点からしか発話が行えな

いためと考えられる。こうした引用構文の二重性については,砂川(1988)やビルマン(1988)に指摘がある。ビルマンは，「「と」が受けるのはそれ以前の陳述を含む要素であるが，「と」の統括作用によって，ひとつの叙述内容が生み出され完結するために，その叙述内容は「素材」になる。」（同 48）と述べ，「引用の「と」の働きによって「引用文＋と」の成分は叙述内容の中に位置する，すなわち発話（地の文）の中でのコトにあずかっている」（同 52）と指摘している。「と」によって，「と」の前の陳述性がなくなり，叙述が名詞化，客観化することは,三上が終止形に接続する故に接続助詞とした「から」についても言える。

(16)a 雨が降るから（遠足をやめた連中）が　映画館へ押し寄せた。
　　b（雨が降るからと遠足をやめた連中）が　映画館へ押し寄せた。

b 文の「から」は「と」があることによって,主節に係っていかない。「と」節は，それが引用文であっても副詞句のように主文の述語に係っていく。
ところで,主文と「と」を持つ句との間に時間的な前後関係があると,「と」は，接続助詞的な働きをするようになる。次の（17）の文は，直接引用にも，また，接続助詞的にも解釈できる。

(17)これはしめたと，まよいこんできたラクダをかくしたのです。（助詞助動詞）

次の３文は,主文の表す「時」がすべて異なる。

(18)a 外へ出ると　雨が降っていた。
　　b 外へ出ると　頭がいたくなる。
　　c 外へ出ると　体にさわります。

「外へ出る」という「と」節が表す「時」は主文に支配されていて，「と」の前の部分は，単にコトガラを差し出しているに過ぎない。日下部（1956）は，「その角を曲がると，郵便局が見えた。」や「店にはいると，そこはごったがえしていた。」という文をあげて，この継起関係には意志による結びつけが考えられない，後件の内容は，前件の内容に先だって存在してもいいと説く。「その角を曲がり，郵便局を見た。」や「店にはいり，手袋を買った。」という連用形接続の文では，話者が実際に郵便局を見，また，実際に手袋を買ってはじめて，曲がることと店にはいることとの間に関係があったことに気付

くので，客観的には前項と後項の間に必然的な関係はない。一方，「と」で結ばれた前項と後項の間には，主観的には偶然の関係のように思えるが，客観的には，その角を曲がったりその店に入ったりすれば当然見つけられる，必然の関係があるので，そこに，一般に当てはまる判断がなされていると言う。日下部は，「春が来，花が咲く」の「kje（ki にあたる）」は「実（アラワレ）」を示し，「春が来ると，花が咲く」の「kulu to」は「虚（カンガエ）」を表すと指摘した。日下部のあげた例は，主文が，状態を示しているが，動作動詞の場合はどうだろうか。

(19)a 雨が降り出し　あわてて洗濯物を取り込んだ。
　　b 雨が降り出すと　あわてて洗濯物を取り込んだ。

a 文の場合は，時間の流れに沿って事態が叙述されているのに対して，b 文の前項は，現実の時間とは関係なく，頭の中に想定された事態を示していると考えられる。すなわち，引用の「と」は，引用句の陳述性を失わせて概念化し，また，接続助詞的な「と」も，「と」が受ける部分を現実の時から切り離して人が想定した考えを示す，という共通性を持つことがわかる。

最後に，いわゆる格助詞の「と」を見てみよう。まず次の用例を考えたい。

(20)a 雨が降る。
　　b 雨と降る。

(20)b 文では，a 文とは異なり，降るものは「雨」ではなく，たとえば，「批判」である。b 文の意味するところは,その文の表す事態，動作の有様が「雨が降るように」ということである。同様なことは「花を見る，花と見る」にも言える。また，よく引用されるところだが，歌論集『正徹物語』（1961：181）にも，「聞雨寒更尽，開門落葉深」の漢詩について，「雨を聞く」でなく，「雨と聞く」と読んでは，「始めから落葉と知りたるにて，その心狭し」　とあり,室町時代においても，「を」は対象そのもの，「と」は主観的な想念を表すことが認識されていたとわかる。

動詞が，「なる」「する」「かわる」等の変化の意味を持つ場合，たとえば，「雨となる」という表現では，現実の天気も雨に変わる。しかし，この「雨となる」の「雨」は，「あれ，雨だ！」と現に降っている雨を指す時の「雨」と同じではない。

「に」：責任者になる，責任者にする，責任者にしてできる

「と」：責任者となる，責任者とする，責任者としてできる

「になる，にする」場合は，「～から～に」という実質の変化があるが，「となる，とする」を用いる場合（用例(21)）には，責任者という役割，つまり概念への一致が問題になる。このことは，用例（22）のような比較の対象を表す「と同じ」「と等しい」「と違う」「と較べる」等についても当てはまる。

(21)君が来なかったとする。
(22)提出が遅れるのは，出さないと同じだ。

さらに，変化の対象，動作の内容を示す「と」もこうした意味を持つ。

変化の対象：雨となる，ドルとかえる，空洞と化す，Xと置換する，子供と扱う，人と生まれる
動作の内容：違反とみなす，正しいと認める，どろぼうと疑う，不況と判断する，標準と定める，明日と伝える，犯人と考える，彼は来ないと思う，彼が病気だと聞いた

いずれも，「と」の前は現実のことがらではなく，頭の中で想定されたことがらと言える。森山（1988）は，上の「変化の対象」を「同一的なト格」と呼び，それが連用修飾のトを介して，引用のトに連続することを指摘している。森山の指摘にあるように，「山となる」の「山」は変化の結果を表し，「がっちりと作る」の「がっちりと」も，結果を修飾するととらえることで，いわゆる格助詞の「と」と副詞の「と」，さらに引用の「と」の係り方の上での連続性が見て取れる。

次に，「と」が動作，作用の相手を示す場合を考えてみよう。この場合，「と」が必須の述語と，「と」を選択的に用いる述語とに分けられる。「と」が必須のものには，「と会う」「と結婚する」「と別れる」「と争う」「とつながる」「と結び付く」「と親しい」「と親密だ」「と疎遠だ」「と～し合う」等があり，「と」を選択的に用いる述語は，おもに動作動詞で，「遊ぶ」「食べる」「行く」等がある。どちらも，先にみた「なる」「かわる」「認める」「伝える」等とは異なり，「私は彼と」を「私と彼は」のように言い換えることができる。そして，これは，「山と海」という場合のいわゆる並列と呼ばれる「と」と同じ使い方である。

(23)新聞と雑誌を読んだ。
(24)新聞と雑誌に書く。
(25)読むと書くとは違う。
(26)昼飯は，安いと早いが絶対条件だ。

こうした並列の表現では，名詞と動詞の関係を決める格が現れるまで「と」で示されるものは格関係を留保している。すなわち，この「と」は，他の格助詞に,比べて述語への係り方が弱く，格を定めずに文の中にことがらを差し出しているだけで，ここにも概念化の働きが感じ取れる。特にそれは，用言を「と」が受ける時に顕著である。

以上の観察から，格助詞の「と」，副詞の「と」，引用の「と」，接続助詞の「と」は，実は連続した用法を分類したものであることがわかる。そして，そこに共通するものは，「と」が名詞に接続する場合はもとより，陳述性を持つ語句，文に接続する場合においても，「と」によって，その陳述性が失われ，「と」の節は想念を表すということであった。

それでは，「って」に戻って，これまで見てきた「と」との違いを考えてみたい。

3「って」の用法と意味

「と」の用法と「って」の用法には重なる部分が多い。特に「引用」の働きは両者に共通するものだが，かといって，「って」が「と」に常に言い換えられるわけでない。
「と」と異なる「って」の働きと意味を考えるにあたって大事な点は,①「って」が連用形の形をとっていること,②連用形の前に，促音が置かれること,の二点にあると思われる。順にみていく。
①「って」が連用形の形をとっていること。
「って」には動詞の省略があるが，形としては動詞の連用形，いわゆる「テ形」になっている。宮田（1948）は動詞の活用形のうち，終止的に用いられる「歩く」「歩いた」「歩こう」等を「本詞」と呼び，これに対して，連用的に用いられる「歩いて」「歩けば」等を「分詞」と名付けた。そして，いわゆる「テ形」を「シテ分詞」と呼んで，その用法として，たとえば，次のようなものをあげている。

直前または同時の動作，状態	「いすにつまずいて，ころんだ。」
因果関係	「雨が降って仕事が出来ない。」
逆説条件	「雨が降っても仕事は出来る。」
副詞的用法	「はじめて，きわめて，すすんで」

格助詞的用法　　「において，について，に対して」

（同 51-55　なお原文の例文はローマ字書き）

テ形の働きが節と節とを並べることにあり，その接続関係が継続や原因の意味になるのは文脈による，ということはよく指摘される。宮田は加えて，テ形に取り立て助詞が接続する点や，テ形の副詞的用法も，分詞の働きとして統合的に扱っている。もともと分詞という命名は，西洋語の分詞の働きと似ているからだが，実際，英語の ing 形も幅広い使われ方をする。

He stood looking at me without saying a word.
Running is good for my health.
Having a nice personality, she is loved by all.

こうした英語の分詞の使い方をみてわかることは，動詞の言い切り形とは異なり，分詞は主格と呼応しないという点である。この点は日本語でも同じで，引用句を除く文中で用いられる分詞やテ形は,動詞の叙述内容を表現するだけで陳述には係わらない。そのため，分詞やテ形は，文の中での続き方が言い切り形に,比べ自由である。連続して用いられる時の様々な意味は文脈によってもたらされ，テ形自体が特別の意味を担うわけではない。

ここで問題にしている「って」に戻って考えてみると，「って」も，次のように文の中での続き方が自由であるというテ形の性質を持っている。

1) 「って」に動詞が接続する場合
　例　行こって誘われた。
2) 「って」に名詞が接続する場合
　例　可愛くて仕方がないって風に抱いてたもんだよ。（寺内）
3) 提示的用法
　例　その無能な「究極のメニュー」担当者って，私のこと！？（美味 25）
4) 終助詞的用法
　例　そんな手の汚ねえ刑事はいねえって。（冬）

この「って」の接続の仕方の幅の広さが，「と」との大きな違いのひとつと言える。そこで 1)～4)の順に，もう少し詳しくその具体的な用法を見てみる。

1) 「って」に動詞が接続する場合

この場合，動詞は，伝達，思考を表す場合とそれ以外とに分けられる。伝達，思考を表す動詞というのは，次のような例である。

(27)イメージ違うって言われても困る。
(28)行ってって頼んだ。
(29)どうしてあれが私ってわかった？
(30)私だって知っていたの？

こうした「言う」「思う」「頼む」「知っている」「誘う」「呼ぶ」「勧める」「気がする」「聞く」「ほめる」「誇る」「自慢する」等の，人の発話，思考，感覚，判断等を表す動詞と「って」節との関係は，「って」の前に来ることがらが，動詞の実質的な内容を示している点にある。藤田（1982）は，「と」について，「別れをつらいと思う」と「別れをつらく思う」が意味的に等しいことから，前者を「準引用」と名付けている。

一方，「って」の後ろが伝達，思考以外の動詞というのは，次のような例である。

(31)来てくれないってひがむ。
(32)どうしようって，迷ってるとこかもしれないじゃないの。
(33)はじめっからうまくいかないってあきらめてた。
(34)自分が正しいからってあんまりいばんなよ。（冬）

こうした例になると，「って」の受ける内容と動詞の内容との関係が直接的ではなくなる。しかし，「って」の前には陳述性のある表現が来ており，「って」は人の発話，思考を受けている。次の例も，「って」が，発話を受けている点では変わらない。

(35)でもね，みんなにお膳立てしてもらって『いってらっしゃい』って送り出されるのが嬉しいのよ。（冬）
(36)碁会所行くって出ていったのが，行ってなかったりでね。（冬）
(37)お前みたいに，お祭りに連れてきてやったからって，おっかさんになったつもりでいたら，……（寺内）
(38)お祭りだからって，酔っぱらって人に迷惑かけるなんて（寺内）
(39)だからってなにも泡くって働くことないだろ。（冬）

(40)エイッて決心して，お母さまのこと見に来たんです。（家族熱）

（35）～（40）が（31）～（34）と異なる点は，「って」の節の内容と主文の動詞との意味関係にある。用例（31）の「来てくれないってひがむ」では，「来てくれない」という発話，思考は「ひがむ」という行為の一構成部分で，全体は単文の構造である。それに対して，用例（35）の「いってらっしゃいって送り出す」という場合には，「いってらっしゃい」という発話と「送り出す」という動作とは意味的に独立した関係にある。この違いは「と」にも見られることで，藤田（1986, 2000）は，引用構文を大きくふたつに分け，「小田氏は「だめです」と言った。」という通常の引用（第Ⅰ類引用構文）のほかに，「誠が「おはよう」と入ってきた。」という「引用句「～ト」で示される発話・思考と述語で表される行為とが同一場面共存の関係にある」（同 74）引用（第Ⅱ類引用構文）の存在を指摘した。金賢娥（2013）は，藤田の第Ⅱ類引用構文について，「と」節は主節動詞を修飾する成分ではなく，「と」節の後ろに「言って/思って」が潜在していると考える。その根拠として，金は，「太郎は「今忙しい」と電話を切った。」のようにふたつのことがらが同時ではなく前後している場合もあることやとりたて詞制限をあげている。とりたて詞制限というのは，「さえ」「だけ」「まで」という取り立て詞が第Ⅰ類引用構文の「と」と「言った」の間には挿入され，「太郎は「お早よう」と言った」「太郎は「お早う」とだけ言った」がどちらも成立するのに対して，第Ⅱ類引用構文の場合には，「太郎は「お早う」とだけ入ってきた」と，取り立て詞が「と」と「入ってきた」の間に挿入できないことをいう。結局，金によれば，「来てくれないってひがむ」という文も引用ということになる。

「って」には，動作や物事の具体的な現れを受ける用法がある。藤田（2000）は，「と」における同様の用法を「項目列記」の「と」と呼んでいる。

(41)2 時間ってたたないうちに，またやってきた。

(42)そりゃねえ，たしかにおまえの財布から二枚，三枚って抜いたことはある，そりゃ認めるよ。（びっくり）

(43)この 1，2 ヶ月ってもの，気になってしょうがないんだ。

(44)テレビなんかで見てもワルいことする奴に限って，正しいとか清いとかって字ついてるね。（幸福）

「って」や「と」節が修飾的に主文に係る場合には，さらに，次のような擬声語の例もある。

(45) ビリビリってくる。

(46) ゴタゴタしたせまいとこに人間がいっぱいで，ワーンってしてたから。（家族熱）

このうち，(45) の「ト来る」表現については，藤田（2000）が「ガクッとくる」「カッとくる」「カチンとくる」「ジーンとくる」「グッとくる」「ムッとくる」を慣用的表現として取り上げている。「する」も含めて「来る」「する」が述語の場合の「と」「って」が受けられる擬態語を，比べてみる。

「くる」

ガクッ｛と・？って｝
カッ｛と・＊って｝
カチン｛と・＊って｝
グッ｛と・＊って｝
ムッ｛と・＊って｝
ジーン｛と・って｝
ビリビリ｛と・って｝
ザーッ｛と・って｝
じわーっ｛と・って｝
ピリッ｛と・って｝

「する」

ギクッ｛と・？って｝
ギョッ｛と・？って｝
シュン｛と・？って｝
シャキッ｛と・？って｝
ざわざわ｛と・って｝
すっきり｛φ・と・＊って｝
ワーン｛と・って｝

「って」で受けにくいのは心理的描写に関わるもので，音の描写は可能と言えるだろう。「来る」「する」以外の動詞も含めて考えてみると，「と」が受ける擬声擬態語のうち，「って」に置き換えられるのは擬声語だけで，様子を表すものは「って」で受けられない。

(47) a　おっとりと笑う。
　　b＊おっとりって笑う。

(48) a　クスクスと笑う。
　　b　クスクスって笑う。

杉浦まそみ子（2007）は，引用表現の習得過程を観察し，習得が進んだ段階では「と」による引用と「って」による引用で，引用される対象への関わり方に違いが出ることを指摘

している。すなわち,「「と」では,元の対話者のどちらかに偏ることなく等距離において,第3者的な遠い視点（久野 1973）から眺めた評価が行われる」一方,「「って」による引用では,受身形や授受動詞の使用で元の場面の対話者に視点をおくことで元の場面に入り込み,そこから元発話のもたらす恩恵や影響を当事者の視点から生き生きと再現すること可能になっている」（同 200-201）という。「と」における概念化の働きが「って」には弱く,その分「って」節では陳述性が強く示されると考えられる。

「と」の場合には，「と」の節と主節との意味関係は，ここにあげたものに限られない。

(49) a 来てくれないって，ひがむ。
　　b 来てくれないと，ひがむ。（二義的）
(50) a 春が来るって，窓を開けた。
　　b 春が来ると，窓を開けた。（二義的）

a 文は，引用の意味しか持たないが，b 文は，引用の意味にも接続助詞の用法にも取れ,ここに「って」にはない「と」の,引用から接続助詞の連続性がみてとれる。

2) 「って」が名詞に接続する場合

(51) じいちゃん威張って「おまえ達，何言うか」って感じで，相手に物言わせないとこあった。（冬）
(52) それが最終的な面接だってことぐらいわかっていたはずだ。（冬）
(53) 母親が出ると，ガチャンと黙って切っちゃってさ，父親が出ると話すっての，一体どういうの。（母上）

こうした用例で「って」を「と」に置き換えようとすれば，「と」だけでは名詞に接続できないから，「という～」という形を取らざるを得ない。一方，「って」は，直接名詞に接続可能なように見える。しかし，テ形は，名詞に直接接続することはないのだから，こうした用法を連体修飾ととらえるのは適当ではない。

(54) a せがれが嫁もらおうという年になったんだ。
　　b せがれが嫁もらおうって年になったんだ。

上の例で，a 文の名詞への修飾の仕方，その一続きの係り方と,比べると，b 文の「って」による名詞への係り方では，「って」と被修飾名詞との間にいったん間が置かれる。すなわち，この連体修飾のように見える「って」による接続は，実は，連用形の中止用法で，主文とは次のような関係にあると考えられる。

(54)a’せがれが（嫁もらおうという年）になったんだ。
　b’せがれが（嫁もらおう）って，（そういう）年になったんだ。

森重敏（1965）は,「だれかって,きまってるじやないか。」という文で,『この「って」は「というか,それは」に置換される』（同 134）と述べている。すなわち,話し手の発言を反復するということは,それが既知だからできることで,だからこそ「それ」と指示することもできると考えられる。

3）「って」の提示的用法

次に，「って」に属性文，判断文が続く提示的用法に当たる例を見てみよう。

(55)来たんだけどよ。オレ，受け取ってもいいかな。
　　－　来たって誰だよ！忙しいんだから，さっさと言えよ！
　お涼さんだよ（寺内）
(56)そんならどこへ行ったんだ
　　－　どこって　家出なら，あれ着てくに決まってますもの（冬）
(57)おじいちゃま，お見送りしてからでなきゃ，お店は出せないわね。
　　－　お見送りって死ぬこと？（冬）
(58)「自分にぴったりの映画ってないもんだなあって思うわ」と瑛子がいった。（君を）

「って」が，人の発話，思考を受けている点ではすでに見てきた用法と変わらないが，「って」が動詞や名詞に続くのではなく，「って」を名詞述語文や属性文が受けている点が特徴的である。これらの文は，話し手を含めた人の発話，思考を文の中に取り込んでいる。三上（1953：207）は,「源太と来たら　向こう見ずだからな」「平次と言えば　もう来そうなもんだが」「藤三って（ば）　今日はどうかしるよ」といった仮定の形が提示法というひとつのムードをなすことを述べている。例文(54)（55）は,適用な他の置き換え語もなく,引用の働きを持ちながら,提題の働きをしている独特の用法と言える。人の発話

を受けながら，こうした用法が「と」にはなく「って」に可能なのは，先にも述べたようにテ形という形にあると考えられる。

4) 「って」の終助詞的用法

(59)これ兄貴だってさ，オレだとばかし思ってたら（家族熱）
(60)若い娘はな，ブクッと肥って，ケツなんかバーンとしてるほうがいいんだ！
　　－　ケツだって。お尻っていやあいいでしょ。（冬）
(61)「浦島太郎」でヒラメやったんだって。（冬）

「って」の後ろに述語が続かずに文が終る場合や，「って」の後ろに「さ」や「よ」といった終助詞が続く場合，その「って」は，終助詞の用法に近い。「って」で受ける内容が，上のように人の発話を受ける場合には，「「浦島太郎」でヒラメやったんだと。」と，「と」による言い替えが文体差を無視すれば可能であるが,伝聞の意味合いが強くなる。次の例のように「って」が話し手の発話，思考を直接受ける場合には，「って」を「と」で言い換えられない場合がほとんどである。また,この「って」は省くことができる。

(62)a そう言うなって。（美味 28）
　　b＊そう言うなと。
　　c そう言うな。
(63)青山警察行ってみなよ。ちゃんと調書残ってるって。（冬）
(64)忘れてたんです。－いいって，いいって。（寺内）
(65)あの年で，新しいとこ入ったって，うまくいかないって（家族熱）
(66)大きな家らしいの。－（家の持ち主）きたない家だって。（冬）

こうした用例の観察から，「と」は，話し手以外の発話しか受けず，一方「って」は，話し手にもそれ以外の人の発話にも接続することがわかる。話し手以外の発話に接続する「って」や「と」は，この「って」や「と」があることによって引用とわかるので省略ができない。しかし,話し手の発話に用いられる「って」は省くことができる。つまり，この「って」は文の叙述内容としては何の意味も持たない極めて陳述度の高いものと言える。言い換えるなら，終助詞の「よ」がふさわしい。

②「って」に促音が含まれていること。

以上，「って」が連用形という形を取っているために，「と」に,比べて接続の仕方に幅のあることをみた。では，「って」という形の持つもうひとつの側面，連用形の前に促音が置かれているということにはどういう意味があるのだろうか。

この促音は，表記の上では促音だが，発音上は声門の緊張と閉鎖を示している。こうした緊張と閉鎖は，表記上,促音で表さざるを得ないが，用いられるところは「って」に限らない。

(67)今日はおそくなるぞ。
　　ー　なんで！
　　なな子ちゃんちで遊んでくるから。
　　ー　晩ごはんまでに帰るッ（となりの山田君）
(68)これはバターですよ！何のへんてつもないバターですってば。だからそんなに迷わないで下さいよッ（朝日）

こうした用例の促音の役割は，単に語気を強めるためとも取れるが，次のような例まで考えあわせるとどうだろうか。

(69)帰ろっと。（美味 28）
(70)もうちょっとがんばろうっと。
(71)やめたっと。
(72)返さないよっと。

この種の「っと」とその前の述語との間には，間（ま），ポーズがある。すなわち，この促音は声門閉鎖に伴うポーズを示している。それは，「っと」や「って」の前の文が概念化せず，陳述性を保っていることを示すことによる，と考えられる。さきに，「と」は，その前にある述語の陳述性を失わせるということを述べたが，「って」は，逆に，「って」が続くことによって，その前の述語に陳述性があることを明示する。そこで「って」は，必然的に話し手を含めた人の発話，思考を受けるということになる。上の「っと」の用例は，この点で「と」の使い方としては例外的である。この種の「っと」は，聞き手に話し手の気持ちをいわば宣言のように表明するもので，単に「と」で気持ちを概念化するのでは，感情の直接的表現には弱すぎるのだろう。

動詞の格要素になっている「と」も「って」に言い換えられない（用例(73)）。しかし,ことがらの音声，表記面が取り上げられている時（用例(74)(75)）では「って」と「と」の言い換えが可能である。

(73)雨が　雪と　　かわった。
　　＊雪って
(74)名前が　雪と　かわった。
　　雪って
(75)明日は　明るい日と　　書くのね。
　　明るい日って

「って」に属性文，判断文が続く場合，「って」の前には述語文の来ることもあるが，次のように名詞を直接受けることも多い。

(76)あの様子が見られるだけでも，栗の木があるお庭って，いいと思う。（栗）
(77)この辺じゃなくても，日本のフランス料理って，いちいちおいしいでしょっていわれてるようで疲れてくるの。（君を）
(78)看護婦さんて，ふた通りあるらしいわよ。（びっくり）
(79)本当に日本人の男の人って，甘やかされて育ってるのね。（美味 28）
(80)男って本当に偉いと思うわねえ。（冬）
(81)子供の頃『ぬり絵』ってあったでしょ。（家族熱）

「って」の働きを，前に来る述語に陳述性があることを明示するもの，人の発話，思考を受けると考えた場合，上の例のように,名詞に続く「って」にも同じ解釈が可能だろうか。まず，次の文を比べてみたい。

(82)a 自転車に乗るのはおもしろい。
　b 自転車に乗るというのはおもしろい。
　c 自転車に乗るっておもしろい。

(82)a が「自転車に乗る」コト，その実体をまるごと示しているのに対して，b，c は，その実体を表す言語表現を受けていると言える。「って」が名詞を受ける場合にも，基本的に同じことが言える。

(83)a 男は本当に大変だ。

b 男というのは本当に大変だ。

c 男って本当に大変だ。

(83)a は，女ではなく男の意味で，b， c は，世間で「男」と呼ばれている存在を取り上げている。 c の男は，b に,比べて，生き生きとした感じがするが，いずれにしろ，b， c は，実体をいったん客観化している。その点で，これは，人の発話，思考を受ける「って」の用法と基本的に異なるものではない。

(84)わが家では栗って買うものだったし，……（栗）

(85)剛さんって，結婚にどんな夢とか希望を持ってらっしゃるんですか。（おこげ）

(86)そのときの僕の気持ちって説明がつかないんです。（夫婦）

(87)私って三日も休みが続くと，もう何をしていいかわからなくなるんです。（朝日）

(88)あたしたちって，やっぱり縁があるのかな。（おこげ）

こうした使い方は，話し手に属することがら，話し手あるいは既知の人の性格，性質を論じる場合によく耳にする。この種の「って」は，「は」か「が」で言い換えることが可能であり，本来そうした表現の方が自然だろう。あえて「って」を使うのは，発話を生き生きとさせ,また,対話者の視点を意識していることを示す意図があると考えられる。

4　まとめ

「って」という語形は,「来てくれないってひがむ」という引用の用法,「せがれが嫁もらおうって年になった」という連体修飾用法,「自転車に乗るっておもしろい」という提示用法,「そう言うなって。」という終助詞の用法を持つことを,似た用法を持つ「と」との比較をしながら論じた。「と」にも格助詞，副詞，引用，接続助詞の「と」と様々な用法があるが，実はこれらは連続した用法であり,そこに共通するのは「と」が名詞に接続する場合はもとより陳述性を持つ語句，文に接続する場合においても，「と」によってその陳述性が失われ，「と」の節は想念を表すということであった。それに対して「って」は引用の意味合いを失わない。「と」と異なる「って」の働きと意味を考えるにあたって,①「って」が連用形の形をとっていること,②連用形の前に，促音が置かれること,の 2 点が重要であった。すなわち,「って」が連用形という形を取っているために接続の仕方の自由度が大きく,名詞的用法や終助詞用法も持つ。また,連用形の前に促音が置かれること,これは

発音上は声門の緊張と閉鎖によるポーズを意味するが, このことによって「って」の前の述語に陳述性のあることが示される。

注

（1）本節は, 三枝（1995）の内容に加筆したものである。

第４章　「だって」「たって」の本義とその用法の広がり[1]

1　従来の扱い

「だって」という語が文の中でどのように用いられるか考えてみると,たとえば次のような用法があげられる。

①彼ほ今日ひまだって聞いた。
②彼が今日ひまだってことを知らなかった。
③彼は,今日ひまだだって。
④彼は今日ひまだってここには来ない。
⑤彼だってそのことを知らなかった。
⑥だって,知らなかったんだ。

辞書でこうした「だって」がどのように扱われているかを『大辞林』（1988,1992 を使用）を例に見てみると,同じ用法が異なる項目に載っており,この語の品詞分けのむずかしさがわかる。辞書の扱いで一番問題と思われるのは,いわゆる引用の用法と逆接の用法とを分け,さらに逆接の場合には,動詞,形容詞接続とそれ以外とを別立てにしている点である。

(1) a 嘘をついたって言われた。
　　b 嘘をついたってかまわない。
　　c 嘘つきだって言われた。
　　d 嘘つきだってかまわない。

『大辞林』では,a と c を「って」の見出しの下に一緒に扱いながら,b と d はそれぞれ「たって」「だって」の項に分けている。しかし,a と c が一緒にされるなら,当然 b,d も一緒になってしかるべきで,一方,a,b と c,d もそれぞれ形態的には異なるところはない。意味が異なるのは,それが用いられる文脈が異なるからで,「だって」という語自体に違いがあるとは考えられない。もちろん,片方に「だって」という独立した接続詞があること等を考えると,逆接の「だって」が一語化していると取ることもできなくはない。しかし,だからといって,はじめから逆接の「だって」というものを設定してしまうと,この語の本来の意味や,引用の場合の「だって」と異なるところがあいまいになる。筆者は,「だって」「たって」は,名詞述語と動詞の過去形に「って」が付加していると考える。そこで,まず語の形態を出発点として,「だって」「たって」の意味と用法について考えたい。
「って」の中で特にこの形を取り上げるのは,それがいわゆる逆接の意味を持つものとして一語に扱われることが多いので,その妥当性を検討するためである。また,「たって」は逆接の意味で「ても」と比較されることが多いので,その違いもあわせて考えたい。

2　「たって」「だって」の起源

松尾捨（1987）は,古代語に著しい「と」の用法として「とて」をあげ,次のような用例を紹介している。

(2) 五人の人の中に,ゆかしき物見せ給へらむに,御志まさりたりとてつかうまつらむ（竹取物語）
(2) 「これ参らせむ」とて御硯などさし入る（枕草子）（同 352）

松尾は,この用例について「と思って」「と言って」という訳を便宜的に当てている。湯沢（1957）が,「とって」の項であげている江戸時代の用例は,次にみるように,意味の幅がさらに広い。

(3) 貴さまたちにいってきかせたとって,馬の耳に風だろうが…
(4) 新蔵が覚えがわるいとって,高麗やが小言をいったっけ
(5) いかにお年が若ひとって,かりそめにも其ような事をおっしゃりますな（同 593-596）

こうして見ると,引用だけでなく,逆接の意味もある。もともと「と」は抽象的な意味を持つ語だから,その後ろに連用形の一部が続けば,人はその意味を文脈に応じて解釈することになる。この点は,そのまま現代語にも引き継がれていると言える。

ところで,上の湯沢のあげる用例（95）（96）では,形容詞の終止形に「とて」が後続する。しかし,現代語にこうした言い方はない。そして,現代語で「若くたって」と形容詞の連用形に「たって」が付くということは,「うそをついたって」「うそつきだって」の用例を,終止形に「って」が接続したと考える立場とあいいれない。この点について松下（1930）は,「「た」はク活シク活へは附かないが形式動詞の「する」を附け,その第二活段「し」へ「た」を附ける。そうして「し」が音便で促音になる。」（同 303）と考える。つまり,「遠くしたって」が「遠くったって」を経て「遠くたって」となるという。また,此島（1973）も,古代語で形容詞に「て」がどのように付くかについて次のように述べている。

> 古代語において「て」のほかに「して」ができたのは,「て」の用法の不定を補うためだったのであろう。「て」は本来動詞だけを受ける語であったかと思われる。（略）従って,形容詞や形容動詞等を受けるためには,間に形式動詞「あり」「す」等を挿入する必要があったのであろう。こうしてできた「して」が,後にしだいに動詞「し」の意識を失って,「て」と同価に感じられるようになり,その結果,形容詞等にも「て」の付くことが多くなって行ったと思われる。（同 168）

つまり,形容詞に続く「たって」の「た」は,過去形の「た」ということになる。ここでは,「だって」「たって」の語構成を「だ＋って」「た（動詞の過去形）＋って」と考える。

3　引用の「だって」

「だって」「たって」の構成要素である「って」は,節と節とをつなぐのが本来の役割であるテ形を含むことから,前件と後件をつなぐ動詞的性格を持つとともに,宮田（1948）が指摘した英語の分詞にあたる名詞的性格も持っている。そのため,前節でみたように,動詞的にも名詞的にも,さらには,終助詞的,接続助詞的にも用いられるというように,続き方にかなりの自由がある。

「だって」「たって」が引用のそれであるか否かは,実際の発話では明らかである。いつ,どこで,誰が,を問わず,人の発話を受けていれば,それは引用となる。それを,一文のレベルだけで判断しようとするとむずかしいが,次のような場合には,一文でも引用であることが明らかである。まず,「言う」「聞く」「思う」「感じる」「わかる」「気がする」「実感する」等の人の発話,思考,感覚,判断等を表す動詞が「って」に続くと,「って」の前は,発話の内容を表す。

(7) ほんと,でもねえ,コチョコチヨとドカンと,どっちが罪かっていやあ,あたしは同じだって気がするなあ。（蛇蠍）
(8) 馬鹿と猫は高いところが好きだって言うでしょう（三毛）
(9) 白内障だって判りや,菊男ちゃん,アンタのことすてやしないよ（冬）
(10) 洋服ダンスだ三面鏡だ,冷蔵庫だ,テレビだって,ズラッと書き出してごらんなさいよ,もう気が遠くなるから。（毛糸）

この場合,実際の発話がしばしばそうであるように,名詞述語の「だ」は省略が可能である。

次のような定義文も意味的には引用に準じて考えることができる。

(11) A:ほかしましたよ
B:ほかしたって,捨てたということですか。（思い出）

また,「たって」「だって」が,名詞を修飾する連体修飾用法の場合も引用の意味になる。

(12) よくポストに一万円札がほうり込まれたってはなし聞くけど,鮒ってのは聞いたことないわねえ。（男どき）
(13) 顔つなぎに昼メシ食おうってことが,最終的な面接だってことぐらい,お前だって判ってた筈だ。（冬）

以上の引用の「だって」と,次に述べる逆接の「だって」とは,「だって」「たって」が句として主節に包み込まれるか（引用の場合）,あるいは,従属節として機能するか（逆接の場合）で決まるが,この区別は次のように判然としないこともある。

(14) 赤んぼにだってくれた
(15) スイスに行ったっていいね。

この場合,実際の発話では,「赤んぼにだ　って」と「赤んぼにだって」というように語の切れ目で区別が出来る。また,次のようにアクセントによる言い分けも可能である。

(14') a (「赤んぼにだと言って」の意味) 赤んぼにだって　くれた。
b (「赤んぼにさえくれた」の意味) 赤んぼにだってくれた。
赤んぼにだってくれた。
赤んぼにだってくれた。

4　逆接の「たって」「だって」と「ても」「でも」

(16) 奉公が辛いのはどこだっておんなしこった,おかみさんの口の悪いのほ癖だし (さぶ)
(17) 誘拐だけだって大変だ。それに殺人と来りゃ,絶対に死刑だものな。(デート)
(18) ええ。夜の静かなことといったら,砂漠のどまん中だってこうはいきませんよ (三毛)
(19) 「おい,うち帰ってからだって」「それじゃ,間に合わないのよ」(蛇蠍)
(20) にんげんは一寸さきのことだって,本当はどうなるか見当もつきあしねえ (さぶ)
(21) 確かに赤かったんだ!　いくらぼんやりしてたって,そんな見間違いはしないぞ。(三毛)

こうした用例の観察から,次の点が指摘できる。
①「だって」という形は,たとえ主語が示されていなくても「～が～だ」という名詞述語文の述語部分になっている。たとえば,(17) は,「やったことが誘拐だけだ」,(18) は,「場所が砂漠のどまん中だ」,(19) は,「話し合うのはうちへ帰ってからだ」というように主語を補うことができる。こうした場合,述語部分の「だ」を省くことはできない。次の例を比べてみたい。

(22) a 子供って　いろんなことに興味を持つ。
b 子供だって　いろんなことに興味を持つ。

a 文のように「って」が直接名詞を受けると,その名詞の概念が取り立てられる。一方,b 文では,「子供だって」と名詞述語の「だ」があることで,その名詞の持つ属性が取り立て

られると同時に,後ろに発話動詞や名詞が続いて「だって」が発話内容や修飾句としてその節内に取り込まれない限り,この部分は独立した節として後件につながる。
②「だって」「たって」には,たとえ明示されていなくても,それと対比されるものが,存在する。

(23) あたしだって,初婚の方がいいに決まっているけど…(寺内)
(24) しかし日本人は中華料理も好きですからね,中華風スパゲッティだっていいわけです。(美味 25)
(25) イワさん,体が骨だって仕事してるほうがいいんだよ。(寺内)
(26) 聞こえたっていいだろう!(寺内)

(23) 文は,「他の人はもちろん,あたしも」,(24) 文は,「イタリア風スパゲッティ,和風スパゲッティはもちろん,中華風スパゲッティも」の意味である。つまりこうした表現では,一番可能性の低い例を出すことで,「より高い可能性の場合はもちろん低い可能性の場合でさえ」という意味になる。次の例では,そうした対比の存在が明示されている。

(27) あら,執刀医より麻酔医の方が,料金だって保険の点数だって高いんですってよ(家族熱)
(28) 石津は顔を輝かせて,「子供だけじゃありません,女房だって可愛がります!」と,(三毛)

対比の意味が感じられるのは,「テ形」という形に由来する。この対比性は,同じくテ形を含む「でも」「ても」にも認められる。「でも」を逆接の接続助詞ととらえ,それと「だって」が次の例文のように置き換えられることから,「だって」を逆接の接続助詞と考える立場もある。

(29) することがない時{でも / だって}目玉だけはいつも動いていた。(思い出)
(30) 彼女たちは,どんなにくたびれていても,決してシルバー・シートに腰をおろさないでしょう(男どき)
(31) 子供は生まなくても結婚 5 年になると,そのくらいは判った。(男どき)

これらの用例では,いずれも「でも」「ても」と「だって」「たって」の置き換えが可能である。しかし,そもそも「ても」自体,その本義を逆接と考えることが妥当なのだろうか。山口尭二(1995)は,古代語の時代から「って」のもとと考えられる「とて」と「ても」が,どちらも逆接,順接の仮定,確定に用いられることを以下のような例をあげて示しており,「とて」「ても」を「逆接」とのみ解釈することは妥当ではないとしている。

(32) （逆接仮定の「とて」）桜花ちらばちらなむちらずとて　ふるさと人のきても見なくに（古今）（同 1）

(33) （順接確定の「とて」）あづまの方に行きて住み所もとむとて，ともとする人ひとりふたりして行きたり（伊勢）（同 1）

(34) （逆接仮定の「ても」）わが身はいみじきいきほひになりても，わが君をさるいみじき者の中にはふらかし奉りては，何心地かせまし。（源氏）（同 7）

(35) （順接確定の「ても」）ちかひても猶思ふにはまけにけり　たがため惜しき命ならねば（後撰）（同 7）

本章の冒頭で「たって」「だって」の品詞用法が辞書に細かく分けて記載されていることを述べたが，「でも」にも複数の品詞の立てられることが多い[2]。しかし，「ても」「でも」を統一的に扱おうとする立場もないわけでほない。「…しても」「…したって」「ても」「だって」をあわせて，『英文法などでいう「譲歩」concession に相当する』『逆条件の形』と考える鈴木重幸（1972）は，その形について『「…しても」の形は第二なかどめにくっつきの「も」をつけてつくられる。』（同 361）と述べている。「でも」「ても」に含まれるテ形は，連用形と取るにせよ，接続助詞と取るにせよ，「て」には本来逆接の意味はないし，「も」は，「加える」のが本義である。星野（1986）は，「も」の数多くの用例にあたった結果から，「ても」について，『いわゆる逆接は（略）現象のうわべを見ただけの呼び名に過ぎず，「ても」を逆接表現の接続助詞として立てるのは妥当でない』（同 58-62）としている。星野によれば，次のような「（略）その上，戦争になったとき，そのカギをまわしても，たとえ，まわさなくても，何千何億の人が死に，地球がめちやくちやになることを知ってもいます。」という文において，『《カギをまわす》ことと《カギをまわさない》こととが同時に成立することはあり得ないから，その一方だけが「＜テ形＞モ」の形で表現されると，いわゆる逆接の文になる』と述べている。前田（1993）も，「ても」はテ形が「も」によって取り立てられたものとして，「ても」の用法を「条件の並列（＝並列条件）」と「条件関係の否定（＝逆条件）」のふたつに分けている。この両者は連続的なものだと考える前田は「並列条件として帰結に対して等価的に並べられた条件が，ある種の序列化を受け，通常ならば主節事態と結び付かないような事態が条件として選択された場合に，逆条件という解釈が生まれて来る」（1993:163）と分析している[3]。このように「ても」をとらえた時，「だって」との違いはどこにあると言えるだろうか。まず，両者が同じように条件性を持つこと自体は否定できない。Alfonso A.（1974）は，「でも」が特定の時点を指す副詞とは共起しないことを指摘しているが，このことは「だって」にも当てはまる。

(45) あの人はさっき呼ん｛＊でも／＊だって｝（まだ）来ません。

上の例から条件性を持たない事実文には「でも」「たって」とも使えないことがわかる。両者の条件の違いについては，「たって」は仮定条件に用いられ，「ても」は事実にも仮定

にも用いられるということが言われる（たとえば,仁田 1987）が,次の例のように「たって」を事実条件に使うことはある。

（46）会社へ行っ｛ても・たって｝,仕事に｛ならない・ならなかった｝。
（47）いくら飲ん｛でも・だって｝,酔わ｛ない・なかった｝。

しかし,「だって」「でも」に意味の違いがあることは確かで,寺村（1991）は,「X ダッテ」は「X を無視,または軽視する,相手の態度,または思い込みに反発するようなときに使われることが多い」（同 138）と述べている。筆者は,こうした意味の違いは,その形態の違いからもたらされると考える。「ても」は連用形に接続し,累加の「も」を構成要素とすることで例示の意味が強い。それに対して「だって」「たって」は,言い切りの形を含んでいる。さらに,「だって」「たって」に含まれる促音は,喉の奥の緊張と閉鎖に伴うポーズを示しており,これはその前におかれる述語の陳述性を示している。それゆえ,「だって」「たって」には語気の強さが生まれると考えられる。山口（1995）は,逆接仮定条件表現が,必要があれば「いかに」といった不定詞や「たとへ」といった副詞を用いること等で文脈依存的な形式に変化してきていることを指摘しているが,こうした言語的変化,また,「たって」が縮約形であることも意識され,書き言葉では使用が避けられると考えられる（注３）。「たって」「ても」は文の中での使われ方も共通するが,次のように許可を求める文には,「たって」は使えない。

（48）入｛っても・＊ったって｝いい？
（49）入｛っても・ったって｝いい

これは,累加の「も」と言い切りを含む語の違いによると考えられる。
次に,「たって」の前が名詞の場合を考えてみる。

（50）a　暇だって必要だ
　　b＊暇でも必要だ
　　C　暇も必要だ

（50）a では,前件は後件の補語という関係に立っているが,それでもなお,「だって」がその条件性を保っているのに対して,「でも」は条件性を央う。「金でも暇でも必要だ。」という意味でのみ文が成立する。「でも」に置き換えられない,こうした「だって」の用法も数多い。

（51）どこにそんな金があるんです？預金だって少ないし,賭事はしないし,給料だって安いしー（三毛）
（52）お袋だって土地を売ることには同意してましたよ。（三毛）

(53) 子供たちを危ない目に遭わせた犯人だって見つかっていないし…。（三毛）
(54) 遊びたいのだって我慢して。（会えて）

この種の「だって」は,主題を示す働きをしている。三上（1953）は,仮定法が提示法として使われる例として,「源太ト来タラ　向ウ見ズダカラナ」や「平次ト言ヘバ　モウ来サウナモノダガ」をあげているが,「だって」もそれに並ぶものと言える。この「だって」の接続の仕方は係助詞に近く,意味の上では「も」や「さえ」に近い。

次は,反対に「でも」が言えて,「だって」が成立しない例である。

(55)すし　でも　　取ろうか。（びっくり）
　　＊だって
(56)少し電話 { でも / ＊だって } 鳴ってくれると目が覚めるんだがね。（三毛）
(57)「四月で時期もいいし,夜でも習い物をしたらって言ってるんですよ。」と里子がきんに説明した。　＊だって　　（寺内）
(58) 風邪でもひけばねえ,少しは色っぽい声になるんでしょうけど。（冬）
(59) こういう時,雪でも降ってくれたら,粋なのだが,あいにく…（冬）
(60) よほど欧米の景気が悪くなるとか,相当の暖冬にでもならない限り,原油価格は小じっかり,やや強めと見るべきである。（朝日）
(61) カズに負けずおじさん { だって / も } 世界に挑むぞ！（朝日）

(55)では,取るものほすしでも鰻でもよいのであって,たとえばとして「すし」をあげている。前田（1993）は,「ても」について「並列条件として帰結に対して等価的に並べられた条件が,ある種の序列化を受け,通常ならば主節事態と結び付かないような事態が条件として選択された場合」（同 163）に用いられると述べているが,「だって」は,主節事態との結び付きを期待しない度合いが,言い切りの形を含んでいる点で「ても」に,比べて一層強く,そのため逆条件の意味が強まると考えられる。

なお,「でも」では言えて「だって」が使えない場合として,次の例のように,「XはYである」の否定形「XはYではない」の「は」が「も」に置きかわった「でも」がある（用例（62）～（64））。

(62) こんな形でツユ子が恨みを晴らしているわけでもないのだが,しゃくにさわって仕方がない。（男どき）
(63) 巻子は恐縮したが,達夫は当り前といった風で,格別礼を言うでもなく,お茶いっぱい振舞わずに帰すこともあった。（男どき）
(64) a この菓子は　最中でも　　羊羹でもない。
　　b　　＊だって　　＊だって

(65) a 菓子は　最中　でも　羊羹でも　いい。
　　b　　だって　　だって

5　接続詞の「だって」

「だって」が次のように,接続詞として使われる場合を考えてみる。

(66) どうして医者を呼ばないんだ！
　　ーだって,タメさんがお医者様は絶対嫌だ,注射も駄目だっていうんですもの
　　（寺内）

(67) お前,検眼してもらったほうがいいんじゃないのか？　あれが石津のボロ車に見えるんじや,かなりひどいぞ。
　　ーあら。だって,あの人,車を買い替えるようなこと言ってたのよ。（三毛）

萩原孝恵（2008）は,「だって」の使用には人間関係の遠近が作用していると考え,会話コーパスを使った分析を行っている。その結果,「だって」は,人間関係が近づくほどその使用が増えること,さらに,初体面では,「自分の発言に対する理由説明や相手の発言に共感して理由説明をする使い方が多いのに対し,友人以上の関係になると,相手の発言・思考領域に踏み込むような使い方や,察しを求めるような使い方が観察され」る（同 37）と述べている。田中章夫（1984）,趙華敏(2001),嶺田明美・冨田由布子（2009）は,「だって」に続く文の文末形式を観察し,嶺田・冨田は,談話,小説における出現例を調べ,「じゃない（じゃん）」「もの（もん）」等のモダリティ性の高い表現と共起することを示している。意味的な分析としては,メイナードを批判的に発展させた蓮沼（1993）,それを受けての沖（1995,1997）の考察がある。蓮沼は,「だって」の用法を次のように分類している。

a. 抗弁型：利き手からの挑戦に対抗
b. 挑戦型：話し手から聞き手に挑戦
c. 補足型：対立が顕在しない文脈における話し手自身の立場の正当化
d. 折衷型：b と c が融合したタイプ。聞き手との間に何らかの対立要素があるが,同時に話し手が聞き手の立場を支持するような用法

実際の用例を見てみると,ほとんどすべての用法がこの分類のいずれかに収まる。また,蓮沼は,「だって」による正当化の意味について,「正当化の根拠となるものは,論理的根拠や話し手個人がもつ信念といったものではなく,物事のあり方,成り行き,人間の本性をめぐる世間一般の常識や経験的知識」と述べて,正当化の根拠を具体的に示した。沖（1995）は,蓮沼の 4 用法を共通にくくる一義的な意味説明をめざし,沖（1997）では,従来よく示される「だって」の用法とは異なる次のような例をあげ,従来の用法との違いを論じている。

(68) a ごめん。遅れちゃった。

b だって,今日学校あったもんね。

(69) a あっ,やってくるのわすれちゃった。

b だって,a ちゃん忙しかったでしょう。

相手の意図に反する主張という従来の解釈を旧用法と名付け,上にあげた,相手の身になって考える「共感談話」「気配り談話」という用法を新用法として,ふたつの用法について,発話状況を加えて次のような解釈を示した。

旧用法:[状況 N:a ; b に勉強させたい

b :勉強するのがいやだ]

a「試験前だから勉強しなさい。[X]」

b「(勉強しない。)[P]だって,疲れちゃったんだもの。[Q]」

新用法:[状況 N:a ;a は謝りたい。

b ;a を受け入れたい。]

a「ごめん。遅れちゃった。[X]」

b「(しょうがないよ。いいよ。[P])だって,今日学校あったもんね。[Q]」

沖が「だって」が発話される時に,そこに隠された話者の論理を引き出した意味は大きい。筆者は,まず沖があげるふたつの用法は,考え方によってはひとつにすることもできるのではないかと考える。すなわち,旧用法では,話し手と聞き手が対峙しているわけだが,新用法においては,聞き手が話し手の側に立って我々という立場で,社会通念を含む外の状況と対峙していると考えることができる。また,沖は,用法の説明で( )に入れた部分を省略されたものと見ているが,「だって」が発話される前提は,もう少し前にあるように思われる。沖(1997)において,井上優氏のコメントが本文中に紹介されている。次のようなものである。

＜前提＞

子供は勉強していない。(P)

＜P に対するコメント 1＞(異議申し立て)

「試験前だから勉強しなさい。」(母)

＜P に対するコメント 2＞(正当化)

「だって,疲れちゃったんだもの。」(子) (同:122)

筆者も基本的に「だって」の意味するところをこのように考える。この説で注目したい点は,ひとつは前提が子供が勉強していないという事実に置かれていること,もう 1 点は,母も子もその同じ前提 P に対して発話している点である。すなわち,母に対する子の発話という関係で「だって」が出されるのではない。場合によっては,母のコメントはなくてもよく,「＜誘いか独り言で＞遊ぼう。だって,疲れちゃったんだもの。」でもよい。「だっ

て」の「だ」は,その場の事態,聞き手の発話,話し手自身の行動を受けての代用表現であり,かつ,引用の「って」を構成要素にしていることから,「どうしてって」「なぜって」に置き換えるのが意味的に近い。

(70) 今日は車で来た。｛どうしてって・だって｝遅れそうだったから。
(71) 母：勉強しなさい。（勉強していない現実がある。）
　　子：｛どうしてって・だって｝疲れちゃったんだもん。

(71) で母が「勉強しなさい」というのは,勉強していない現実に対する非難から発せられたものである。その現実があるから,子はあえていやだということを言わなくてもよい。「だって」は,疑問文の答えとして用いられることも多いが,この場合の疑問文は,単純な質問とは言えない。「今度の日曜,スキーに行く？」という質問が,「だって」で答えが発話される時には,その質問にはもともと,たとえば,なぜ行かないのかという批判が含まれ,その解消を求めていると言える。山口（1983）は,そもそも疑問表現は「解答要求志向」と「疑念解消志向」のふたつの性格を持つものだと述べている。「だって」を引き出す疑問文も疑いを含んだ問いと言える。

「だって」が「でも」と異なる点は,「でも」は文中の用法と同様に並列関係を意味するから,話し手の述べることがらを相対化させ,主張を弱める。一方,「だって」は事態を「そうだとして」と陳述性の強い終止形で受けることにより,主張が強まる。接続詞は,それ自体に論理が含まれているので,後続文がなくても話し手の意図は理解される。特に逆接の意味を含む接続詞,「でも」「ただ」「けど」等は,単独でも発話されやすい。この「だって」も同様で,「だって」だけで話し手の逆らう姿勢が示される。「だってだってだって」（作詞：タカノン）と,それだけで歌のタイトルとして存在すること等からもモダリティ性の高いものと言える。

6　終助詞の「だって」

この用法は,接続の仕方からふたつに分けられる。ひとつは,引用文に「って」が付いた場合である。

(72) アイヌ語で“けんか”ってイミだって。（びっくり）
(73) なんとか先生のとこ原稿取りに行って,そのまま,帰るそうですって（蛇蠍）
(74) ボールは100メートルも飛んだって。

この場合は,動詞と名詞述語にのみ「だ（です）って」が現れる。ふたつ目は文の終わりに,文末の形は問わず,常に「だって」が接続する場合である。

(75) それから自分の部屋だけでもいいからちゃんと掃除するように,だって（シコ）

(76) 「…テレビとゲームの勝ち抜きトーナメントをやって,優勝者にはボクが賞状あげるんだよ」だって（朝日）

(72) ～ (74) の,引用文に「って」が接続した場合は,「だって」の「だ」を切り離すことはできない。「だ」の後ろに再度「だって」を挿入すれば,ふたつ目の用法になる。逆にふたつ目の「だって」からは「だ」を省くこともできる。「だ」がある場合とない場合とで,ない場合には引用の意味合いが強く,話者にとって発話内容が重要だが,「だって」となる場合には,「だ」はその前の叙述部分の代用をしていると考えられ,発話内容より発話行為が強調されて,「あの人がこう言っている。」ということが第一に話し手の言いたいところになる。そのため,こうした「だって」は,「って」とは異なり話し手の発話には用いない。

(77) （話し手の発話として）a　早く行こう　って。
b＊早く行こう　だって。

また,相手の主張をおおむ返しに繰り返す場合にも「だって」が用いられる。たとえば,「電車の中に猫がいた。」という文を聞いて驚いた時に可能な問い返しの文として,「猫？」「猫だって？」という言い方が考えられる。また,文の形では,次のような言い方ができる。

(78) a 猫がいた？
b 猫がいた　って？
c 猫がいた　だって？

a 文は,相手の発話内容を繰り返すことで発話内容に対する疑問が表されるが,b, c 文は,直接相手の発話内容に対する確かめの形は取らず,相手の発話行為に対する確かめとなっている。c 文は,その傾向が一層強く,相手の認知行為自体に対しても疑問を投げかけている。この点は,名詞を受ける場合も同じで,「猫だって？」「何だって？」と問い返せば,相手の認識に疑義を抱いているように感じられる。

7　まとめ

独立した語として「だって」が存在するということから,意味的にも関連するいわゆる逆接の「だって」「たって」を,一語と見なす立場も有り得る。しかし,本書では,「だって」「たって」の語形の共通性を重視して,いわゆる引用と呼ばれるものも逆接と呼ばれるものも,同じ語形が,使われ方によって異なる用法を持つと考えた。富士谷成章（中田・竹岡 1960）は,「と」の意味として「と見る」「と聞く」「と言ふ」「と思ふ」「とする」のいつつをあげている。この「と」を「って」（もとは「とて」）に置き換えた場合,「と見る」から「と思ふ」までは,感覚・思考動詞が接続したもので引用の用法に当たり,「って」が「とする」の意味を持つ場合に逆接の用法が生じると考えられるのではな

いだろうか。名詞を「って」で受ける場合と「だって」で受ける場合とでは,意味に違いのあることはすでに触れたが,どちらの場合もここに引用から提題への用法の広がりが見出される。さらに,この「だって」の後件に,前件と社会通念上あいいれないことがらが置かれると,「だって」は逆接の意味を持つことになる。

病気だって聞いた。　→　病気だって。　→　病気だって　時には必要だ。
→　病気だって　仕事はできる。

これらの「だって」には,いずれも「だ」の叙述性が失われずにあることは明らかで,この点からも「だって」を助詞とするのはためらわれる。むしろ,「だって」「たって」は,「って」の活用形という大枠の中でとらえた方がよいと考える。

注

(1)本章は,三枝（1995）の内容を発展させたものである。

(2)たとえば名詞に接続する「でも」に限っても,山田（1922）は,格助詞＋接続助詞と係助詞,木枝増一（1937）は,係助詞,接続助詞＋接続助詞,中止形「で」＋係助詞か接続助詞,格助詞＋係助詞,時枝（1950）は,限定を表す助詞,橋本（1959）は,係助詞として扱っている。

(3)前田（1993）は,並列条件の用法が基本であるように思える「ても」が逆条件的に解釈されることが多い理由について,「条件文が（仮定的な事態の場合は特に）「並列条件」を含意として許さない,という事情があるためである」（同 163）と説明している。

第５章　提題の「ってば」「ったら」[1]

1「言う」の条件形とその慣用表現

話し言葉でもっぱら用いられる表現に,次のような「ってば」「ったら」を用いた表現がある。

(1) 克己ってば,すごく不機嫌な顔してる。（会えて）
(2) 「珠美ったら,無茶言わないでよ」と夕里子がたしなめた。（三姉妹）

上の用例は,引用動詞を伴っていない点で次の用例（3）～（5）と異なる。

(3) すぐ戻ると{言って／って}出かけた。
(4) 彼が行く{と言えば／？ってば}私も行く。
(5) 私が行く{と言ったら／ったら}行くか。

「ってば」と「ったら」は,条件「ば」「たら」の用法の差を反映して,多少異なる。「ば」は仮定性の強い条件のため,後件には意志・命令表現が現れにくく,一方,「たら」には「ば」にはない時間的継起関係があって仮定性が弱いため,後件の制約が少ない。次の用例（6）では,「たら」は成立するが,「ば」は成立しにくい。

(6) a？俺が来い{と言えば／ってば}来い。
　　b　俺が来い{と言ったら／ったら}来い。

用例を見る限り,「ってば」は,文末に使われることが多く,文中では,先の（1）のように人名につくのが普通である。「引用」の機能を残しながら固定化・慣用化した表現に次のようなものがある。

(7) いらないったらいらないんだよ！（蛇蠍）
(8) おめえにゃあ明日があるんだ,寝ろったら寝ろよ（さぶ）
(9) カレーったらカレーだ。
(10) でも美味い物食べ歩きするには,足りないって言えば足りない。（病理）

この同語の反復用法においても「ったら」と「ってば」にはわずかながら意味の違いが感じられる。

(11) a うるさいったらうるさい。
　　b うるさいってばうるさい。
(12) a　お金が足りないったら足りないんだ。
　　b　お金が足りないってば足りないんだ。

確定条件の「たら」を含む「ったら」の場合は,「～と言ったら本当に～だ」と,言いたいことを強めるために同じ表現を繰り返している。一方,仮定条件を含む「ってば」は,「～と言えば～と言えないこともない」とむしろ発話の内容を弱めている。ただ,いずれも話し言葉で用いられるものだから,陳述性のある表現が「ってば」の前に来れば,イントネーション等で「ったら」と同様の強めの意味にすることもできる。

(13) いらないってばいらないんだ！

「ったら」の後ろに,「ない」形が来る場合もある。これも,「ほかにはないほど～だ」という意味で,同じ表現を繰り返す場合と同じ効果を持つ。

(14) それで,その喜びようったらないんだよ。（梅安）
(15) その教え方の厳しさったらなかった。（日経）
(16) 暗くなった機内で映画を見ながら一人それを食べる快感ったらない。（朝日）
(17) なんでわかったの？　人が悪いったらありゃしない。（龍）

2　提題助詞の働きをする「ってば」「ったら」

「って」「と言えば／ってば」「と言ったら／ったら」の前に来る表現形式は,文だけでなく,次の例のように体言のこともある。

(18) A:そう簡単にあきらめないと思うな,あたしは
B:・・・・・・。
A:女って　そういうもんよ（蛇蠍）
(19) 「・・・白猫じゃ悪いことがあるのかな」と片山はまだ痛む頭をさすりながら言ってから,「そうだ,白い猫って言えば・・・」と,ふと思い付いたように言いかけた（三毛）
(20) そうなんだよなあ。OL って言えば世間様は一くくりにするけど,けっこう千差万別。（朝日）
(21) 本当にこの頃の教師ったら,不真面目でいやになるよ。ちっとも教える意欲がないんだから。（太郎）

「ってば」「ったら」が陳述性のある表現を受ける場合は,引用句の話し手は明らかだが,体言の場合には話し手は特定されない。というより,その場で誰かが述べたこと,場合によってはその誰かは話し手自身のこともあるだろうが,その発話を受けて,「・・・さんが今ちょうど話したXは」という意味になり,「って」「ったら」「ってば」で受ける部分全体が文の主題を表す働きをする。この場合,「って」「ってば」「ったら」の前に来る語は必ずしも体言である必要はない。

(22) そんなことしたら命にかかわるよ。
一命にかかわるったら, こっちの方がもっとあぶない。

「ば」形と「ては」形には次のような縮約形がある。

	といえば	とくれば	となれば	とすれは	にしてみれば
(縮約形)	といやあ	とくりやあ	となりゃあ	とすりゃあ	にしてみりゃあ
	といっては	ときては	となっては	としては	にしてみては
(縮約形)	といっちゃあ	ときちゃあ	となっちゃあ	としちゃあ	にしてみちゃあ

これらの縮約形は使う年齢, 地域等が限られ, 必ずしも一般的とは言えないが, 動詞が変わってもそのすべての動詞に共通する。一方, 「と言えば」「と言ったら」には「ってば, ったら」という縮約形があるが, この変化は, 動詞が「言う」の場合に限られている。この系列には, 他に「って」「ったり」等があり, 全体がひとつの活用体系をなしながら, 独自に幅広い使われ方をする。この点については次の 6 章で述べる。

提題助詞の働きをする「ってば」「ったら」には, 大きく次のふたつの用法がある。

①定義の「ってば」「ったら」

(23) おりるったら, やめることだ。
(24) 原子爆弾ったら, 危険なものだ。

上の文では, 「ったら」と後件との関係が主題と述語の関係にあり, 全体でひとつの文をなしている。こうした「ったら」は, 後ろに定義付け, 説明の述語が来て, 「ったら」の前の語の定義, 説明を表す。この場合には「ったら」を「とは」「というのは」「は」で置き換えることができる。次もこうした例である。

(25) 田中ったらあの総務の田中か。
(26) 一つ拾いにそろそろあるく格好ったら, ほんとに見られたもんじゃなかったわ (さぶ)
(27) 明日じゃないか, 21 日ったら。(水の旅人)

これらの「ったら」は, 叙述性が薄れ, 助詞化が進んでいると言える。

②非難の「ってば」「ったら」

「ってば」「ったら」を含む文が単文であっても, その前の語が, 話の場に存在するものの場合には, 定義付けの意味はなくなる。人称代名詞の場合が圧倒的に多いが, 「ったら」

「ってば」が受ける語は,1)第三者,および,話の場に存在する具体物,2)話し手自身,3)聞き手自身,のみっつに分けられる。

1)前に来る語が第三者および具体物をさす場合

(28) うちのパパったら,仕事が終わって家に帰って来て,夕御飯の用意が出来ていないとすごく怒るの。(朝日)
(29) あの人ったら,しつこいんだからね,全く!(女社長)
(30) そいつったら大酒のみで,乱暴者で・・・(死んでも)
(31) 克己ってば,すごく不機嫌な顔してる。(会えて)
(32) あのアパートったら,ネオンがついてる。

2)前に来る語が話し手をさす場合

(33) そう言った後,母は口に手をあててふふふ,と笑った。「私ったら詩人ね。」(つぐみ)
(34) でも,私が悲しんでいるのを見ていた父が,私の誕生日に,柴犬の子犬を買ってきてくれて,そうしたら,私ったらすっかり喜んでしまって。(病理)

3)前に来る語が聞き手をさす場合

(35)「珠美ったら,無茶言わないでよ」と夕見子がたしなめた。(三姉妹)
(36)「姉さんてばいつもあたしのまねばかりするのね,じゃましないでよ」(さぶ)
(37) 依子ってば,そんなにあきれなくったっていいじゃない(会えて)

次のように後件がない用例もある。

(38) 姉がまた「そのちゃんったら」とたしなめ,徳兵衛は無関心に手を振つて,「うるさい,すきなようにしろ」と云つた。(さぶ)
(39)兄「石津の奴ならやりかねない」
妹「お兄さんったら」(三毛)
(40)直子「特売のシャンペンにしちゃ,いい音してたじゃない」
父「なんだ,特売か」
母「やあねえ,直子ったら・・・j(冬)

いずれの場合も,後件は,人の性格付け,事物の状態を言い表す状態述語となつている。1)〜3)の中で,1)2)は,「って」への言い換えが可能で,3)では言い換えができない。このことは,1)2)の「ったら」がまだ「と言う」の働きを保っていることを示している。2)の,前

に来る語が話し手自身をさす一人称の場合は,自己を客観化している感じがある。しかし,3）の,前に来る語が聞き手をさす用法は,現に目の前に存在する人に直接呼びかけているわけだから,「言う」の意味はなくなっている。全体に,佐久間（1940,1983：250）が言う「あきれたものだ」という心持ちが加わる。益岡・田窪（1989：134）は,「ったら」の前に人称が来る場合を用例としてあげ,「行動の観察をもとにして,その評価を与える場合に用いられる。」（同 134）と述べている。

現に目の前に存在する人に呼びかける場合には,人が特定されので,本来「と」は必要ない。しかし,「言う」の条件形があることで,あえてそのことを話題にするということあげする意味合いがあり,また,条件形によつて対立項の存在が暗に示される。そこで,その人の行動,性格やものの様子に対する驚きが生じる。マイナス評価の用法が多いが,次のようにプラス評価の文もないわけではない。

（41）君ったらやさしいんだね。
（42）田中さんったらすてき！

3　提題の「は」「なら」「って」との比較

益岡・田窪（1989）は,提題助詞として「は」「なら」「ったら」「って」等をあげている。ここでは．これらの語の違いについて考えたい。

「は」は,代表的な提題の助詞で,もっとも幅広く使える。主格だけでなく「が」「の」「に」「を」を代行し,述部には,状態性用言も動作性用言も可能である。「なら」について,鈴木義和（1992）は,「ナラ」が通常の仮定条件法ではなく,単独の体言について単文を形成する場合として次のふたつの条件,①「ナラ」が主語を取らないこと（主題が省略されているのではない）,②ナラをハに置き換えるか,または,ナラを消去することによって,もとの文と近い意味の単文にすることができることをあげている。「乗るなら飲むな」は,「あなたが自動車に乗るなら,あなたは酒を飲むな」と言い換えることができるので,提題とはならない。上のふたつの条件を満たす文として,たとえば「酒なら灘の生一本」「買い物ならスーパーへ行きました。」という文をあげている。「なら」も動作性用言が可能で,また,「鈴木さんならできるだろう」と仮定,可能形とも呼応する。また,鈴木は,次のような用例から,対立する事態が想定できない場合には,「なら」が使えないことを指摘している。

（43）これ{は／＊なら}驚いた。
（44）お前{は／＊なら}帰れ。
（45）あの人{は／＊なら}誰ですか。（同 10）

日本語記述文法研究会（2009）は,「なら」の用法として,聞き手が質問した X を主題として取り上げる場合（用例（46））と,動作や様子から聞き手の意図を推察して情報を述べる場合（用例（47））をあげている。

(46) A:田中さんはいらっしゃいますか。
B:田中さんならもう退社しました。
(47) [人を捜している様子の聞き手に]部長なら,もう帰られたよ。
(日本語記述文法研究会 2009：244-245)

これらの説明は,三上(1960)の言う「なら」が「条件付きの題目」であり,「は」は「無条件の題目」という解釈と共通する。

次に,「って」「ったら」「ってば」を,比べてみる。まず,「って」「ったら」「ってば」に共通するのは,いずれも引用の「と」を含む点である。一般に,用言が「と言う」という引用句内で用いられる時,先に見たような直接話法の場合をのぞき,その用言には叙述性がなくなり,概念しか表さない。「彼は北海道へ行きたいと言った。」や「彼はきっと勝つと言った。」という文において,引用されている用言には叙述性があるが,引用の「と」があることで文全体の中ではその叙述が頭の中で想定されたものに変わる。Jakobson R.(1980,1984)は,言語の機能のひとつにメタ言語的機能をあげている。それによれば,「言語そのものの外にある事象について語る」「対象言語」に対して,「メタ言語」は「言語コード自体について語るための言語」(同 1984：108-109)を言う。主節の側から見れば,引用節は概念化されたものであることを別の言葉を使って表現したものと考えられる。

「って」「ったら」「ってば」を,比べると,「って」は,述部に状態述語が来て,主題の属性,性質を述べたり,定義付け,説明の働きを持つ使い方が普通である。次のように,「って」に様態を叙述する文は来にくい。

(48) 田中君{は／＊って}今ご飯を食べている。

また,「ってば」「ったら」が主格しか受けないのに対して,「って」は,「私は牛肉って食べない。」と主格以外もとることができる。次は,Jakobson (下線筆者)がメタ言語の例としてあげているものである。

(49) 「あの二回生はダブったんだ。」「でも〈ダブる〉って何？」「〈ダブる〉というのは留年することだよ。〈留年〉ていうのは〈進級試験にしくじること〉なんだ。」「それで,〈二回生〉というのは何だい」,学生ことばにうとい相手はさらに聞き返す。「〈二回生〉とは〈二年生〉のこと(あるいは意味)だよ。」
(同 1984：109)

「対象言語」の例であるはじめの例をのぞいて,「メタ言語」文では「って」が使われ得ることがわかる。藤村(1993)は,この Jakobson の例で「は」との置き換えが可能かどうかをみて,質問の文は「は」に置き換えることができず,答えの方の文も不可能ではないが不自然なことを指摘している。すなわち,「は」は言語コード自体について語るためのも

のではない。この Jakobson の例は,「は」には置き換えにくいが,次のように「ったら」に置き換えられる。

(49’)「でも〈ダブる〉＊ったら何？」「〈ダブる〉ったら留年することだよ。〈留年〉ったら〈進級試験にしくじること〉なんだ。」「それで,〈二回生〉ったら何だい」,学生ことばにうとい相手はさらに聞き返す。「？〈二回生〉ったら〈二年生〉のこと（あるいは意味）だよ。」

「って」「ったら」は,いずれもメタ言語表現として使われているが,「って」が定義付け,説明の働きで初出文にも現れるのに対して,同じく定義付け,説明の「ったら」は,前の発話を受けるほうが自然である。これは,「ったら」の持つ条件形によって,いろいろある中からそのことがらを選ぶという要素が加わるためと考えられる。

定義付け,説明の用法では,述語は状態述語になるが,先に見たように「ってば」「ったら」が人称代名詞を受ける場合は,動態述語が可能である。

(50) 田中君{は／＊って／ったら/ってば},今ご飯を食べている。

「ったら」「ってば」は,定義付け,説明の働きでは「って」「というのは」「とは」と共通するが,一方,条件という点では「なら」と共通するところがある。次は,益岡・田窪(1989:134)が「なら」の例としてあげているものである。

(51) 甲：田中さん見なかったかい。
乙：田中さんなら,図書館で勉強してたよ。

この乙文は,「ったら」に置き換えることができる。ただし,この甲文に対する直接の応答にはならず,たとえば,次のような文脈が必要だ。

(51’) 田中さんは勉強嫌いなんだって。
ーでも田中さん｛ったら／ってば｝,きのう図書館で勉強してたよ。

益岡・田窪（1989：134）は,「なら」について,「相手が持ち出した話題を主題として情報を与える場合に用いられる。」と述べている。その点は,「ったら」「ってば」も同じだが,「ったらｊ「ってば」にはそれに加えて,ことあげする強い響きがある。

ところで,「ったら」「ってば」が現に目の前にいる人を受ける場合は,「ってば」「ったら」がなくても文は成立する。

(52) 珠美｛ったら／ってば／φ｝,無理言わないでよ。

こうした無助詞の場合は,格を問題にしない,よびかけの働きに近いものと見ることができる。

4　終助詞の働きをする「ってば」「ったら」

「ってば」「ったら」には終助詞用法がある。これは先にあげた同語反復文の後件がないものと考えられる。これを終助詞用法と考えるのは,文末でイントネーションが下降し,条件形にもはや活用形として文を接続する働きがなく,意味的にも文の叙述内容に関わっていないからである。この「ってば」「ったら」の用法は,次のふたつの場合に分けることができる。

①平叙文の場合

(53) A:「ねえ,ガラス,あぶない」
　　B:「大丈夫だよ」
　　C:「あぶないったら」（隣）
(54) A:「早く来ないと,ガードマンに見つかるぜ」
　　B:「わかってるってば！」（三姉妹）
(55) A:「・・今度の嘘はちょっと心動かされたわ」
　　B:「ほんとだってば。」（月は）

これらの用法は,いずれも初出文ではなく,前の発話を受けている。意味的には「抗弁」を表す。

②命令文の場合

(56) ふざけないでったら。（死んでも）
(57) 「よせったら,さぶ」と栄二が云った。（さぶ）
(58) まあお待ちよ,乱暴だねえあにさんは,待ってったら。（季節）
(59) おあがんなさいってば,寒いわよそんなところに立ってちゃあ（さぶ）
(60) おばあちゃん,およしなさいってば（寺内）
(61) ねえ,何をたのまれなすったんですったら（待ち伏せ）

これらの文は「ってば」「ったら」を削除しても命令文だが,命令のだめ押しの感じがある。最後の用例（63）は,疑問文であって命令と呼ぶには特殊だが,答えを要求している点で命令と考える。これらの用法も初出文には現れにくい。

5　まとめ

「って」「ったら」「ってば」は, 文中に現れる位置によって, 直接話法, 提題助詞, 終助詞という用法の広がりを持つ。また,「ってば」「ったら」が主格しか受けないのに対して,「って」は,「私は牛肉って食べない。」と主格以外もとることができる。「ってば」と「ったら」では, 仮定条件を含む「ってば」は,「～と言えば～と言えないこともない」と発話内容を弱め, 一方, 確定条件を含む「ったら」は, 時間的継起関係をを持ち仮定性が弱く, 後件の制約が「ってば」に比べて少ないため, 後件に命令・意志表現が来ることができる。

注

(1) 本章は, 三枝（1995）を修正したものである。

第6章　「って」の体系[1]

3章では「と」と対比しながら「って」のふるまいを観察し,4章では逆接とみなされることの多い「だって」「たって」を,5章では「ってば」「ったら」という提示用法について述べた。この章では,様々な形態をとる「って」の,それぞれの構文的条件とその意味を明らかにし,これまで取り上げてきた「って」が全体としてひとつの体系を成していることを示したい。

1「って」の語義

「って」には，大きく分けて，「引用」と「逆接条件」のふたつの用法があるが，このふたつの用法は『源氏物語』にもすでに見られる。

(1)「見奉りてくはしく御有様も奏し侍らまほしきを，待ちおはしますらむを，夜ふけ侍りぬべし」とて急ぐ（桐壷）（此島 1973：149-152）

(2) この人の宮仕の本意かならずとげさせ奉れ。われなくなりぬとて，口惜しう思ひくづほるな（桐壷）（此島 1973： 355-356）

(1)の「とて」は「引用」，(2)は「引用」に取ることもできるが，「逆接条件」にも取れる。「と」には，「A と B」という場合の並立助詞や，「ゆっくりと」等の副詞の構成要素となる用法もあるが，「って」にも共通する「と」の基本的な用法は，「引用」と「逆接条件」に限られる。一方で，「って」は，連用形という形を取っているために，接続の仕方の自由度が高い。「とて」から変化した「って」は，「と」の持つ「引用」「逆接条件」という基本的な用法に加えて，後に見るようにさまざまな派生用法を持つが，これは，文の中での続き方が自由で，文内の異なる位置に現れ得るという連用形「て」の性格によるところが大きい。まず,森重敏による研究をみておきたい。

2　森重敏による「って」の分析

「って」については，古くは，佐久間鼎（1940,1983）が「って」「ってば」「ったら」について，その終止助詞，係り助詞用法，また，接続用法の「たって」を取り上げている。「って」の用法を個別に論じたものほこのほかにも非常に多い[2]が,その中で森重(1954)はさまざまな「って」を体系的にとらえている。ここでは「って」の体系性を問題にしたいので,森重の研究を特に取り上げる。森重は,「って」「ってば」「ったら」を体系的に取り上げ,のちに森重（1965）においても，これらの語を森重の独自の文法論の中に位置付けながら再度まとめている。以下に，表の形にして両論考の内容を筆者なりにまとめたものを示す[3]。表中の主者は話し手，対者は聞き手，他者は第三者，全体者は主語一般を意味する。ここで問題にしているのは「って」の前に来る句の話者で，それを聞き手とすると文全体の聞き手と紛らわしい。そこで,森重の主者，対者，他者の用語をそのまま用いることにする。「　」内は，置き換え得る語である。

表 6-1　森重敏の分類

「いう」の主語	文例	意味	品詞
特定の個別者	お上手だってほめてたわ。	引用	動詞＋接続助詞
不定の個別者	君は絵の方もやるんだってね。	伝聞	助動詞
対者	なんですって？	反芻的反問「というか」	助動詞＋係助詞
対者～主者	だれかって，きまっているよ。	反復「というか，それは」	接続助詞/接続副詞
主者（全体者性）	早くしろってば。お父さんって。	喚体	終止としての係助詞
全体者	お姉さまってばだめよ。	「は」	係助詞
全体者	クウってうちの犬だよ。	「とは」「というのは」	係助詞

森重の分析で注目されるのは，「いう」の主語が誰かという観点から「って」の用法の違いを考えている点である。卓見と思われるが，森重の文法論にとっては，こうした分析方法ほ，当然のことであったのだろう。森重は，文は主語，述語の相関，“S－P”としてとらえるべきだという。もしそうとらえられない時には，S あるいは P が変化しているのだから，その成り立ちが明らかにされなければならない。こうした立場から注目された述語のひとつが引用動詞であり，引用の「と」「って」だった。ふたつの句から成る文の構造を S－P＝S’－P′とすると，表のたとえば「君は絵の方もやるんだってね。」という文は，「（君は絵の方をやる）んだって。」と考えられるから，ふたつ目の主語が省略された S－P＝（S′）－P′という構造を持っているということになる。「って」はこうした主語，述語の消去と呼応して，表中の右端の品詞欄をみるとわかるように，助動詞相当から係助詞相当へと用法を変えていく。森重は，この変化の一番の要因は，「いう」の主語が表の上方にある特定の個別者から表の下方の，主者，対者を区別しない全体者へと変化することにあり，この変化につれて主語述語が一般化し，もともとは動詞性を含んでいた「って」が係助詞的になると考える。

3「って」の体系

「って」の体系にここでは引用だけでなく逆接条件の「って」も含める。その理由として，①「引用」「条件」ともに「とて」が起源と考えられること，②形態の類似性と意味の共通性があること，すなわち，「引用」では，ある発話，思考が異なる場に持ち込まれ，持ち込まれた時点で，もとの発話，思考は現実ではなく想念になるが，「条件」においてもある考えが想定される。③どちらも係助詞へと変化し，変化に平行性のあること，があげられる。

表 6-2　「って」の引用と逆接用法

	引用	逆接
行ったって　聞いた。	○	
行ったって　信じられない。	○	○
行ったって　かまわない。		○

上の三文それぞれの意味は，「って」節と主節の意味関係とその文をとりまく文外の状況からもたらされており，「（た）って」自体にもともと逆接の意味はない。森重（1954）は，引用に関わるものだけを取り上げているが，森重（1965）では，副助詞として「といふとも＝にありとも＞であっても＞だって（でも）」の変化をあげており，名詞に下接する「だって」についても，引用と条件用法の間に関連性があることを指摘している。

ここでは，文に現れる位置，主文の述語の種類，「って」が受ける句の発話者等の統語的条件によって，「って」が様々な用法を持つことを示したい。まず，「って」の用法を引用，逆接に大別し，さらにそれぞれをいくつかの下位用法に分類する。すでにこれまでの章で取り上げたことも含まれるが，ここでは用法の広がりを見ることを主眼に見ていく。はじめに，「引用」の用法から見て行くことにする。

4「引用」の「って」「だって」

「引用」の「って」を，①引用，②話題の引き込み，③反復，④伝聞，⑤言いつけ，⑥問い返し，⑦強調に分ける。それぞれの用法を順に見て行く。

① 引用

引用は，実際に行われた発話，思考行為があって，それを異なる時点の話に持ち込む働きと言える。発話・思考は実際に行われたものだから，当然，発話・思考の主体が特定される。また，対応する発話・思考動詞のあることが多い。この場合「って」は「と」に言い替えが可能である。「と」への言い替えは，この引用の「って」の場合にしか起こらない。

(3) あのとき傘をさしてけって，うるさく云った子がいたっけ，（さぶ）
(4) 少しだまってとかってどなるだけ（季節）
(5) お互いにこれが自分のとうちゃんだ，これはおれの子だって，しんから底から思えればそれが本当の親子なのさ，（季節）

次のように，引用動詞が現れない用例もある。

(6) 仕事が終りしだい戻って来るって，本町のお店とかへいったわ（さぶ）
(7) もうおめえはいかなくてもいい，って親方から仕事を外されちまいました（さぶ）

(8) うかがいたいことがあって来たって，取り次いでくれ（さぶ）

ここでも「って」と「と」の言い替えは可能である。また,引用の意味で，「って」ではなく条件形が用いられることもある。

(9) あのときってえばわかるだろうが，（季節）
(10) いいったら，（略）しんぱいするなよ（さぶ）

連体修飾用法には明かでない点が多いが，用法自体はこの“引用”に含まれると考える。

(11) いまさらって気もするけど・・…・（阿修羅）
(12) 行くってな話は聞いてない。

さらに，次の「だからって」もここに含める。

(13) ちんばだからって寄場人足に変りはねえだろう（さぶ）
(14) どうしても必要だからって，いろいろ事情をかいた手紙（季節）

森重（1965）は,「だからって」を係り助詞に分類している。確かに意味的には主題化しつつあるが,「休みだからって」は「休みだからと言って」と,動詞を補うことができるので引用の意味合いが強いと考える。

② 反復
「って」の中には，明らかに聞き手の発話をオウム返しのように引用していながら，その発話を受ける発話，思考動詞がないものがある。

(15) A:それだけ？
B:それだけって，ほかになにかあるんですか。（隣）
(16) A:お母さん，ねたら
B:ねたらって，あたしたちが起きてさわいでいるのに，お母さん，ねられないわよねえ（阿修羅）
(17) おれが松田さんをへこましたって，冗談じゃあねえ（さぶ）

上の例では，連用用法の「って」は，もともとの「て形」の性格を反映して構文に意味がゆだねられ，それ自体は単に前後を結びつけるだけの役目しかしていない。「‥‥と言って，‥‥」という意味で，「って」は主題化しつつあるけれども，まだ「って」に動詞性のある点が次の話題の引き込みの用法と異なる。

③ 話題の引き込み

引用された発話，思考を名詞述語文が受けると，引用の内容である「って」句が受けるものは新たな話題，トピックとして文の中に取り込まれ，主題と述部という対応関係が生まれる。述部は動作文となることは少なく，品定め文のことが多い。

(18) A：へいへい，なにもかも「究極のメニュー」の担当者が悪いんです。担当者が無能だから，東西新聞は部数競争で帝都新聞に負けてるんです。
B:その無能な「究極のメニュー」担当者って，私のこと！？（美味 25）

上の例は，直前の発話を受けているが，次のような例もある。

(19) 会えて嬉しいわ。あたしたちってやっぱり縁があるのかな（おこげ）
(20) 美代子，愛敬よく剛に笑いかけて「剛さんって，結婚にどんな夢とか希望を持ってらっしゃるんですか。」（おこげ）

こうした例では，「って」句が受けるのは直前の発話ではなく，その発話の場に存在するもの，あるいは，話し手の頭の中にあることがらである。係り助詞の「は」に近いが，「は」が直接対象をこれ，それ，と示しているのに対して，「って」では対象がいったん引用というフィルターを通る点が異なる。そこで，「世間一般に知られている」「我々が共通に知っている」といった意味を帯びる。「というものは」「ということは」という表現への言い替えが可能で，これは，4 章でも取り上げた定義，性格付けにほかならない[(4)]。「ってば」「ったら」は，意味の共通性から「って」の異形態と考えられる。

(21) それで，その喜びようったらないんだよ。（梅安）
(22) 私とか，もうあせっちゃってえ，よそうよおて言ったんだけどお，その子ったら偉そうに自分がおごりますからとか言ってえ，平気な顔してるんだもん。（豊かさ）

佐久間（1940, 1983）は，「ったら」「ってば」について，「いずれも特定の人を取り上げて，文句，物いいをつける的（ママ）にするもので，「あきれたものだ」という心持があります」（同 250）と述べている。これは，不特定多数の中からあえてひとつの対象を選び出す意味合いが生じるためと考えられる。

④ 伝聞

これまで見てきた引用，反復，話題の引き込みの用法では，その性質，働きは異なるが，「って」に述語が接続した。ところが，述語がなくなり「って」で文が言い終わる場合がある。意味的には，伝聞の助動詞に近い。

(23) おどろいたね，押しかけ女房だってさ，（季節）
(24) なかなかうんと云わないんですって（さぶ）
(25) この八重歯は抜けるんですって，はたちになれば抜けるんですってよ（さぶ）
(26) A:コーヒー　お願い。
B:なんだって。（よく聞こえない）
C:コーヒー　だって。

主語は特定される場合もあれば,特定されない第三者の場合もある。山崎（1996）は,に一般に「んだって」の形を取ることの方が多いと指摘している。「今晩雨が降るって。」と「今晩雨が降るんだって。」では，前者は，発話をそのまま伝えている。こうした言い方は，天気予報で聞いたことをそのまま伝えるといった時でなければ実際には使わない。「んだって」は，「のだ」を構成要素に持つことから,その場の状況を受けていると考えられる。

⑤ 言いつけ

伝聞の「いいって↘」「だめだって↘」「行くって↘」に対して，文の言い切りの形にさらに下降イントネーションで「だって」が付加する「いい　だって↘」「だめだ　だって↘」「行く　だって↘」という言い方がある。

(27) うちでもおとっちゃんと作さんのおじさんがとっかわればいいだってさ，（季節）
(28) こっちは，本気だったんですけど，お前なんかに経理が務まるか，だって。（豊かさ）
(29) 穴山さんが心当たりの学生はすべて当たったから，後は青木タンに任せるって。それから自分の部屋だけでもいいから，ちゃんと掃除するように，だって。（シコ）

「雨が降るって。」「雨が降るんだって。」「雨が降る　だって。」を比べると，「雨が降るって。」は，人の発話をそのまま伝えているのに対し，「雨が降るんだって。」は，その場面の状況を取り込んでいる。一方，「雨が降る　だって。」は，発話を名詞述語の「だ」が受けることで，発話行為が強調されている感じが強い。第三者の発話を受ける点では，伝聞と共通するが，その第三者が特定される点が異なる。発話内容をそのまま伝えるのではなく，もとの話者がこの文の発話者にそう発話したと,驚きや疑いとともに聞き手に言いつけているような感じがある。伝聞と同様，「と」への言い替えも省略もできない。

⑥ 問い返し

(30) A:猫かもしれませんね
B:猫だって（季節）
(31) A:それよりおらのうちへ寄ろう
B:おめえのうちだって（さぶ）
(32) 勝子は河口の肩をゆすって，初つぁん静かにしておくれよ，と耳もとで云った。「えっ，なに」河口は頭をあげた，「初つぁんだって」（季節）

これらはみな上昇イントネーションで用いられる。また，「って」が名詞を受ける場合には，「だって」の形を取る。直前の相手の発話を受け，大きくは疑問表現だろうが,相手の発話に対する疑いを示す。「あなたは‥‥だと言うのか」といった意味になる。先の①～⑤と異なり，なくても意味は変わらない点で終助詞に近い。たとえば,「もうすぐお母さんが戻ってきます！」という発話に対して，次のような応答があり得る。

(33) a　戻ってくる？
b　戻ってくるって？
c　戻ってくる　だって？
(34) a　お袋さんが？
b＊お袋さんって？
C　お袋さん　だって？

問い返しはｃの用法で，(33) bは引用の疑問文，(34) bは話題の引き込みと考えられる。

⑦ 訴えかけ

平叙文
(35) 旦那はまだ寝ていらっしゃるんですったら（さぶ）
(36) いいったら（さぶ）
(37) いいよ，わかったてばなあ（季節）
(38) 本当よ！本当なんだってば！（デート）
(39) A:大きなうちらしいの。
B:きたないうちだって。（話し手自身の家について）
A:親に恥かかすまいとしてさ，気遣ってんだよ。
B:ほんとだって。（冬）
命令・勧誘文
(40) よせったら，さぶ（さぶ）
(41) 丁か半か，よう，あれで一丁いこうったら，よう（季節）
(42) だめだったら，およしってばさ（季節）
呼びかけ語
(43) おっかさんったら（季節）

これらの例はみな話し手自身の発話を受ける。平叙文のほかに，命令・勧誘文と呼びかけ語の場合があり，それぞれの意味内容が強調される。終助詞「よ」との置き換えができ,省略が可能である。この一連の「って」には，自分の考えを人に認めさせようという押しつけの意味合いが感じられる。(42) B は，文脈がなければ伝聞とも解釈できるが,伝聞では,引用される発話は話し手以外の発話であり，訴えかけの場合は，話し手自身の発話を受ける点で異なる。以上，引用の「って」の用法をまとめると次の表のようになる。

表 6-3　引用の「って」の用法

意味	品詞	例文	句の話者	省略	「だ」	主文の述語
引用	動詞/ 引用助詞	俺の子（だ）って思った。 すぐ戻るって出かけた。	特定 (含主者)	×	△	発話・思考 動詞類
反復	動詞~ 係助詞	それだけって、何がある	特定 (除主者)	×	△	制限無し
話題の 引き込み	係助詞	雨が降るって、嫌だ。 雨って、嫌だ。	対者/ 一般	×	×	状態動詞
伝聞	助動詞	雨が降るんだって。 明日は雨だって。	不特定の 他者	×	△	なし
言いつけ	終助詞	雨が降る　だって。 明日は雨だ　だって。	特定の 他者	×	○	なし
問い返し	終助詞	雨が降るだって。↗ 雨だって。↗	対者	○	○	なし
訴えかけ	終助詞	雨がふるってば。 早く来いって。 あしたは雨だって。	主者	○	△	なし

表で省略というのは「って」が省略できるか否かということで，○は可能，×は不可を表す。「だ」の欄は，「だ」の接続が義務的な場合は○，名詞述語文にはあってもよく，動詞文には不可の場合は△，×は「だ」の接続が不可の場合である。

「って」が持つ様々な用法の違いは，構文的には次のよっつに示される。

!)「って」で受ける句の内容の,発話・思考主体

2)「って」の省略の可否

3)引用句末に「だ」の付加が義務的か否か

4)主文の述語の有無，また，述語が必要な場合，その述語の性質

実際の用例には,表の 7 分類の中間的なものもあるが，この 4 条件が相互補完的であることから，典型例としてはこの 4 条件で区別することが可能と思われる。

5　逆接の「って」「だって」

「ば」「たら」を順接の条件とすれば，「ても」「でも」，「たって」「だって」は逆接の条件を表している。「ても」と「たって」では，「ても」は並べ立ての意味が基本と考えられるが，「たって」「だって」は，「とする」の意味合いがあり条件性が強い。この「逆接」の「たって」を①逆接,②主題の添加,③反発,のみっつに分類する。

① 逆接

以下の用例を見てみると，「だって」の前には，その状況では普通は想定されにくいものごとや人が来るのが普通である。この「とする」は，「意向形＋とする」に限らない。

(44) こわれたラジオじゃあるまいし，叩いたって音はでないって（あうん）
(45) しゃべるんだって，順番てもんがありますよ。（蛇蝎）
(46) 着る物だって，小さいときからいい物に親しんでおくのが必要でございましょ。（豊かさ）

用例（45）（46）は，名詞述語に「って」が付いたものである。「だって」「たって」の前が動詞の時ほ，従属文という性格が明らかだが，後に見るように名詞述語の場合には係助詞に近いものもある。次の例のように，「たとえ」「どんなに」等の副詞と共起する場合には，「だって」にまだ叙述性があると言える。

(47) たとえ紙一枚だって，それをすくにはいろいろな手数や（さぶ）
(48) 黙ってひとの部屋に入って，いくら親だってひどいわよ。（思い出）
(49) いかに門倉さんだっ丁寧（あうん）

② 主題の添加

「って」が受けるものの名詞性が強まると，「だって」は「も」「でも」に置き換えられる。

「でも」への置き換えは可能で，「も」への置き換えは不適切な例
(50) 百里さきだって驚きゃあしないが，話があんまり急のことなんで（さぶ）
(51) 水だけだって十日は死なないって，本に書いてあったんだから。（寺内）
(52) 沢庵なんて三切れだって四切れだっていいだろ！（寺内）

「も」への置き換えは可能で，「でも」への置き換えは不適切な例
(53) こっちだって感情害しちゃうじゃねえか（季節）
(54) おめえだって雨に濡れてたぜ（さぶ）
(55) それに，－僕が貯金していることだって，誰にも云ってはないんですから，自分で持ってるより大丈夫なくらいです（季節）

「でも」も「も」も可能な例。

(56) 神ほとけにだってわかりゃあしねえだろう（さぶ）

(57) 歌だっていまだにロックンロール，ガンガン歌いますし。（朝日）

(58) 台所でゴキブリを見つければ，私だってたたいて殺すし，ハエが飛び回れば外に出すか捕まえて殺す。（朝日）

(59) たとえば日本のビール業界は気の毒で，税金は別としても，電気代だって米国の2倍から2．5倍も使ってアルミ缶を作る。（毎日）

こうしてみると，述語に対して主格，目的格というはっきりした格役割を担う場合，すなわち必須格では「も」による言い替えができると言えそうである。一方，時や程度を表す副詞的な要素の場合には，「だ」が名詞述語の役割を果たしていて，文が複文構造を成していると感じられる。「でも」も「も」も可能な例というのは，それぞれ意味合いは異なるが，両者の中間と言うべきで，述語に対してはっきりした格関係にはなく，むしろ主題に近い。こうした変化は，「だ」の述語性と関わりがあり，次の図のように述語性がなくなるとともに，係助詞へ分化していくと言える。

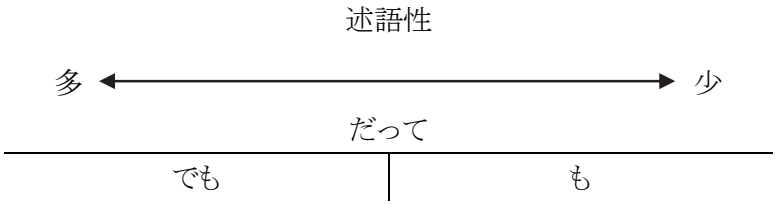


図 6-1　「だって」の述語性

③ 反発

接続詞の「だって」も，「だから」「だが」「だけど」と同様，「だ」＋「って」という語構成と考えられる。「だって」は，相手の発話や意図を受ける点では引用の働きがあるが，相手の発話への反発と自分の発話，考えの正当化を図ろうとする点で逆接の意味合いが強い。意味は「だと言っても」「そうは言っても」に近い。

(60) A:育児休暇だあ，このクソ忙しい時に何を言ってる。
B:だって男も休暇保障されてるって社報で社長もおっしゃってたじゃないですか。（ひき逃げ）

(61) A:それってひき逃げじゃない
B:パパ，人　殺しちゃったんだ。
C：人聞き悪いこと言わないの
A:だってそういうことじゃない！（ひき逃げ）

6「って」の分化と体系[5]

一般に語は，その形と働きによって文の中に定まった位置を占める。しかし，「って」は，それ自体が述語の働きも助動詞の働きも，また終助詞の働きもするという多様な働きをする。表 6-4 は，この様々な用法を持つ「って」を文の中に現れる位置に対応させて示したものである。

表 6-4　「って」の分布

	大 ←			陳述性		→大
文の中での働き	接続詞用法	係助詞用法	接続助詞用法	述語用法	助動詞用法	終助詞用法
引用				すぐもどるって出かけた。 俺の子だって思った。 行くったり行かないったり困る。 行くってば/ったら行くよ。		
反復			寝たらってそうはいかない。 明日（だ）って何が。			
話題の引き込み		雨が降るって困る。 子供っておもしろい。 あの子ったらやさしい。 あの子ってばあわてない。				
伝聞					雨が降るんだって。 明日は雨だって。	
言いつけ					雨が降る　だって。 明日は雨だ　だって。	
問い返し						雨が降るだって。↗ 雨だって。↗
訴えかけ						だめだって。 雨が降るってば。 明日は雨だったら。
逆接			雨が降ったって行く。 水だけだって生きられる。			
主題の添加			私だって写せる。			
反発	だって、知らなかった。					

表から次の二点が指摘できる。一点は，もともとは動詞を内包する「って」が，片や接続詞，片や終助詞へと大きく分化し，それとともに陳述性を帯びていく点である。この変化のひとつは，述語により近い助動詞を経て，陳述だけを担う終助詞への分化であり，またひとつは，これまた述語性を持った接続助詞から接続詞への分化である。渡辺（1974：52）は，終助詞について「文末近くに現れるものほど，また文頭にも現れやすい」として，「ねえ，母さん，五時に出発だったね。」「よー，元気そうじゃないかよ。」という例を挙げている。終助詞だけでなく接続詞にもこの変化は見られるわけで，「が」は文頭，文中，文末に現れる。文頭で聞き手の発話を受ける「だって」と，文末で「明日は雨が降るんだって。」とこれまた他者の発話を受ける「だって」には，聞き手への働きかけという意味的に共通するものがある。また一方で，「って」の述語の主体が一般化することで「って」は係助詞に近づく。ここに「って」がひとつの体系をなしているということが指摘できる。

ところで，引用,話題の引き込み,訴えかけの「って」には，ほぼ同じ意味で「ってば」「ったら」あるいは「ったり」という形があった。これらを「って」の活用形と考えることは可能だろうか。「って」は，定まった意味を持っているが，独立して使われることはないので,自立語とは言えない。これは,使役を表わす－aseru や受身を表わす－areru が，動詞の活用形ではないが，－asete，－aseta，－aseyoo 等とそれ自体活用するのとよく似ている。現代語を体系立てる活用形の中から Block.B（1969,1975：１-14）のものを取り上げ,「って」の変化形と比べてみる。

表 6-5 **「って」の変化形**

Block の活用形			「って」の異形態		例文
直説・非過去	tab	eru			
直説・過去	tab	eta	（行く	った）(6)	今いくったか。
推量・非過去	tab	eyoo			
推量・過去	tab	etaroo	行く	ったろう	おまえさんは,行くったろう。
命令	tab	e			
与件	tab	ereba	行く	ってば	行けってば　行かないこともないが。
条件	tab	etara	行く	ったら	行けったら　すぐに後ろを向くんだ。
選択	tab	etari	行く	ったり	行けったり,行くなったり,どっちだ。
不定詞	tab	e			
動名詞	tab	ete	行く	って	俺が行くって出かけた。

こうしてみると，「te」の系列の活用形はきれいにそろっていて，意味の上でも共通性があり，活用すると言えないことはない。ただ，活用するということは陳述の変化を必要と

するから，上の例のように「言う」という動詞の意味をはっきり包含している狭義の引用の場合に限るべきだろう。ここでは体系的に変化するという事実が指摘できる。

「って」の用法を整理して気付くもう一点は，名詞述語の「だ」のふるまいである。「って」が名詞をそのまま受ける場合というのは，「女ってそういうもんよ」という「って」が係助詞的に用いられる時である。一方，「って」が名詞をそのまま受けないのは，「って」が，終助詞（訴えかけ, 言いつけ, 問い返し），助動詞（伝聞）的な働きをする場合である。助動詞, 終助詞は文を受けるものだから, 陳述性がない名詞の場合には, 述語の「だ」が必要になるのは当然である。ところが，本来方言を除けば用言には接続しない「だ」が，用言あるいは名詞述語文に接続する点である。すなわち，言いつけの意味で「雨が降るだって。↘」「明日は雨だ　だって。↘」，問い返しの意味で「雨が降るだって。↗」という文があり得る。もともと「引用」によって引用される節の陳述性は失われる。野田（1989）の用語を用いるなら，「と」によって，その前の述部に「真性モダリティ」がなくなる。ところが，「って」の一部の用法は，陳述性がなくなり体言化している叙述内容をさらに名詞述語の「だ」が受けていることになる。このため，叙述内容が素材であることはなお一層明確になり，後続する「って」は，それが人の発話であることを際立たせる。そうした点から，言いつけ, 問い返しといった, 叙述内容ではなくむしろ相手の発話行為自体を問題にしたい場合に，この「用言＋だって」が使われると考えられる。

注

(1) 本章の内容は, 三枝（1997）の内容を発展させたものである。

(2) 主題文に現れる「って」の用法については，藤村逸子（1993）, 丹羽哲也（1994）「主題提示の「って」と引用」『人文研究』大阪市立大学，渡辺誠治（1995a）「題目提示に関する『¢』と『ッテ』」『さわらび』4 号　神戸市立大学，（1995b）「ある要素に対する新規の属性の取り入れに関わる形式ー「ッテ」と「¢」を中心に一」『日本語・日本文化』21 大阪外国語大学，普久原イサベル（1995）「〈同定説明〉と〈特質説明〉ー「って」「というのは」を中心に一」『日本語日本文化研究』5 号　大阪外国語大学らの研究がある。文末表現の「って」については，守時なぎさ（1994）「話し言葉における文末表現「ッテ」について」『筑波応用言語学研究』1 が，また, 係り助詞的「だって」については，小野米一・李志華（1988）「係助詞「でも」と「だって」の用法について」『北海道教育大学紀要』人文科学編 39 巻 1 号らの研究がある。

(3) 森重の 1954 と 1965 の研究には，「いう」の主語や意味に関して異なる点がある。また，ここにまとめたもの以外に森重が取り上げている「って」の用法もある。ここでは 1954 を中心に関係するところをまとめた。

(4) 田窪行則(1989)「名詞句のモダリティ」『日本語のモダリティ』くろしお出版は, メンタルスペース論をもとに,「N って」を（N）自体の定義をする用法として規定している。

(5)「って」というのは，話し言葉で使われるもので，これ自体省略形だが，次に見るようにその省略の仕方も一定ではない。

①おかみさんに出ていけって云われたんだ（さぶ）

②仕事が終わりしだい戻って来るって，本町のお店とかへ行ったわ（さぶ）

「って」の省略形の中で特に問題になるのは，次のような「ったって」の形だと思われる。

③だって，電話かけて，すぐ来いったって，女は，いろいろ支度にかかるのよ，ねえ，奥さん。（あうん）

④だから結婚記念日ったって，特別に何かをしたことなんてない。（日経）

⑤奥床しいったってさ，程度があるよ，御曹司ったって。（あうん）

⑥書くったって，読むったって，辞書がなけりゃどうしようもない。

こうした「ったって」は，「と言う」の過去形と「とする」の連用形が合わさったもの，すなわち引用と逆接の合体形と考える。また，次の例のように前に来る動詞が意向形の時は，「とする」の過去形と「とする」の連用形が合わさったもの，と考える。

⑦いやあ，ありゃ忘れようたって，かんたんに忘れられないやねえ（金魚）

⑧肝心の，おふくろが死んじゃったんだから，なにをしようったって始まりゃしない，僕も一巻の終わりだし，自分のことぐらい自分でやりますよ。（ばち）

次のような「ってったって」という使い方もあるが，これは「と言う」の省略が完全ではない段階と考える。

⑨まだってったってべらぼうめ，今夜からいっしょに寝るんだろう（さぶ）

⑩……十八のとしから七年の余もバー勤めをしていてそれなんだから，全くうぶってったって限界があろうじゃねえか，そうでしょう　たんばさん（季節）

(6)「って」の完了形「った」は，次のような「何てった」という形でしか用例には現れなかった。

①お父さん，こないだ，何てったすか。（だかつ）

②a　いま，なんてった。

b　よかったっていったのよ。（金魚）

③ね，今の人，名前何てったかしら。（金魚）

第３部　語形の持つ機能の連続性

第７章　話し言葉における「が」「けど」類の用法 (1)

1　はじめに

話し言葉においては,接続助詞の「が」「けど」類が,いわゆる逆接とは異なるふるまいをすることが多い。たとえば,次の例文の下線部は,いずれもいわゆる「逆接」には当たらない。

(1)「つかぬことを訊きますが,ついさっき,東京の人がこちらに見えませんでしたか？　坂の途中で,たしか東京ナンバーの車とすれ違ったのですが」
「ああ,見えましたよ。東京の板橋区の人でしたが・・・」（遺骨）

小出慶一（1984）は,文頭に現れる接続助詞「が」の機能を,また,白川博之（1996,2009）内田安伊子（2001）は,文末に現れる「が」「けど」類を分析している。小出,内田における機能分類は,様々な用法に目配りした精緻なものである。それを踏まえた上で,なお次のような課題が残されていると考える。

①話し言葉における「が」「けど」類の分析といっても,シナリオ等における用例が中心で,実際の発話データを扱っていない。そのため,「が」「けど」「けども」「けれども」「けれど」の違いは捨象されることが多く,相互の違いが明らかでない。
②言い始めと言い終わりの「が」「けど」類の用法を分けて論じているものが多く,接続助詞の基本的な用法とのつながりが見えにくい。

そこで,ここでは,以下の二点に焦点を当てて考えたい。

1)話し言葉のデータを分析することによって,「が」「けど」類それぞれの現れ方の実際を検討し,相互に違いがあるか否かを確認する。
2)話し言葉特有の「が」「けど」類の用法を,基本的な用法と関連づけながら考える。

2　話し言葉におけるデータの分析

話し言葉のデータとして,現代日本語研究会『女性のことば・職場編』（1987）と『男性のことば・職場編』（2002）を用いた。一文を１レコードとした場合,発話レコード数は,『女性編』が 11,421,『男性編』が 11,099 で,合計 22,620 である。なお,3 節で用法を考えるにあたっては,作例や小説等の会話例も使用した。例文の前の M は男性の発話,F は女性の発話であることを示す。

2.1　全体の使用頻度

表 7-１に,今回の話し言葉データにおける「が」「けど」「けども」「けれども」「けれど」の使用頻度を示す。なお,明らかに接続詞の働きをしているデータは除いた。

表 7-1　全体の使用頻度

	が	けど	けども	けれども	けれど	合計
頻度 （%）	207　（13.8%）	974　（65%）	168　（11.2%）	113　（7.5%）	37　（2.5%）	1499

表 7-１から，これらの助詞の中では，「けど」が圧倒的に多く使われていることがわかる。そのほかの助詞の使用は，一番多い「が」でも 14%に過ぎず，「けれど」は２%強に過ぎない。金澤裕之（2002）は，明治中期から昭和末期における話し言葉的な資料を５期に分けて調査し，昭和末期（具体的には 1987 年の言語データ）に，それ以前に一位の出現頻度を占めていた「が」が「けれど」類に取って代わられる逆転現象のあることを示した。ここでのデータもそのことを示している。

2.2　発話内の位置による使用頻度

次に，これらの助詞類が，一発話内のどの位置に現れるかを見る。表 7-2 の発話中とは，助詞の後に句点等がおかれて文が続く場合，発話末とは，一発話の終わりにこれらの助詞が使われている場合をさす。終助詞が付加する場合は，発話末として数えた。

表 7-２　発話内の位置による使用頻度

	が	けど	けども	けれども	けれど	計
発話中	142　（69%）	469　（48%）	142　（71%）	142　（62%）	142　（54%）	142　（55%）
発話末	65　（31%）	505　（52%）	65　（29%）	65　（38%）	65　（46%）	65　（45%）
（内数　談話末）	26	314	26	26	26	26
計	207　（100%）	974　（100%）	207　（100%）	207　（100%）	207　（100%）	207　（100%）

表 7-2 の右端の合計から，これら助詞類は全体として発話中での使用割合が発話末より高い。しかし，田昊（2013）の「名大会話コーパス」を用いた分析では，接続助詞の「けど」類が 4414 例（47%），「言いさし」の「けど」類が 5040 例（53%）と逆の結果が出ている。このことから，会話においては多少データによって異なるところはあっても，「けど」類の使用は発話中と発話末でほぼ同じくらい使われているとみるのが妥当と考えられる。接続助詞の種類をみてみると，「けど」の発話末の使用が多く，「けど」が接続助詞本来の用法とは異なる使い方をされていることがわかる。

今回用いた話し言葉データにおいて，一発話とは，①意味のまとまりがある，②ポーズがある，③他者のさえぎりがないものと定義されている。しかし，ポーズがあっても発話としては続いていると考えられる場合もある。そこで，他者からのさえぎりによって途切れるまでを「談話末」として，別途数えた。ただ，発話者の意図は文字化した資料からは十分わからず，また，相手が「うん」「はい」とあいづちを入れた場合には談話は区切られる。さらに，会話が電話による場合には，他者が発話をさえぎっているかどうか明らかではなく，

おおよその数に過ぎないが,談話末の使用頻度数は,発話末よりは少ないものの,談話末においてもこれらの助詞を使うことが少なくない。

2.3　男女別の使用頻度

表 7-3 から,助詞の使い方に男女差のあることが見て取れる。表中の（　）内のパーセントは,男女それぞれの合計を 100 とした場合の各助詞の使用率である。「が」「けど」「けれども」は,男女がほぼ同じように使用しているが,「けども」はもっぱら男性が,「けれど」はもっぱら女性が使用している。

表 7-3　男女別使用頻度

	が	けど	けども	けれども	けれど	計
男性	102 （ 13% ）	474 （ 62% ）	126 （ 17% ）	50 （ 7% ）	11 （ 1% ）	763 （ 100% ）
女性	105 （ 14% ）	491 （ 68% ）	42 （ 6% ）	63 （ 9% ）	25 （ 3% ）	726 （ 100% ）
性別不明	0	9	0	0	1	10
計	207 （ 13.8% ）	974 （ 65.0% ）	168 （ 11.2% ）	113 （ 7.5% ）	37 （ 2.5% ）	1499 （ 100% ）

この男女差は,発話内での使用位置にも現れているだろうか。次の表 7-4 をみると,全体の使用数でも男性より女性の方が助詞を発話末に使う割合が高く,また,女性が「けど」を発話末で使う割合が高いことがわかる。

表 7-4　男女,位置別使用頻度

		が	けど	けども	けれども	けれど	計
発話中	男性	71 （ 16% ）	244 （ 55% ）	89 （ 20% ）	36 （ 8% ）	7 （ 2% ）	447
	女性	71 （ 19% ）	220 （ 60% ）	30 （ 8% ）	34 （ 9% ）	13 （ 4% ）	368
発話末	男性	31 （ 10% ）	229 （ 73% ）	37 （ 12% ）	14 （ 4% ）	4 （ 1% ）	315
	女性	34 （ 9% ）	272 （ 76% ）	12 （ 3% ）	29 （ 8% ）	12 （ 3% ）	359
計		207	965	168	113	36	1489

これらの助詞を一発話内に複数使うこともある。その男女別の頻度を表 7-5 に示した。表 7-5 から,男性は,「ちょっと細かいんですがー,いちおー,１０月はつかの日付で,｛名字｝さんのほうにいただいているんですけどー,」のように,一発話内で異なる接続詞を使用し,かつその組み合わせも多様なことが見て取れる。全体に,男性の方が使い方が多様でかつ頻度も多く,女性は,男性に,比べると頻度が幾分少なく,使い方も限られている。

表 7-5　一発話における複数使用数

	男性	女性
同じ語形の使用数	44	29
異なる語形の使用数	18	8
合計	62	37
語形の組み合わせ数	4	9

2.4　丁寧化百分率とスピーチレベルシフト

三尾砂（1942）は,文の内部における文の丁寧さを見るために,戯曲を話し言葉のデータとして書き言葉とも比較しながら,文の内部で用言が「です体」「ます体」になる場合を考察している。文の終止部の用言が「です体」「ます体」である時,文の内部の用言はどのように変化するか,それが接続助詞によってどう違うかをみたのが,いわゆる「丁寧化百分率」である。三尾はさまざまな接続助詞を取り上げたが,ここでは「が」「けれど」類を抜粋した。

表 7-6　三尾砂によるデータ

書き言葉	小学国語読本	が	98%
話し言葉	戯曲	が	94.5%
		けれど類	86%

この結果から,三尾は,文の終止部が丁寧体の場合,「が」は最もふつうに「です体」形の用言を支配し,「が」が普通体に接続する場合は例外的なので,「です体」であることは丁寧さをさほど持たないとしている。

今回使用した話し言葉データでその点を見ようとしたのが表 7-7 である。発話の中で「が」「けど」類以降に「です体」「ます体」が使われている場合の,「が」「けど」類が受けている述部のスタイルを示している。表 7-8 に頻度数を示した。

表 7-7　丁寧体の使用割合

	が	けど	けども	けれども	けれど
「です体」「ます体」の使用数	**100%**	**51%**	**85%**	**92%**	**57%**

表 7-8　丁寧体, 普通体におけるそれぞれの使用頻度

		が	けど	けども	けれども	けれど
です・ます体→です・ます体	男	57	14	47	21	4
	女	56	32	10	27	4
普通体→です・ます体	男	0	34	7	3	3
	女	0	13	3	1	3
普通体→普通体	男	0	85	20	6	1
	女	3	101	11	0	3
です・ます体→普通体	男	9	15	10	3	1
	女	6	13	4	0	0

表 7-7 から,「が」の場合は「です体」「ます体」の文では同じ丁寧体のスタイルが選ばれ,「けど」「けれど」では, 普通体がある程度使われていることがわかる。傾向としては三尾の結果と一致している。文末が丁寧体である場合,「が」は丁寧体を受ける傾向があり, また, 普通体に「けど」が接続する傾向は, 男性より女性に多い。普通体の持つぞんざいさを「けど」によってやわらげていると考えられる。「が」が, 普通体では用いにくいという現象には, これらの助詞の通時的変化にも原因が求められるだろう。「けど」類は, もともと条件を表すものであった(土井洋一（1969）のに対して,「が」は, 格助詞の「が」を出自とする(石垣謙二（1944）, 森野宗明（1969））。そのため,「が」は前後を切り離す働きが強い, というよりも, そうしたものが接続助詞として独立したと考えられる。今回のデータ中, 次の例の下線の「が」は「格助詞」なのか「接続助詞」なのか判然としないという点で, その出自を示しているとも言える。

(2)　{宗教団体名} もねー, ほんとは行くはずだったんだけど, 中国にねー, ただ, {宗教団体名} は {社名} をね, 経由して行くはずだったのが {社名} がこけたからさー。（男性 2660）

全体としては, 表 4-7 は三尾のデータと似た傾向を示したが, 内容的にはかなり異なる点がある。まず, 今回のデータでは丁寧化百分率を見るのが極めて難しかったが, それは, ①文の終結部に用言が来ない例, あるいは, 文中の接続助詞以降終結部までの間に用言がまったくない例も少なからずあること, ②文末が条件形や連体修飾で言い終わっている場合があること, ③①とは逆に複数の用言が使われ, しかもそのスタイルが一定していない場合があること等による。表 4-8 では, 全体の傾向を見ることを主眼として, 接続助詞の後に用言が現れた場合, その使い方如何は考慮せず, その用言の文体を取り上げている。複数ある場合は, 接続助詞が受けているスタイルと異なるものがあれば, スタイルが変わったものとして数えた。今回の結果が三尾の結果と大きく異なるのは, 表 4-8 の下段に示されているように, 文末が普通体であっても文中の接続助詞の前に丁寧体が来る例があったことである。

三尾は「「だ体」の文は,終止部はもちろん,文の内部でも,すべての用言が「だ体」形であります」（同 265）と述べているが,それとは異なる結果が示された。すなわち,話し言葉では,まず,終止部が定めにくいこと,今回使用したデータは,発話者が複数いる職場での会話で,発話が１対１で行われていないため,様々な条件によってスタイルが選ばれていると考えられる。これはスピーチレベルシフトの問題と言えるだろう。

足立さゆり（1995）は,スピーチレベルシフトを起こす条件として次のみっつの条件をあげている。

第１条件　社会的条件（社会的地位,力関係,年齢,場面・・・）
第２条件　心理的条件（動作主を意識する視点の移動によるもの）
第３条件　文脈的条件（文脈によるもの）（同 307 から）

鈴木睦（1997）は,社会言語学的観点から普通体と丁寧体のスタイルシフトの問題を分析し,「丁寧体世界では＜聞き手の領域＞と＜話し手の領域＞は,はっきりと区別されており,丁寧体世界において丁寧さを保つためには＜聞き手の領域＞に踏み込むことを避け,＜利き手の領域＞に言及する場合には,＜中立の領域＞や＜話し手の領域＞について述べる形を使うなどの配慮が行われる。」（同 56）と述べている。これは,先の３分類の第２条件について述べたものと考えられる。第３条件に入ると思われる統語的条件については,ある程度三尾が述べている。三尾は文の内部で「です体」が用いられる場所として,独立部,接続部,連体部をあげ,接続部においては,接続の緊密度,語調のよしあし,「い」形容詞であるかないか,慣用といった副条件があるが,接続助詞の種類が,スタイルの選択にもっとも大きく影響すると考えた。ただ,今回のデータを見ると,接続助詞の種類は重要ではあるけれども,話し言葉における選択条件はもう少し複雑なように思われる。終結部が普通体でありながら,接続助詞の前で丁寧体が使われている例はたとえば次のようなものである。

(3) じ,今日いつもねー,神社の横通るんですけどー,（うん　他者（男））いつもねー,冬咲いてるのが咲いてた。（女性 4354）
(4) きょう,なんか[名字]さんがなん回かいらしてお話し,したんですけど,チューターのこととか,このチューターってゆうのは学生なのーって聞かれちゃった。＜笑い＞（女性 8319）
(5) それとー,[科目名]と[科目名]はー,えーと,[科目名]3 単位だってゆうとかー,そうゆうふうに食われちゃ可能性も出てくるしー,もっとすごいことになるとー,この前ちょろっといいましたけどー,えーとー,74 から 87 の間に置けばいいわけだからー,総卒業単位がー,そうすっとー,科によって卒業単位数が違ってもいいってことになっちゃうのね。（男性 10012）。

三尾は,接続部において仮定形や中止形をあげているが,引用表現もシフトに大きく関係している。ただし,その関係のし方は,仮定表現や連体表現がシフトしにくいのに対して,引用表現は,次のようにシフトが終結部のスタイルとは直接関わらない点にある。

(6) あ,だから,指導要領でも,あの日の丸君が代は別ですけどって<笑い>いいながらさー,いったの覚えてるよ,おれな<笑い>。(男性 10177)
(7) あのー,まあ1台1台ですねー,ばらすのはいいんだけれど,ちゃんとー,足と本体をセットにしてもらわないと,わからないっていわれちゃったんですよ。(女性 6111)

仮定形は三尾の指摘にあるようにシフトしにくい。

(8) でー,さらにーここでー,あのー[店名さん]でほんとは数字が入ったらー,ここに,<笑い>計算された数字がでるはずだったんですけれどもどうも,それができてなかったみたいでこれちょっとあとで[名字]さんとあと詰めます。(男性 9248)

大まかに仮定形,連体形はシフトしにくく,中立形はしやすい。また,引用表現は文全体のスタイルには左右されにくいと言える。しかし,規範があるとしても,話し手はそういう制約,規範から意図せず外れることも,また,意図的に外れて自分の意図を表現するということもあるだろう。次の例は,基本的には「です・ます体」が使われているが,下線部において突然丁寧度をあげることで,内容を冗談のように響かせる効果をもたらしている。

(9) 女:うーん。
男:てゆうか,もうほとんど住んでるような感じで。
女:あ,一緒にー↑
男:毎日通ってきてたりするわけですよー。
女:★[(2)]そうゆう
男:→住んじゃいないすけど。←
女:そうゆう経験はございませんけどー<笑い>。
男:通い,通い婚のような{うーん(女)}感じでー。(男性 5045)

2.5 形容詞への接続

三尾は,話し言葉の分析において,形容詞のスタイルについてもふれ,「が」はイ形容詞に付く場合には特にその使用が避けられること,一方で「小さいですが」といったイ形容詞の「です」体も落ち着かないものがあり,結局,話し言葉では,イ形容詞の原形と,それに直接付いても失礼な感じを与えない「が」以外の助詞の結びつきが多いと述べている。今回の資料でその点を見たのが表 7-9 である。なお,表中の形容詞は,肯定形に限定し,また,

「たい」は省き,「わかりやすい」等の「やすい・にくい」は含めた。また,「いい」の使用頻度が高いので,「いい」と「その他」の形容詞に分けた。

表 7-9　助詞が接続する形容詞の文体

		が	けど	けども	けれども	けれど
形容詞	いい		21	1		1
	その他		16			
形容詞＋んだ	いい		28	2		2
	その他		13	2		
形容詞＋です	いい		2			
	その他		4			
形容詞＋んです	いい	2	13	2	3	2
	その他		6	1	2	
計		2	103	8	5	5

今回の資料でも,「が」が形容詞に直接付く例はなかった。また,イ形容詞に付く助詞は,そのほとんどが「けど」であること,「けど」との結びつきにおいては,「小さいですけど」といった結び付きは相変わらず少なく,その代わりに,イ形容詞に直接付くか,もしくは,「イ形容詞＋んだけど」の結びつきが多いことがわかる。形容詞もしくは普通体の直截さを「けど」によって和らげているためと考えられる。

2.6　「のだ」への接続

「けど」類の前の述語に「んだ／んです」が入る場合と入らない場合とがある。この違いが,そもそも「のだ」に求められるものか,あるいは,「けど」がその選択に作用している部分があるのかは明らかでない。「けど」の前が名詞の場合には,もともと「のだ」自体に名詞機能が含まれているので,次の例（6）（7)にみるように,大きな違いは見出しがたい。

（10）あのー,じゃ１番のあのー,じこーぐか（治工具課）の,おー行動点検のほうですけどもー,えー,まあ非常に囲われた部屋の中での作業とゆうことでー,えー,ま,作業に慣れがあんのかなーとも思ったんですけどもー,（略）（男性 3684）

（11）えーとですねー,１番の行動点検なんですけどもー,あのー,えー,非常停止をしてー,えー機械を止めましてー,えーハンドルーそうさー（操作）にしてー,えー,タップとですね,スピンドルの,あの,切り離しをやりましたけどもー,（略）（男性 3709）

もちろん,次のように「スコープの「のだ」」の場合には,「のだ」が必要だが,これは「けど」の有無とは関係がない。

（12）こわかったのが,提案なんですけど。（女性 7207）

「のだが」「んだけど」の問題を正面から論じているものに,野田春美（1995,1997）,李徳泳・吉田章子（2002）がある。それぞれ,幅広く用例を観察し,いくつかの知見が得られているが,今後検討すべき問題もある。野田（1997）は,「「のだが」を用いたほうが,従属節の内容から予想される順当な事態が生じなかったことに対する意外性や不満が多少強く示されるようである。」（同 169）と述べている。たしかに,書き言葉の場合にはそういう傾向が認められるが,話し言葉では「のだが」が強い不満を表すというのは,「が」と「普通体」の結びつきが行われないためで,スタイル上の制約が大きいだろう。また,李・吉田（2002）は,発話末で用いられる「けど」について,「「んだ」をそのまま発話末に残すことを避けることで,断定のムードによってもたらされる感情や気持ちが全面に出るのを弱める」と述べている。「思ったんだけど。」と「思ったんだ。」を,比べればたしかにその通りだが,「思ったんだけど」と「思ったけど。」を,比べると,その差は大きいとは言えない。

（13）これも入ってると思いますけどー,これはあのー,３月ふつか（２日）に,あのー,いちお,うちの中のー,えーと,えーとあすこに掲示されてると思うんだけど,まー,そのあたりここらへんの話はしますがー,えーと３月ついたち（１日）からなのか（７日）のあいだありますんでー,えーとこの場を借りてー,話しておきます。（男性 3611）

例（13）の「と思いますけど」と「と思うんだけど」の違いは,文体以外にどこにあるのだろうか。多くの場合,「が」「けど」類の前の「のだ」は言わないことも可能である。今村（2007）は,「のだ」の選択を「語りかけ度」によって説明しているが,たしかに,話し手は自分の発話意図に応じて「のだ」を使用するか否か決めている面が大きいと思われる。

2.7　述語の種類

先に,助詞類の前に来る述語のスタイルの違いを見たが,ここでは述語の種類をみてみる。「けど」類の前に来る述語の中で頻出頻度の高い 4 語を,表 7-10 に示した。この 4 語で全体の使用数の 30%近くを占める。いずれも話者の断定を表す表現ではない点が共通する。

表 7-10　使用頻度の高い述語

	が	けど	けども	けれども	けれど	計
と思う	34	120	20	11	1	186
ある・いる	12	55	17	10	0	94
いい	2	65	5	5	5	82
と言う	12	44	6	4	0	66
計	60	284	48	30	6	428

助詞に接続する述語の中では,動詞がもっとも多いが,その動詞の中でも,いわゆる思考動詞が三分の一を占め,特に「と思う」が多かった。

(14) A：きょう,雨降るのかな。
　　B：いやー,きょう降らないと思いますけど＜笑い＞。（男性 6012）
(15) M：まだ若いから,ねー↑,こういうの使う必要ないと思うけどー。
　　F：それでもなんかー,禿げてきたんですけど。＜間　7 秒＞（男性 6917）
(16) M：でー,ちょっとま,あんまりちょっと目立つこともできないんでー,あのー,こちらも極力折れるところは折れようと思ってん★ですけどー。
　　F：→あー,わかりました。←（男性 1295）

森山（1992）は,「と思う」の基本的意味を「個人情報の表示」ととらえ,さらに,前に来る情報を,その情報の種類によって,不確実なものとして表示する場合と個人的な意見として表示する場合とに分けた。「「と思う」が聞き手にも共有させるべき情報に共起した場合,個人的な情報として提示することは,不確実であるということを示」し,情報内容が「情報として共有されていくことを目指さない場合,「と思う」はそれが個人的・主観的なものであることを明らかにする」（同 113）という。上の例では（14）が不確実,（15）（16）が個人的な意見を表す「と思う」に当たるだろう。発話中では,統語的に「けど」がなければ節はつながらないが,発話末では必ずしも必要ではない。しかし,この「と思う」がなければ,話し手は発話内容を断定的に言いきることになる。そうはしたくないという時に,基本的に接続助詞で後へ続く「けど」を用いることで,言い切りの回避が行われていると考えられる。3 番目に多く用いられている述語は,「のはいい」「てもいい」「ば／たら／といい」等の,条件とともに使われる「いい」類である。「見た目は悪いけど,味はいい。」といった「いい」は含めない。

(17) だから,ねー,なんか,ほら＜間＞趣味がある人とかだったら,ま,そういうもん買ってくればいいけどぉー。（女性 456）
(18) ぼろいん,ほら,ぼろくて安いんなら全然いんだけどー。（女性 633）

山田進（2000）は,こうした用法の「いい」は,基本的に「ある事態を受け入れることができる」ということを示すと述べている。「と思う」と同じく,断定的な判断を避けるために使われており,モダリティ表現のように働いている。

「けど」節に現れる述語で,２番目に頻度の高い語は「ある・いる」,４番目に高い語は「言う」類であった。「ある・いる」には,「ことがある」を含め,「動詞＋てはいる」は含めない。また,「言う」は,「と申す」「と言われた」等を含む。

(19) M:ことさら悪いところを＜笑いながら＞どうしようといってた感じも,確かにあるけどな。（女性 6337）

(20) あんまりおいしくないとはゆったんですけど,初物（はつもん）だってゆったから柿を持ってきました。＜笑い＞（女性 3348）

これらは,客観的な事態を表す述語で,話し手の判断を示さない。このことから,「けど」類が事態をありのままに提示する節,もしくは,話し手の主観を控え目に述べる節で多用されていることがわかる。

「けど」が,どのようなモダリティ表現に接続するかをみたのが,次の表 7-11 である。「形式名詞＋だ」は,表にあげたもののほかに,「ものだ,ようだ,ところだ」が各 2 例,「だけだ,そうだ」が各 1 例あったが,「べきだ」はなかった。

表 7-11　共起するモダリティ表現

	が	けど	けども	けれども	けれど	計
たい／てほしい	6	18	1	3	0	28
かもしれない	3	19	1	2	2	27
らしい	0	10	0	1	1	12
だろう／でしょう	0	7	3	0	0	10
わけだ・わけじゃない	1	5	2	1	1	10
てはいけない	0	6	0	0	1	7
ことだ	1	2	1	1	1	6
はずだ	0	2	0	1	0	3
みたいだ	0	3	0	0	0	3
ねばいけない	1	0	0	0	0	1

「けど」類の前に来るモダリティ表現には,推量,希望等を表すものが多い。逆に「べきだ」「なければならない」等の当為のモダリティ表現は現れないことから,「けど」が強い断定を表す表現とは共起しないことがわかる。

2.8　終助詞との共起

表 7-12 に終助詞との共起を示した。助詞に終助詞が付加される場合はあわせて 184 例だったが,その大半は「ね」で,次が「さ」であった。これは,相手に共感を求める「ね」「さ」の意味から納得できる。興味深いのは,「ね」と並んで,会話で頻度の高い「よ」がひとつも現れない点である。表現としては,「だけどよ」は可能である。しかし,もし用いれば「よ」がもともと持つ相手に自分の考えを押しつける意味がさらに増幅されて非常にぞんざいに響くため,普通の会話では避けられると考えられる。

表 7-12　共起する終助詞

	男性	女性	計
ね／ねえ	62	69	131
さ／さあ／っさ	25	17	42
な／なあ	9	2	11
計	96	88	184

以上,今回の話し言葉データの分析からわかったことをまとめると,次のようになる。

1) 総数約 1500 のうち,「けど」の使用が 65%を占め,圧倒的に多い。それに続く「が」でも 14%に過ぎない。
2) 接続助詞と呼ばれてきたが,「けど」は,発話末,談話末でもよく用いられる。
3) 「が」「けど」「けれども」は男女の使用頻度に大きな差が見られないが,「けども」はもっぱら男性が用い,「けれど」はもっぱら女性が用いる。
4) 文中で,「が」は普通体を受けることが多く,「けど」「けども」は「です・ます体」に接続することも多い。文末が丁寧体の場合,文中の「が」は丁寧体を取り,「けど」類は普通体の場合も半数近くあった。しかし,文末が普通体であっても文中で丁寧体が使われることもあり,話し言葉においてはレベルシフトが頻繁に起こっている。
5) これらの助詞とともに用いられる述語には,「と思う」「条件＋いい」といった話し手の判断を控え目に述べる表現,「ある・いる」「と言う」といった客観的な叙述表現が特に多い。
6) 「と思うけど」の使用が多いことから,「けど」は,普通体の直截さを和らげ,発話の丁寧度を高める働きをしていると言える。

これら一連の接続助詞を「けど」で代表させることはそれほど問題がないが,「が」は,使われるスタイルに制約があるので,その点を考慮する必要がある。

3「が」「けど」類の用法

3.1　「けど」節類の基本的意味

２節で得られたデータを参考にしながら,本節で「けど」類の持つ基本的な意味を考えてみる。

「けど」類は,発話中に用いられることが多く,基本的には接続助詞の機能は失っていない。接続詞,接続助詞の「しかし」「が」「けど」等は,従来「逆接」に含まれることが多いが,多くの先行研究が単なる逆接ではないことを指摘している。たとえば,佐竹久仁子（1985）は,「シカシ・ガ・ケレドモ類の接続詞は,」「実際は逆接にはおさまらずもっと広い範囲で使われている」（同 163）として,「前後件を直接あるいは間接に否定的に関係づけるものとして」（同 166）見ている。前田直子（1995）は,「スキーはできるけれども,スケートはできない」という文について,この文は「スキーはできて,スケートはできない」というテ形の表現に近いこと,また,「スキーはできるけれども,スケートもできる」というふたつの事態の共存も表現できることから「ケレドモは,いわば前件からは予測できないような種々の事態を後件に述べることができ,それらの一つが逆条件あるいは逆原因的事態であるに過ぎず,厳密には論理文の中に入れるべきではない」（同 505）と述べている。浜田麻里（1995）は,「しかし」を「ところが」と,比べ,「しかし」の基本的な意味として「ひとつのことがらについて P という側面が存在すると同時に,それと異なるカテゴリーに属する Q という面が存在するということを示し,結果的に「Q にも注目せよ」ということを表示する」（同 589）と述べている。接続詞は前後が文で,接続助詞は従属節におかれるという違いはあるが,「しかし」に意味的に近い「けど」節も,後続する主節に注目せよという働きを持っていると考えられる。林知己夫（1996）は,この働きをアンケート調査の提示文における日本語の問題という観点から明らかにしている。

林の調査では,「自分が使われるとしたらどちらの課長がよいか」という質問に対する回答として,次の二組の文を用意した。

①１　規則をまげてまで,無理な仕事をさせることはありませんが,仕事以外のことでは人のめんどうをみません

２　時には,規則をまげて無理な仕事をさせることはありますが,仕事のこと以外でも人のめんどうをよくみます

②３　仕事以外のことでは人のめんどうはみませんが,規則をまげてまで,無理な仕事をさせることはありません

４　仕事以外のことでは人のめんどうをよくみますが,時に規則までまげて無理な仕事をさせることがあります

①の提示文では,約 85%対 10%強の割合で,「めんどうをみる課長」を示す２が選ばれた。ところが質問文の前後を入れ替えた②の提示文では,3 と 4 の課長がそれぞれ約５割弱で選ばれた。すなわち,「が」節には,話し手の主張は強く示されず,「が」節自体は,後続節に注目せよというサインとなっている。

ここでは,「が」「けど」類の基本的な意味を「異なる側面があることを示すこと」かつ「後続節焦点化」ととらえ,従来の逆接という解釈は「けど」類の機能のひとつに過ぎないと考える。

3.2　「が」「けど」節類の機能

「が」「けど」節類の機能を考えるにあたって,接続助詞類の終助詞的用法に着目した白川（2009）の研究をみておきたい。白川は,従属節だけで言いたいことを言い終わっている文を「言いさし文」と定義し,ケド節の機能を「聞き手に参照情報を提示すること」にあるとした。白川（2009）の考察は,従来省略や倒置とされた接続助詞の言い終わり用法に,言い切りの文と同等の完結性があることを指摘した点に意味がある。白川では「言いさし文」と「完全文」とを別のものとして対峙させているように思われるが,日常の会話においてそもそも完全文が存在するのか,完全文が何を指すのかについては疑問がある。会話では頻繁に中断があり,話し手自身の言い淀み,言い直しなどもあって,主述が対応して完結する文は多くない。ここでは,「言いさし文」「完全文」という区別はつけず,発話内に現れるすべての「が」「けど」類を対象に考えていくことにする。

「が」「けど」節類の機能を,大きく,①前置き,②逆接・対比,③言い切りの回避,④注釈,のよっつに分ける。「が」「けど」類の基本的な意味と考えられる「異なる側面があることを示すこと」かつ「後続節焦点化」は,発話内の現れる位置や文脈によってどちらかの意味合いが強まったり弱まったりする。以下,順にみていきたい。

①前置き

発話の言いはじめに現れる「けど」類は,ある話題を持ち出すにあたり,談話の主題をまず示すことによって,次に続く主要な話題を述べる導入となっている。「については」といった意味で話題を導入するので,名詞述語がよく用いられる。

（21）えーとー,ＣＫ点検,2 番なんですがー,（男性 3771）
（22）次はー,｛名字｝先生ですけど。（女性 1401）

話題を導入するものではないが,話の切り出しに使われる次のような使い方もある。

（23）行,うん,なんだかよく分かんなん（ママ）だけど,行挿入で普通なんにもないところから（ええ,他者（男）),データ入力していきますよねえ。（女性 10963）

また,次のようなメタ表現もよく用いられる。

名詞述語の例

小さいことだけど,たとえばですけど,ぶちあけた話なんですけど,提案なんですけど,変な言い方だけど,ちょっと早い話なんですけど,さっきの続きだけど,変な話だけど,別件なんですけど,お願いなんですけど,

形容詞の例

しつこいですけど,悪いんだけど,ちょっと細かいんだけど,すいませんけれども

動詞の例

前お話ししたんですけど,前にお話をしましたが,お聞き苦しいと思いますが

話戻るけど, 話はがらっと変わるけど

②逆接・対比

統語的には, 取り立ての「は」「も」が用いられ, 「昔ー今, 大きいー小さい」といった対照的な叙述が表現されることも多い。

(24) トカゲはだめだけど, 蛇平気なんですよ, ぼくは。（男性 5327）

③言い切りの回避

発話において, 後続節の来ることが期待されない場合もある。そうした場合は, 「と思うけど」に代表されるように「けど」類は, 話し手の主張を弱める働きをする。これは, 「けど」類がもともと別の面があることを示すために, 相対的に「けど」節の叙述内容を弱めるためにおこる。そして, 「けど」類が言い切りで用いられる場合には「けど」のもうひとつの基本的な意味である「後続節焦点化」が大きな意味を持つこともある。すなわち, 話し手はまだ発話が続くことを意識している, というサインとして「けど」類を用いる。

(25) A：：→そうですね, よく←, はい, はい。
B：それから, あと［名字］さん,（わかる　Inf(女)）は,（ええ, ええ
Inf(女)）［名字］先生に★おたずねしたってゆうように聞きましたけど。
A：→そうです, ←とてもいい, かたですけど。（女性 1628）

(25) の例で, 発話者A（ふたつ目）は, 人を推薦しており, 「けど」は, 文脈から対比を意味していないことは明らかである。人を推薦する場合には「とてもいいかたですよ」や「とてもいいかたです」という表現も自然だが, 「けど」を用いるのはなぜなのか。話し手は, 自身の主張を弱めると同時に, この文脈では, 相手に「あなたはどう判断するでしょう？」と会話が続くサインを示していると考えられる。次の例も, そうした側面が強い。

(26) 「田口さんというのは, ご主人の同僚であることは間違いないのですね？」
「ええ, 同僚っていうか, 主人の部下でしたけど」（遺骨）
(27) 「お宅のお寺はどちらですか？」
「山口県です。日本海に面した長門市というところですけど」（遺骨）

(26)(27)の例でも「けど」がなくても文は成り立つが, 話し手は, 相手の質問に答えつつ, 質問の意図がその質問のほかにあると察していることを「けど」によって示している。このように「言い切りの回避」に当たる用法では, 「けど」類の基本的な意味である「異なる側面があることを示すこと」かつ「後続節焦点化」が, 話し手の主張を弱めるため, また, 次に会話が続くことを話し手が意識しているサインとして働いている。

④注釈

次のような用法を注釈と考える。

(28) ＜果物屋の店先＞パイナップル食べない？　いま入ったばっかなんだけど（池袋）

(29) 「先ほど,特設スタジオの電話にかけていただいたときには,あなたは,自分はこの事件の犯人だ,話したいことがあるから電話したとおっしゃったそうですが？」
「そうそう,そう言いました。なかなか信じてもらえなかったけど」（模倣）

(28) の例は,「前置き」としても使えるが,ここでは話し手が主節を前に出したため,「けど」節は後ろにまわり,注釈の機能を持つことになった。(29) の例は,「言い切りの回避」でもなく,前の文と順序を入れ替えることもできない点から,話し手は注釈的に付加したと考えられる。三上（1953）は,「チョットオ伺イシマスガ,郵便局ハドチラデセウカ？」「アノ人ニハ,私モ会ツタガ,トテモ元気ダネ」における「ガ」は,主文の内容とは無関係で,順接でも逆接でもないとして平接の「ガ」と呼んだ。ここでの分類の「前置き」と「注釈」は三上の平接の「ガ」に当たるが,実際の発話において,話をスムースに進めるために前置きを置くことと,補足的に後から付け足しを行うのとは別の意図を持つものであり,必ずしも置き換えはできないので,ここではふたつに分けた。話は切り出されているが,主要なテーマを補いたいと思った時,また,主題に付随情報をつけたいと思った時,明確な論理的意味を持たない「けど」類は使いやすい便利な表現と言える。

４．まとめ

本章では,まず,２節において「けど」類の用法を実際の話し言葉データにあたって調べた。話し言葉においては,いわゆる「逆接」の接続助詞とされる「が」の使用は少なく,「けど」が多く用いられることがわかった。これは,「けど」が普通体の直截さをやわらげこと,また,データから,①「けど」節が発話末,談話末でも使われることが多いこと,②男性専用,女性専用の接続助詞があり,また,同じ接続助詞でも男女の使用頻度に差が見られること,③「と思うけど」「条件＋いいけど」といった固定化した,話し手の主張を弱める表現が多いことがわかり,「けど」節が,モダリティ表現の構成要素となっていることがうかがえる。「けど」類の基本的性格は,節と節を結びつけるところにあったが,現代語では文末に使われることも多くなっており,白川（2009）は,こうした用法を「言いさし」「言い残し」ではなく「言い終わり」とみる。先に「が」は,格助詞の「が」を出自とする石垣の説を引いたが,石垣（1944）は「思ふが悲しさ」という上代の例が,平安期には「程なく籠りぬべきなめりと思ふが悲しく侍るなり（天の羽衣）」と変化したことについて,「かくて喚体形式は全く述体形式に移ったのであるが,「が」助詞変遷の過程に於て此の事実は誠に特筆大書するに足るものである。何となれば主格「が」助詞が用言を承け得るに至つた事こそ,爾後の活発なる「が」助詞変遷を可能ならしめる根底であり,局限すれば「が」が接続助詞たる

べき運命も此の時に約束されたのであるとさへ云ひ得べきだからである」（同 1944, 1981 : 467）と述べている。「けど」類も，もともと条件を表すものであった（土井洋一（1969）が，「近世前期になると，急速に用法を拡大し，「けれど」のほかにすでに「けど」の異形も生じ，活用語一般の終止形に下接するとともに，接続詞としての用法も現われる」（同 415）と言う。現代の「が」「けど」類の変化は，この陳述形を受けるに至った時から始まっていたと考えることもできる。

注

(1)本章の内容は，三枝（2007）の内容を修正，加筆したものである。

(2)データ中の記号で，↑は上昇イントネーション，★は，発話の途中で次の発話が始まった時点，→　←は，前の発話への重なりの始まりと終わり，｛　｝は，聞き手のあいづちを表す。ほかも同様。

第8章　「だ」が使われるとき[1]

1 はじめに

これまで「だ」は名詞述語として働く,とされてきた。渡辺実（1971）の構文論においては,文を構成するものとして統叙,再展叙,陳述がある。すなわち,「統叙の働きによって備わった叙述内容を素材として,再展叙がはたらかず陳述が働いたときに,はじめて文は成立する」（同92）のである。そして,助動詞の「だ」は,「統叙をしか分担しない」（同125）とされる。しかし,この「だ」の名詞述語を作る働きに加えて,「だ」にモダリティ性を認めようとする立場がある。そのひとつは,文末の「だ」にモダリティ要素も認めるもので,メイナードに代表される。メイナード（2000）は,「だ」を「情報の『だ』」と「情意の『だ』」に分け,前者の「情報の『だ』」は,主に情報の場で命題構成のために機能し,後者の「情意の『だ』」は,主に主体の情的態度の表明のための指標として機能すると言う。次のメイナードの例で,最後の発話の「です」が「情報の『だ』」,「だ」が「情意の『だ』にあたる。

(1) 私に追いつくと,佐藤くんは,フウっと大きく息をした。
「あんた,いつもノロマなのに,こういう時だけ速いんだー」
いきなりこれだもの・・・。どーせ,ノロマです<u>よ</u>ぉ・・・<u>だ</u>。（同189）

他の立場に,従来の名詞述語用法にかわって,文末の「だ」はモダリティ要素しか持たないと考えるものがある。荘司育子（1992）,鈴木睦（1993）は,正面から「だ」の問題を扱ったものではなく,荘司（1992）は,疑問文と「か」の関係をみる上で,また,鈴木（1993）は「女性語」の特徴を考えるにあたって,「だ」にモダリティ的要素があることを指摘している。荘司は,次のような事実に注目した。

(2) 来週の委員会には主席する？　　＊このお菓子は甘いだ？
来週の委員会には出席します？　　＊このお菓子は甘いです？

「ます」は丁寧さを担う要素と考えられるが,「だ」はほかの機能も併せ持っているために疑問化しにくいと考える。ただし,井上史雄（1998）は,女性店員が客に「スーツです？」と話しかける「カ抜き」現象が増えていることを指摘している。また,問い返しの用法ならこうした文は可能である。また,「だ」は,文末において男性は使っても,女性は使わないことが多いことから,「丁寧体」の「です」に対応する普通体は,「だ」ではなく,「だ」を削除した形と考える。荘司（1992）自体は,「だ」の分析を目的とする論文ではないが,その（注）において「『だ』という形式は英語のbe動詞にあたるようなコピュラと埋解するよりも,むしろ意味的機能は断定,判断を担うモダリティで,統語的機能としては後続する言語形式（過去や完了の時制辞,伝達のモダリティ形式など）を導くためのものにすぎないのではないか」「現在形の言い切りで終わる『だ』はオプショナルなもの

ではないか」と述べている。メイナードが「だ」のことがら的側面まで否定していないのに対して,後者の立場は,「だ」をモダリティを担う要素と考えていることになる。

メイナード,荘司,鈴木らが指摘するように,「だ」がいわゆるモダリティの要素を持つことは否定できない。しかし,また,文内において省略できない必須要素の「だ」も存在する。ここでは,文末だけに注目するのではなく,文の中で「だ」が構文的に必要なのはどういう場合なのか,そして,それぞれの「だ」がどういう役割を担っているのかを考えてみたい。「だ」の扱いにおいて,話し言葉と書き言葉とでは異なるところが大きいので,基本的に話し言葉を中心に考えるが,後半,書き言葉についても若干ふれる。「だ」が構文的に必要な時を考えるにあたっては,文末,文中,文頭に分けて,この順にみていく。その前に,「だ」の活用と働きについて筆者の立場を次に示す。

2「だ」の活用と働き

「だ」の活用は,次のように考える。

	現在	過去
言い切り形	だ	だった
連体形	な／の	だった
連用形	に／で	だったり
推量形	だろう	だったろう
条件形	なら／ならば	だったら

ただ,ここでは,「だ」の活用形すべてを考察の対象とするのではなく,この活用形のひとつ,言い切り形「だ」の表れを観察する。

「XはYだ。」という名詞述語文において,「Yだ。」という述部は,形容詞的でことがらの性質や状態を表す。名詞述語文は「XはY。」でも意味は通じるので,それに「だ」が付加されることで,ことさらに「確認」の意味合いが加わる。「XはYだ。」という名詞述語文が,動詞,形容詞文と異なるところは,この「確認」の意味が形になっている点と言える。

名詞述語文は,多くの言語に見いだされる一般的な現象と考えられる。

Benveniste,E(1966,1983)が名詞文（Benvenisteは,《be》動詞のない文も考察の対象にしているため,名詞述語文とは言っていない）の現れる言語を数え上げるよりそれを知らない言語を数え上げた方が簡単に済むと述べている。しかし,名詞述語文に関する比較研究は,日本語においても多くはない。カモンオーン・コモンワニック,沢田奈保子（1993）は,タイ語と日本語の名詞述語文を比較し,タイ語にはpenとkhwwという２種類のコピュラの使い分けがあること,その使い分けは,penは集合の属性を問題にし,khwwは集合の類名を指し示すことにあると述べている。日本語にはこの使い分けはない。劉雅静（2012）は,中国語と日本語の一語名詞文を比較している。犬が何かをくわえて庭に戻ってきた時に,何だろうと思ってみた場合には「あ,スズメだ！」,「啊,是（只）麻雀！」がともに成

立するが,物置の掃除中に鼠がいることに気付いた場合は,「あっ,ネズミだ！」は言えるが,「啊,是（只）老鼠！」は成立しないという。こうした例から,日本語では見た瞬間に「それが何であるか」を「だ」で表すだけでなく,「何だろう」という認知過程を経たのちに判断を述べる場合にも「だ」が使えるが,中国語では後者の意味は「是」にはないという。「だ」の意味範疇は,日本語を観察するだけでは得にくい知見であり,日本語の「だ」が持つ「判断」「確認」という意味も今後吟味される必要があると考える。

3「だ」のモダリティ性

「だ」のモダリティ表現については,メイナードが(2005)がいくつかの例をあげ,また,李明熙(2011)は「だ」形とゼロ形の選択をスピーチスタイルとの関係で見ている。しかし,広く文における「だ」の用法を扱ったものは見当たらないので,ここではできるだけさまざま用法に目配りしたい。

名詞述語の「だ」が構文的にどういう場合に義務的で,いつ義務的でないのか,それを考えるに当たっては,①「だ」を省略してもその表現が成り立つか,②その「だ」が「です」に置き換えられるか,の二点を中心に,文末,文中,文頭に現れる「だ」について見ていく。大ざっぱに言って,「だ」が省略可能なものは文末に現れ,文頭と文中では「だ」は省略できないことが多い。一方,「です」への置き換えについては,その表現が対者的なものか独話的なものかが関係してくる。

3.1 文末

文末での「だ」の現れ方は,そもそも名詞の後ろに「だ」が現れるか否か,また,現れる場合,どのような結びつきの形で現れるかによって,大きく次のように分けられる。

1）何もつかない場合	例	これは辞書。
2）「だ」のみの場合		これは辞書だ。
3-1）「だ」に終助詞が付加する場合		これは辞書だね。
3-2）「だ」が付加せず,終助詞だけの場合		これは辞書（さ／よ）。
4）その他：「だ」を含む助動詞		これは辞書なんだ。

以下,それぞれの場合について見ていく。

1）何もつかない場合

「だ」は,名詞述語の働きを持つものだが,動詞・形容詞の場合とは異なり,述語の「だ」がなくても表現が理解されることも多い。「これ,辞書」だけでも十分理解可能な場合もあるし,日本語では「XはY」と,「は」を用いることで,XとYが関係づけられる。その意味で,文末の「だ」は必須要素ではない。すなわち,叙述に必須の要素とは言えない。「去年の運動会は雨だった。」と過去の場合にはじめて述語を必要とする。このよ

うに考えると,文末の「だ」は多かれ少なかれモダリティ性を持ち,ムードに関わると考えられる。

劉（2012）は,一語名詞文の可否について次のような例をあげている。

(3)（手近にあった粉末を砂糖だと思ってコーヒーに入れたら,すごくしょっぱくなった）「わー,塩だ！」（同 95）

そして,「わー,塩！」と,「だ」を伴わない文は不自然だと判断している。「だ」を伴わない発話は,話し手の判断が示されず,存在そのものを語る表現になってしまうというのがその理由だが,筆者には「わー,塩！」という発話も可能なように思われる。ただし,その場合は,塩が「しお」と一音一音にアクセントが置かれて発話されると考える。近年会話資料が容易に入手できるようになったが,音声が伴っていないため,こうしたモダリティに関わる分析はこれからの部分が大きい。

2)「だ」のみの場合

では,「だ」が文末にある時,どのようなモダリティ性を持つのだろうか。それを考える時に　ア）「です」への言い換えが可能か,イ）男女共通に使えるか,の二点が問題になる。このうち,イ）の男女共通に使えるか,という判断基準は,一見曖昧なようにも思われる。女性でも男性と同じような物言いをすることは可能である。しかし,その場合は,きつい物言いをすることで,ある効果を意図しているわけで,女性が普通に使う表現とは区別されるものと考える。

「だ」で言い終わる場合,男女が共通に用いる「だ」と,男性だけが使う「だ」の二通りある。それぞれの用例には様々なものがあり,重なり合うものも多い。分類はむずかしいが,以下のような使い方があげられる。例文の前のＭは男性の発話,Ｆは女性の発話であることを示す。

男女共通に用いる「だ」

男女共通に用いる「だ」は,いずれも「です」に置き換えられない。これは,他者目当てでない,自分に向けた発話のためである。

ア）感情の吐露

(4) M「もう,だめだ・・・」（ひき逃げ）
(5) F 伸子は天を仰いで,「もうだめだ」と呟いた。（女社長）
(6) F「あっ,男子が騎馬戦の練習してる」F「ほんとだ」（ちびまるこ）
(7) M「物好きな奴ばっかりだ！」と,呟いた。（オペラ）

(4)（5）と,同じ発話が男性にも女性にも使われている。

イ）不満・非難

(8) M「ざまあみろ,だ」
(9) F「へん,だ」（オペラ）

他者への非難を確認的に述べた表現と言える。「だ」の前に間があることで,その前の非難表現が客体化される。

ウ）発見

(10) F「あ,お茶屋さんだ！」（朝日）
(11) M「おっ,旅籠だ。今日はここに泊まろう」（朝日）
(12) M「何だよ　見せろよ。」M「ゲッ,トカゲだ！」（ひき逃げ）
(13) M「あった！これだ！」（金田一）

具象名詞に続く。

エ）思い当たり

(14) 「そうか,『絵』だ･･・」そうつぶやいて,ハジメは,椅子から跳ね上がった。（金田一）
(15) F「あ,そうだ,ねえ,研究室行った？」（シコ）

現在の思考内容と記憶にあるものとが一致した時の表現。以上の4種類の「だ」の用法の中で,この「思い当たり」の用法だけが「だ」を省略しにくい。

男性だけが使う「だ」
以上が男女共通に用いる「だ」の用法だが,以下の「だ」は,男性だけが用いる表現である。いずれも他者目当ての発話である。

オ）主張,強調

(16) F「私,中年の人って好みなの。ねえ,栗山さん」M「栗原だ」（オペラ）
(17) F「お父さん,そんな身内の恥を」M「いやええんだ。これが供養だ」（ひき逃げ）
(18) F「捜してあげるわ。どんな人？」M「若い女性だ」（オペラ）
(19) M「うそだ！」尾島がまたどなった。（女社長）

カ）宣言

(20) M「これは神聖なコンクールだ！」（オペラ）
(21) M「俺は明日からアメリカだ。二週間戻らん」（女社長）

オ）とカ）,次のキ）は,連続的である。

キ）命令
(22) M「礼だ,礼をしろ」（シコ）
(23) M「そのほかの者は,競技とおどりの練習だっ」（ちびまるこ）

「だ」に命令の意味合いが出てくるのは,「だ」の前の名詞に動作に転換できる意味が含まれている場合である。もとよりこの意味合いは,文脈によって生まれるので,上のように「する」を取る動詞でなくても,「車だ！」のように命令の意味を持ち得る。

ク）疑問

(24) M「年はいくつだ・・・38 歳です」（蛇燭）
(25) M「どういうことだ」あずさ,答えず. . .（ひき逃げ）

疑問詞が必要である。

ケ）問い返し

(26) M「都合のいいこと言うんじゃねえよ！陸の王者だから陸王だあ？絶対慶応入れだあ？」（ひき逃げ）

この発話は,かつて発話者の親が「おまえは陸の王者だから,おまえの名前は陸王だ。」と言ったのを受けて,その相手の立場に立って,発話を繰り返しているものと言える。

3) 「だ」と終助詞
「だ」に終助詞が付加する場合としない場合とがあるのは,終助詞自体の性質による。
次は,文末の「だ」に付加する語と付加しない語を分けたものだが,必ずしも終助詞に分類されないものも含めた。

前に「だ」が来ないもの　:「さ」「じやん」「か」「の」

前に「だ」が必ず来るもの：「ぜ」「ぞ」「な」「わ」「っけ」「って」「とも」「こと」「もん」「い」（疑問詞疑問文の場合）
前に「だ」がある場合とない場合があり得るもの：「よ」「ね」

「だ」と終助詞の関係について,次のことが言える。
ア）終助詞の「ぜ,ぞ」はもっぱら男性,「わ」は女性が用いる。「だな」について男性・女性とも表現が成り立つが,男性が他者に対しても使えるのに対して,女性は独話で使うのが普通である。

(27) M「小説家の松本清一だな,死んでもらうぜ」（鎌倉）
(28) F「雨だな。」

イ）前に「だ」が来ない終助詞として「さ」があるが,これは「だ」と「さ」の働きに重なり合うとことがあると考えざるを得ない。逆に,「だ」が終助詞として働いていることを示しているとも言える。「じゃん」は「ではない」が変化したものと考えられるから述語性は明らかである。「の」は,名詞性を残しているために「なの」という形でしか接続しない。しかし,「彼は出張中ですの」「あれはうそですの」という表現が女性には使われる。これは,「ので」の接続においても見られる「出張中ですので休みます」と同じく,丁寧さを求めたための用法と思われる。

ウ）「だ」がある場合とない場合とがあり得る終助詞の場合は,次に見るように「だ」のある方が男性的な表現で,女性は「だ」を省く方が自然な表現になる。

男性的：上手だね。　上手だよ。　あしたは雨だよね。
女性的：上手ね。　上手よ。　あしたは雨よね。

後に,間投助詞のところで述べるが,男性が「これはだ,・・・」と「だ」だけの表現が可能なのに対して,女性は一般に「だ」を使わず,終助詞のみを用いる。

男性：これはだ,これはだ｛な／ね｝,これは｛な／ね／よ／さ｝
女性：＊これはだ,＊これはだ（な／ね）,これは（ね／さ）

4）その他
文末に「だ」が現れる形式としては,以上のほかに,形式名詞に「だ」が接続して助動詞化したものがある。この中で「のだ」は,はかの形式名詞より意味の抽象度が高い分,使用範囲が広い。まず,それから見ていくことにする。

ア）「の（ん）だ」

「のだ」の基本的な働きは,叙述を「の」によって名詞化し,それをもう一度叙述化することだと言える。吉田滋晃（1988）は,様々な「のだ」の用法を分類している。それを先の「だ」の用法と並べて以下に示す。ただし,吉田の分類で特殊なものとされた「整調」「客体化」は除く。

表 8-1 「だ」と「のだ」の意味分類

他者目当て		独話	
「だ」	「のだ」	「だ」	「のだ」
疑問 問い返し 主張・強調 宣言 命令	教示/強調 決意 命令 告白	感情の吐露 不満・非難 発見 思い当たり	発見 再確認 確認

まず,他者目当ての用法から見ていく。吉田の分類には「疑問」「問い返し」に当たるものがない。この理由は不明だが,形が平叙文でも,語調によって命令の意味合いを持つ用法を「命令」と名付けるなら,「疑問」「問い返し」も用法のひとつと考えられる。実際,次のように「疑問」「問い返し」に当たる用法は「のだ」にもある。

(29) いつ来たんだ？
(30) ＊田中さんが来たんだ？
(31) （相手の発言に驚いて）私,結婚するんだ？

ここでも「だ」と同様,「のだ」と「か」は結びつかない。他者目当ての「告白」は,「止めないでくれ,わたしだって辛いのだ」（吉田）というものだが,こうした事情説明の要素が入る使い方は「だ」ではできない。一方,独話の場合をみてみると,直接的な感情表現である「感情の吐露」「不満・非難」は,「の」によって客観化している「のだ」では表現できない。逆に,「へー,じゃあキミはひとりっこなんだ」（吉田）という「確認」の「のだ」は「だ」では表現できない。ここに「だ」と「のだ」の違いが端的に現れていると言える。ここでは2節で述べたように,基本的に「だ」に「確認」の意味があると考える。吉田の「のだ」の用法分類にも同じ「確認」の用語があって紛らわしいが,吉田が「のだ」の中の「確認」とする用法は,「だ」と対比した時にはむしろ「再認」と呼ぶにふさわしいと思われる。たとえば,朝飛び起きて時間に遅れたのに気付いた時の発話は,まず「寝坊だ」であろう。そのあとで我に返って「寝坊したんだ」という発話が出てくると考えられる。「だ」は「確認」,「のだ」は「再認」という違いはあるが,しかし,「のだ」も「だ」も他者目当てか独話かによって使い方がはっきり分けられる点が興味深い。独話の「だ」と「のだ」が共通する点は,丁寧表現の「です」に置き換わらない点である。

(32) 独話：（はっと飛び起きて我に返り）a　「寝坊したんだ」
　　a‘*「寝坊したんです」
　　対者的：「どうしてこなかったの」　b　「寝坊したんだ」
　　b‘「寝坊したんです」

しかし,対者的な用法では,普通女性は「だ」を用いないが,「のだ」は,女性も言い切り形を用いる。これも「のだ」が持つ客観性のためと考えられる。

(33) a（宣言）M／＊F 明日から出張だ。
　　b（決意）M／F　明日から出張するんだ。

イ）「形式名詞＋だ」
「のだ」以外に「形式名詞＋だ」の例として「はずだ」「つもりだ」「せいだ」「おかげだ」「わけだ」「からだ」「ためだ」「ところだ」「ものだ」「べきだ」「そうだ」「ようだ」「みたいだ」等がある。基本的には「のだ」の場合と同様,これらの形式名詞表現が他者目当てに使われる場合,男性はそのまま用いることも可能である。女性が用いる場合には「だ」を省くか,「だ」を省いて終助詞をつけるか,もしくは「だ」にさらに終助詞をつけることが多い。

3.2 文中
文中で,「だ」が現れる場合は,大きくよっつに分けることができる。順に見ていく。

1）名詞類を受け,後ろに助詞が続くもの（並列）

(34) 変なことじゃないのかねえ,人殺しだのひもだのって・・・」（女社長）
(35) 腹が立ってたまらないのは,自分が教えた連中が東京に行き,大臣だの伯爵だのになっていることでした。（『司馬遼太郎全講演』）
(36) ・・・嘘をついたときでも,ハツキリそう白状してくれればいいの。それをあなたは最後まで,嘘だか本当だか,騙すのか騙さないのか,ハツキリしてくれないでしょう。（夢見る女）
(37) 首すじに,外国のナイフだか短剣だか知りませんが,突っ立っておりました。（『アガサ・クリスティー探偵名作集』）
(38) (略)腰に手をあてて,英語だかロシア語だか聞いたことのない歌を口ずさみながら腰をくねらせて踊った。（『さらば上海・江南の空』）

「だの」「だか」は,並列の助詞として一語化していると考えられる[(2)]。次の例のように,名詞だけでなく動詞・形容詞も受ける。

(39) 彼には考えが甘いところがあり,それは改めるべきだと思い,好きだ嫌いだの気持ちだけで今回のことを流す気にはなれません。（Yahoo!知恵袋）

(40) 始めはしっかりしなきゃ,と思ったんですが・・・いちいちあの時こうすればよかっただの何だの言われ始め,正直そのとき言えよっておもってます。（Yahoo!知恵袋）

(41) 受け入れの方がしっかりしておりませんと,入ってきたけれども学校はあるんだかないんだかわからない,一体勉学ができるのかわからないというような状態が起こらないとも限らないわけです（国会議事録）

「だの」と「だか」の違いは,「だか」に不定の「か」が含まれている点である。「だか」を受けるのは,「わかる」「知る」「忘れる」「聞く」「質問する」「調べる」等の認知に係る動詞の否定形が多い。「だか」「だの」とも例示の働きを持つが,「だか」の場合には,話し手は自身の例示について確信がなく,あいまいな例示であり,「だの」は具体的な例示と考える。

森川正博(2009)は,「僕には何が何だかわからない。」という文が成立するのに,「誰が犯人だか？」という疑問文が成立しないことについて,「繋辞「ダ」で断定した要素に,疑問を表すモーダル「カ」を付けて聞き手に問うこと自体,解釈上矛盾が生じる」（同177）と述べている。その通りの解釈だと考えるが,次なる問題は「誰が持ち主だかわからない。」は成立するのに「田中さんが持ち主だかわからない。」は成立しにくいという事実である。自然な文は「田中さんが持ち主か（どうか）わからない」であろう。この点については,「だか」は並列に使われるのが基本であるための現象と考える。言語データベース「少納言」で「だかわからない」を見てみると,全200例のうち「疑問詞」＋「だかわからない」が180例,それ以外が20例だった。20例のうち,「だか」がセットになったものが19例で,その内訳は,動詞を受けるもの9例,名詞を受けるもの9例,形容詞類を受けるもの2例だった。動詞を受けるのは次のような例である。

(42) あれじゃ,病院は病気を治しているんだか,病気をつくっているんだかわからないわ。」（『母を看取るすべての娘へ』）

(43) なんだか,夏が来たんだか,来なかったんだかわからないような今年。（『いきなりミーハー突撃隊』）

「だか」がセットにならず,単独で使われていたのは次の例である。

(44) 毎回ゲームしたり,映画見たり,Hしたり・・・。貯金もしているんだかわからないし,羽振りがいいようで微妙なところで出し渋る。（Yahoo！知恵袋）

この例も,意味から言えば並列である。また,「夏が来たんだか来なかったんだかわからない。」というのは,「夏が本当に来たんだかわからない。」に意味的に近く,疑問詞のない「だか」は,基本的に並列の用法に含めて考えることができる。こうした「だか」の組み合わせが可能になるのは,不定を表す「か」が「だ」に接続することで,「だ」が陳述性を失うためだと考えられる。ちょうど連体修飾節の用言や,間接話法の引用節が陳述性を失うのに似ている。この「だ」の有無は意味の違いをもたらす。「～か～か」ではあれかこれかという二者択一の意味しか持たないが,「～だか～だか」では,前に来る語句が文として提示されるが,先にも述べたように「か」によって不定性が示されている。

次の「だって」の「だ」も,「です」に置き換えることができず,その点でこれも一語化していると言える。

(45) あなただって雨に濡れた。
(46) 私だって写せる。

しかし,(45)の「だって」は「も」にしか置き換わらず,(46)の「だって」が「でも」にも置き換わる点で,同じ「だって」にも述語性の違いがある。「だって」はもともと「だとて」を元の形とする点で,助詞化せず,次の引用に近いものもあるということになる。

2)引用節

(47) F1「一体何だって言うの?」F2「うちからおさめたスポンジが不良品だと言うんです」(女社長)
(48) 社長がストライキの首謀者だなんてきいたことない。(女社長)
(49) 本当に一瞬見ただけだから,それをどうして尾島だと思ったのかもよく分からないの。(女社長)

ここに含まれるものとして,はかに「だとする」「だとか」「だとの」等がある。しかし,これらの「だ」は,引用句の中にあることで述語性はあるが,概念化している。野田(1989)の用語では,「虚性モダリテイ」に当たる。このため,一語化した「だって」を除けば,「だ」の省略が可能だと考えられる。モダリティ性はないので,「です」には置き換わらない。「だそうだ」も引用の働きを持つので,終止形を受ける。その点でここに含まれるものだろうが,様態の「そうだ」との使い分けから「だ」の省略はできない。

3)疑問節

文中で「だ」「か」が結びつくのは,埋め込み疑問節を作る「か」と並列の「か」のふたつの場合である。埋め込み疑問節の場合,主節との関わり方は様々だが[(3)]。いずれの場合も次の例のように疑問詞があれば「だ」はあってもなくてもいい。

(50) 持ち主が誰｛だか・か｝知らない。

しかし,疑問詞がない時は「だか」という接続は少なく,「かどうか」を使うことが多い。。

4)接続助詞が続くもの

(51) F「でも,伸子さんのご親戚だし・・・」（女社長）
(52) F「上に立つ者があまり仕事熱心だと,部下はやりにくいわ。」と純子がこぼした。
(53) M「そうだな。ーまず三千万,と言いたいところだが,一千万にまけといてやる。大サービスだぜ」
(54) F「だって,あなたのような美人ならいいんだけど,私なんてこの顔でこのスタイルよ。」（女社長）

ここに含まれるものとしては,「だし」「だと（条件）」「だが」「だから」等がある。女性は「だが」が使いにくく「だけど」を用いることが多い。この「だ」は終止形で,陳述度が高い。「だ」の省略はできず,さらに,丁寧表現の「です」に置き換えられる。
連体形を受ける「もので」「のに」が,「子供だもんで」「雨だのに」と「だ」を受けることもある。この「だ」は,いわゆる終止形ではあるが,引用の場合と同じく,概念化したものというべきだろう。

5)間投助詞

(55) M「ところがだ,あの時彼女の死体は,そのままの形で,上半身まで死後硬直しはじめていたのだよ。」（金田一）
(56) M「それにだ,今,倒産させてしまえば,夏のボーナスを支払わなくて済む。」（女社長）
(57) だいたいのお互いの立場はあんたにもわかってもらえたと思う。もう少し補足するとだな,俺たちは今ひとつのプランを持っている。つまりだな,俺たちは今のところ記号士よりは状況の詳しい情報を握って,レースの一歩先を走っている。（井島 2002：78-79）

井島正博（2002）は,こうした用法を主格のない名詞述語文として扱っている。井島「前提ハ焦点ダ」という分裂文において,前提が文脈によって回復できるなら省略することができるとしているが,これらの用法では前提を回復できない点,女性は,この形では使いにくく,終助詞を用いることが多い点から,文の中で間投詞のように使われていると考える。省略可能で,かつ,「です」にも置き換えが可能で,モダリティ性が高い。

3.3 文頭

「だ」が文頭に現れるのは,接続詞として前文を受ける場合だが,それはたとえば次のような例である。

(57) M「いいんだよ。コーヒーをくれ」F「はい。だけど,あなた会社が倒産したっていうのに,そんな呑気なことを言って･･･」(女社長)

(58) 「ごめんよ。だって,あんまりびっくりしたから･･･」(女社長)

(59) 財布を忘れた,だもんで彼に借りたんだ。

文頭に現れる「だ」を含む接続詞には次のようなものがある。

a だから,だったら,だもんで,だって
b だとすれば,だとしたら,だとすると
c だけど,だが

いずれも「だ」は述語代用の働きをしているが,a 類は「だ」の省略ができず,一語性が高く,b 類と c 類は「だ」が削除できる。しかし,条件形に接続する b 類は「だ」を「です」に言い換えることができない。c 類は,南の C 段階に入る陳述性の高い接続助詞のため,その前に来る述語も陳述性を有しているので「だ」と「です」の言い換えが可能である。「だって」については 4 章で述べた。時枝(1950)や阪倉(1974)は,接続詞自体を辞と考えているが,この「だ」を含む接続詞には,モダリティ性が感じられる。

4. 「だ」と「である」の使い分け

書き言葉では,話し言葉と違って,名詞述語を省略することはしない。それにはいくつか理由が考えられるが,何より大きい理由は,書き言葉では言語外の文脈の助けがないため,省略がさけられるからである。また,「だ」を省略すると,「だ」がないものとして文と認められてしまうという問題もある。述語がない「XはY。」文は,話し言葉では言語外文脈からその述べ立てる内容の時制等が定まる。しかし,書き言葉では,堀井令以知(1974)にあるように「動詞の法や時制の制限を受けることがなく,話し手の主観性を離れた言表」(1974:46)となり,「春は曙」「読経は夕暮れ」タイプの,「一般的性格の断言に用いられ,格言風の文体に使用される」(1974:47)ことになる。

書き言葉では「です・ます」体と「だ・である」体というスタイルの使い分けが問題になる。野田(1998)は,「です」「ます」を使わない中立調の文と「です」「ます」を使ったてい丁寧調の文がどのように混ぜて使われるかを観察し,丁寧調の文章は,丁寧形の主張文(判断・説明を表す文)や伝達文(疑問や命令を表す文)をベースに構成され,そこに中立形の心情文(話し手の心情を表す文)や従属文(ほかの文に従属している文)が混ざることを指摘し,一方,中立調の文章では,中立形の事実文(事実だけを客観的に述べる文)が

ベースで,そこに丁寧形の主張文や伝達文が混じることを指摘している。まず,「である」と「だ」の構文的な違いは次の点にある。

		である	だ
①「まい」へ接続する	:	「ではあるまい」	不可
②活用する	:	「であれ。」	
③係り助詞を間に入れる	:	「ではある」	不可
④名詞を修飾する	:	「であるとき」	不可

「だ」と「である」の使い分けは,書き言葉のジャンルによるところが大きく,専門書・論文＜一般教養書・新聞＜小説・随筆の順で「だ」の使用が多くなる。すなわち,論文等の客観性が求められる文では「である」がよく用いられ,逆に,小説のような主観的な文では「だ」が多く用いられると言えるが,ひとつの文章においても混ぜて使われる。

(60) こんなことをここに書いたのは,六法全書を使う法律家は,「誤植だから出版社の責任だ。」と言って涼しい顔をしてもいられない性質のものだということをしめしておきたいからである。
それは実際には,無理な場合も多々あるはずだと思うし,私自身にも誤植にひっかからない自信などないのだが,形式上はまさに法律家が責任を負わなければならないものであることを若い読者にも伝えようと思って言及したのである。（法）

上の例では,最後から2番目の「である」は構文的条件によって「だ」に言い換えらえないが,ほかの箇所は言い換えが可能である。岡本（1997）は,小学校の授業観察から,丁寧体と普通体のスタイルシフトのルールとして,前者の丁寧体では「公的場面」,発話相手としては「クラス全体」,「相手をソト扱い」し,後者の普通体では「非公式場面」,発話相手は「個人」の生徒,「相手をウチ扱い」する点等をあげている。また,スタイルシフトが次の活動や質問に移行する時に多く現れていることから,教室における言語行動が一方的に教師にコントロールされているのではなく,生徒と教師との相互行為であることを示している。これは,丁寧体と普通体の選択が発話者ひとりの意志だけで決められるものではなく,社会的役割やその場での役割によって選択せざるを得ないという側面があることを示していて興味深い。メイナード(2005)は,「である」が現象文,感嘆文に使えないこと,終助詞の「よ」「ね」と生起しないこと,を指摘し,「「である」文は,語り手が物語の外側に位置し,ある距離から語っている印象を与え」「「だ」文は,語り手が物語の現場にいてその場の描写をしているという印象を与える」（同156）と述べている。これらの考察は,「だ」と「である」の違いが,何をどう伝えたいかという伝達のモダリティに関わっていることを示していると考えられる。

5　まとめ

以上,話し言葉,書き言葉における「だ」の使い方をみてきた。以下にまとめると,次のようなことになる。

まず,「だ」が名詞述語としての述語性を持っているのは,「だ」の省略ができない接続詞の一部（「だから」「だったら」「だって」等）と,文中の名詞類を受け後ろに助詞が続く場合（「だの」「だか」）である。ただ,これらの「だ」は,述語性を残してはいるものの,「です」には置き換わらず,一語化している。先にあげた以外の,「だ」の省略が可能な条件形をとる接続詞（「だとすれば」「だとしたら」等）と,引用句では,「と」の持つ概念化の働きによって「だ」が概念化するので,「です」には置き換わらない。また,引用句の場合は,言い切りの場合と同様,そもそもこの述語の「だ」はなくてもいいものなので,省くことができる。ただ,書き言葉では省略しないことが多い。接続助詞が後ろに続く「だ」（「だし」「だが」等）は,叙述の陳述度が高く省略ができない。この場合の「だ」は,名詞述語としての性格が強い。文末の言い切りの「だ」は,書き言葉では省かない。しかし,話し言葉では,話し言葉の持つ現場性に支えられて,統語的には義務ではなく,命題に関わらないという点でモダリティ性が高いと言える。しかし,そのモダリティ性にはレベル差,すなわち,自分自身に向けた発話か他者に向けた発話かという違いがある。自分自身に向けて「だ」を用いる時には,感情の吐露,非難,発見,思い当たりの表明があげられるが,「だ」の他者に向けた伝達のモダリティは発動されない状態にある。言い切り形で自分自身に向けた発話は,男女ともに用いる。言い切り形で他者に向けた発話は男性だけが用いる。主張,宣言,命令,疑問,問い返しの用法が多い。男性だけという条件があるのは,「だ」の持つ強い感情表出性のためである。そこで,女性は,「だ」を省くか,「だ」に終助詞を付加するか,あるいは,「のだ」という客観性の高い形式を用いて「だ」の持つ語気の強さをやわらげるということをする(3)。

注

(1)本章の内容は,三枝（2001）の内容を発展させたものである。

(2)並列の意味を持つ「だの」が辞典類において一語とされるのに対して,「だか」は,語として取り上げられていないことが多く,扱いが異なる。

(3)埋め込み疑問節と主節の関係について論じたものに,たとえば,山口佳也 1992「文節松の「か」の用法」『日本語史の諸問題　辻村敏樹教授古希記念論文集』明治書院,藤田保幸 1977「従属句「～カ（ドウカ）」再考」『滋賀大学教育学部紀要』がある。

(4)ここでは「だ」を中心に見てきたが,女性の場合は,連体形「な」を名詞に接続して「一人なの。」のような表現を取ることもある。

第5部　品詞の間の連続性

第9章　品詞のさまざまなふるまい

1. 品詞の転成

山田孝雄（1922）は,品詞を「語の性質の研究に於いて便宜上種々の単語について分類の標準として立てた範疇」と規定し,奥田（1985）は,「単語が語彙的であると同時に,文法的であることは,すべての単語が品詞に帰属するというじじつになってあらわれる。単語は構文論的にも形態論的にもかたちづけられているわけであるから,構文論的な機能の体系でもあるし,形態論的な変化の体系でもある。品詞はこういうものとして,つまり構文論的な機能と形態論的な変化とを基準にして分類する単語のグループである。したがって,品詞は文法的なものである。」（同27）と述べている。石井正彦（2002）は,「単語の文法的な性質は,個々の単語ごとに異なるわけではなく,「品詞」という単語の種類ごとに違っている。すなわち,品詞とは文法的な性質を同じくする単語の種類である。」（同28）と述べている。大方の一致するところとして,品詞とは,単語をその性質によって分類したものと考えられる。すなわち,文中での機能は,その語の品詞分けに反映されていることになる。しかし,時に同じ品詞であっても異なる文法的性格を示すことがある。たとえば,「見る」は動詞だが,「見ての楽しみ」と連体用法の場合は,名詞的な役割を果たしていると言える。「始める」も動詞だが,「はじめてみました」なら,副詞的役割を果たしていると言える。一方,「かなり飲んだ」の「かなり」は副詞だが,「かなりの人」「かなりな人」という用法もある。ひとつの語がひとつの品詞に分けられても,そこから飛び出して別の品詞的働きをすることがあるということである。こうした現象は品詞の転成と呼ばれている。すなわち,ある品詞の語がそのままの形,あるいは一部変化してほかの品詞の働きをすることを意味する。品詞の転成は,品詞が語の内部だけの問題ではないのと同じく,統語的に決まる面も大きい。影山太郎（1993）は,「飛び上がる」「押し開く」「泣き叫ぶ」といった一連の複合動詞が,「払い終える」「しゃべり続ける」「食べすぎる」といった複合動詞と語形成の面から異なるものであることを統語的な現象から説明している。中野はるみ（2005）は,「たのしさ」と「たのしみ」の用法をくらべ,「たのしみ」は転成元の動詞とあまり違いがないことを指摘した上で,「転成名詞の文中での意味は,辞書的な意味だけではなく構文中で転成名詞がどのような単語とむすびついているのか,どのような連語としてはたらいているのかということをみるとき新たな意味が理解されてくる」（同79）と述べている。本章では,同じ名詞,形容詞,動詞とされるそれぞれの品詞の語が,その意味素性と構文によって異なるふるまいを見せるそのありようとその条件をみてみる。5章では特定の語を取り上げてその品詞を超えるふるまいを見たが,この章では,特定の品詞に属する語群がほかの品詞に転成する様子を概観したい。

2　名詞の形容詞的ふるまい[1]

まず,名詞の基本的な定義として,名詞は活用しない品詞 と考える。後に格助詞をとることが多いが,常にそうとは限らない。たとえば,以下の下線の語を名詞と考える。

(1)彼は病気だ。
(2)三時になった。
(3)本当に申し訳ない。
(4)記入は,あとでもいい。

品詞の転成がなぜ起こるかといえば,すべての同一品詞群の語が同じような転成をしないことから,語が持つもともとの意味素性に転成し得る性格を持っているのだと考えることができる。名詞は,名詞の持つ意味素性によって,①名詞的性格を持つ名詞,②形容詞的性格を持つ名詞,③動詞的性格を持つ名詞,④副詞的性格を持つ名詞に下位分類できる。

①の名詞的性格を持つ名詞は,後ろに格助詞を取り,しかも,ほかの形容詞的,動詞的,副詞的性格を示さないもので,「学校,山,問題」等のいわゆる普通名詞がこの典型になる。寺村（1968）があげている名詞の下位分類のうち,実質性,コト性,モノ性,トコロ性,有情,無情,相対性という分類は,この名詞の下位分類に当たると考える。また,非自立語の「の」「はず」もここに入れる。

②の形容詞的性格を持つ名詞は,意味的に性状を表すもので,「真実,本当,無名,嘘」等をここに入れる。

③の動詞的性格を持つ名詞は,「スル」をつけて動詞となるもので,「運動,研究」等,サ変動詞の語幹とよばれるものをここに入れる。影山（1993）は,このほかに「立ち読み」「夜遊び」「テスト」等も含めて動名詞と名付けている。なお,サ変動詞の語幹とよばれるものについて,以前の辞書は名詞とのみ記載して[2],動詞的性格についての情報,すなわち自動詞か他動詞かの情報が記載されていなかった。そうした情報は,次のような用法が誤用か否かを判断するためにも必要である。

外務省は平和解決を絶望することは・・・（テレビニュース）
脳卒中マヒが改善する。（広告）
残業作業時間を優先するスケジュール方法（office　com）

④の副詞的性格を持つ名詞は,連用修飾の用法を持つもので,「冬,一月,一か月間,今日,ひとつ,実際」等をここに入れる。

文の中での名詞の役割は,それぞれの名詞の意味によってのみ決まるのではなく,構文的に担うものと言える。「問題が問題だ」や「戦争は戦争だ」等,同じ名詞が繰り返される文が意味を持つということは,まさに,名詞の意味とは独立に構文が名詞に意味をもたらし

ているということにほかならない。たとえば,「戦争は戦争だ」の場合,はじめの「戦争」は現に存在する戦争,あるいはいま問題にしている戦争であり,後ろの「戦争だ」は,「戦争」という概念の持つ属性を示している。次に,同語反復ではない通常の名詞述語文の場合を考えてみたい。

三上（1953）は,名詞文を形容詞文と準詞文（ここでいう名詞述語文）に分け,準詞文に三通りの用法を区別する。

措定,無格,第一準詞文
　いなごは害虫だ
　東京は日本の首都である
　私は幹事です
指定,有格,第二準詞文
　幹事は私です。
　昨日到着したのは篇理だ
　昨夜吠えたのはこの犬だ。
端折り,第三準詞文
　姉さんはどこだ？
　姉さんは台所です
　僕は紅茶だ

西山佑司（2003）は,三上の論をかみ砕いて,措定文「A は B だ」について「A は指示的名詞句であるのにたいして,B は属性を表し,非指示的名詞句であ」り,「倒置指定文「A は B だ」は意味を変えずに「B が A だ」によって言い換えることができる」（同 352）と説明している。つまり,措定文の述部に来る名詞は,形容詞的なふるまいをしていると言える。工藤真由美（2002）は,措定文という概念には触れていないが,構文的機能が構文的意味に働きかける場合のひとつとして,「名詞が＜述語＞として機能する場合には,意味的に＜実体性＞を失って,＜恒常的特性＞さらには＜一時的状態＞を表すようになることが起こる」（同 115）ことを述べている。工藤のあげている例は,次のようなものである。

＜恒常的特性＞うちの母はすごく子供だ。（＊すごい子供だ）
＜恒常的特性＞山田さんてとても紳士ね。
＜一時的状態＞あの人,昨夜はとても紳士だったわ。
＜一時的状態＞昨日のクラス会では太郎は大人だった。（工藤 2002：116）

同様の例として,以下のようなものがある。

(5) ゴミが山だ。
(6) 彼女は今が花だ。
(7) 彼はやくざだ。

「彼はやくざだ。」は, 言語外の文脈によって, 彼の職業を意味することも, また, 彼の性格を意味することもある。三上（1968）は, 名詞には, 名詞（類概念）＝連体修飾語（種の特性）＋名詞（類概念）という組成があると述べているが, 後者の解釈は,「やくざ」という語の持つ意味の中で, 特にその性格の面（種の特性）を取り立てていると言える。また, 名詞が形容詞的役割を持つことは, 以下の例のように本来名詞的特性を持つ名詞に助動詞「だ」が下接して「な」を取りうるということにもうかがわれる。

(8) これこそが映画だ。
　　これこそが映画なのだ。

一方, 名詞述語文において, 名詞が形容詞的ふるまいをしないのは, 指定文の場合である。西山（2003）は「倒置指定文は, それをさがし当てて「ああ分かった, これだ」と答えることによって, その関心を満たしている」（同 353）と述べている。指定文の述部の名詞は代名詞であることが多く, これは形容詞的ふるまいをしない名詞と言える。

先に動詞的性格を示す名詞を見たが, それらの「スル」を取る名詞が次のように言い切りの形で文末におかれた場合は, 動詞的ふるまいをしていると言える。

(9) ××議員が出馬を表明。
(10) 日経ヴェリタス　電子書籍の発売日時を繰り上げ（広告）
(11) 明後日に受取り

3　名詞の副詞的ふるまい [3]

副詞的性格を持つ名詞として「冬, 一月, 一か月間, 今日, ひとつ, 実際」をあげたが, このほかにも名詞がそのまま, あるいは「に」や「と」を伴うなりして副詞として働くことは多い。「勢い」「事実」といった名詞も, 次のように副詞的に使われる。

(12) 相手あっての仕事だから, 相手の都合にあわせてどうしても滋子の仕事時間は不規則になり, 勢い, それは生活の不規則さにもはねかえる。（『模倣犯』）

(13) つまり若い人の心筋梗塞が頻繁におこる地域は食生活に問題があることが多く, 事実, 私たちの調査でもそのような地域ではまず長寿はありえませんでした。（『カスピ海ヨーグルトの真実』）

(14) 近藤守は何度も聞いた小噺を聞くかのように, うんざり気味だった。実際, 彼はその報告を何度も聞いているはずだった。（ゴールデン）

なお, 市川孝（1965）で「実際」「事実」が, 西尾寅弥（1984）で「結果」がこうした語の例としてあげられており, また『現代副詞用法辞典』（1994）には「結果」以外の 3 語がすでに取り上げられているが, ここではもう少し細かく用法を観察してみたい。

3.1　副詞の中での位置づけ

まず, ここで扱おうとしている「勢い」「事実」類は, 従来の副詞の扱いにおいてどこに位置づけられるだろうか。副詞の分類は山田（1908）に始まるとされるが, 山田の情態, 程度, 陳述の 3 分類のうち陳述副詞については, 後に渡辺（1971）が次のような点をあげて誘導副詞と呼び換えている。

①命題内の副詞は, 叙述の知的内容量を豊富にするものだが, それゆえ, 次の例に見るように, 修飾の範囲に制限がある。

〇ゆっくり読む　　×ゆっくり美しい

〇非常に美しい　　×非常に生きる

② ①に対して, いわゆる陳述副詞は, 修飾の対象をえらばず, 「修飾対象は文字通り無制限である」。そして, 叙述の知的内容量に関しては, 全く増減の影響を及ぼすことがない。

③ ②のことは, 次のような陳述副詞が陳述の方法を修飾しているためである。

決して美しくない：否定　　もし桜なら：仮定

そして, 先行して, 否定, 仮定の予告をする働きがあるから, これらの語は「表現の本体は後続する部分にあり, その後続する本体を予告しそれを誘導する」機能が重要である。（同 302-312 から）

こうして渡辺は, いわゆる陳述副詞を「誘導副詞」と呼びかえ, さらに, この働きは, 従来副詞と考えられてきたものの中に, かなり幅広く認められるとして, 「決して」「もし」のような呼応表現だけでなく, ひとつの注釈内容を意義として担い, それを表示しつつ, 後続する注釈対象を誘導する語も誘導副詞に含めた。そこに挙げられている語は, 「もちろん」

「無論」「事実」「実際」「幸い」「あいにく」で,ここには冒頭にあげた「事実」「実際」が含まれている。すなわち,渡辺は,「事実」「実際」を後続する注釈対象を誘導する語として誘導副詞の中に位置付けている。たしかに,従来の陳述副詞も,叙述の内容自体に関与しない点では,「事実」「実際」等と働き方は共通するが,呼応する部分の有る無しに関しては明らかに違いがある。竹内美智子（1973）は,「注釈誘導の副詞は,陳述副詞のように,陳述内容と呼応するものではなく,陳述によってととのえられた句（山田博士のいわれる意味での）に対して,それを注釈する関係で対応しているのである。陳述副詞のはたらきが,句の中でのはたらきと認めうるのに対して,注釈誘導の副詞のはたらきは,句の外から句へ向けられるものと考えるのが妥当ではあるまいか。」（同 140）と述べ,両者を分けている。

益岡・田窪（1992）は,「陳述の副詞」を「文末の「ムード」の表現と呼応する副詞」に限定し,たとえば,疑問と呼応するもの（「いったい,はたして」）,否定と呼応するもの（「決して,必ずしも」）,依頼・命令,願望と呼応するもの（「ぜひ,なんとか」）のように分けている。そして「陳述副詞」とは別に,「評価の副詞」「発現の副詞」をたて,前者は「当該の事柄に対する評価を表す副詞」,後者は「当該の発言をどのような態度で行うかを表す副詞」とした。それぞれ次のような語を例としてあげている。ここでは「実際」は「発言の副詞」に入っている。

「評価の副詞」あいにく,さいわい,当然,もちろん,むろん,偶然,たまには

「発言の副詞」実は,実際（は）,言わば,例えば,要は,概して,総じて

これに近い名付けが,中右（1980）によるもので,中右は,副詞を命題の一部を形造る「命題内副詞」と　命題に対するモダリティを表明する「命題外副詞」に大きく分け,このうちの命題外副詞に「発話行為の副詞」をたてる。そして,「発話行為の副詞」は,モダリティの副詞に入るが,「他のモダリティの副詞から区別される明確な点は,それが命題内容そのものにかかわるというよりは,むしろ,命題内容の提示の仕方にかかわるということである。つまり,命題内容をどのように述べるか,話者自らの発話の仕方に制限を加えるという働きをもっている。」（1980：206）としている。これは,冒頭の(1)～(3)の「勢い,事実,実際」の働きにもあてはまるものだが,中右は文副詞を扱っているので,発話行為の副詞として挙げられている語例は,「ついでながら,ちなみに,要するに,たとえば,率直に言って,本当のところ,つまりは,ものは相談だが」といった句相当のものである。

水谷・星野（1994）は,名詞から副詞にわたる語類約 1 万の実例について,語類の分類枠の設定と個々の語をどう割り付けるかを考察した。「実際」「勢い」「結果」は,水谷・星野の分類によれば「名詞中核　副詞法あり」に含まれる。この 3 語に共通する特徴は,「格要素に立ち得る」こと,「独立用法で（つまり「これ以上」「三日間」のやうな複合

でなく）情況化の助詞に助けられず副詞法を有する」ことにある。なお,「事実」は検討対象の語に入っていない。

以上,従来の分類では,ここで扱おうとしている語は,誘導副詞の一部（渡辺）,注釈誘導の副詞（竹内）,発言の副詞（益岡・田窪）等として扱われていることがわかる。また,水谷・星野による分類では,名詞用法があり,かつ副詞の独立用法を持つことがその特徴としてあげられている。

3.2　独立副詞用法の性格

名詞であり,かつ語形が変化せず独立した副詞として働く副詞は次のようにいろいろある。

「一面」「反面」「一方」等：後続文と前文の関係が対立関係にあることを示す標識で,論理性が強い点で接続詞に近い。

「以上」「以来」「以後」等：前文全体,あるいは,前文の時をとりあげる。前文がこれらの語の構成要素に含まれている点で,もはや接続詞と言ったほうがいい。

「将来」「今日」「現在」「当初」「時々」等：時を表す。

「単身」「一見」「直接」：さまを表す。

ここで取り上げる「実際,事実,勢い,結果」に共通する特徴としては,以下の4点があげられる。

①これらの語は,名詞である。。

(15)理論と実際を学ぶ

(16)事実がわかったら知らせてください。

(17)なぜ青信号は,実際は緑なんでしょうか。

(16)の「実際は」は,益岡・田窪（1992）では副詞として扱われている。しかし,名詞を主題化したこの句全体は,いまだ副詞にはなっていないように思われる。

②これらの語は,述語を修飾して述語の情報量を増やすということはなく,後続文全体,そのあり方に係る。そのため,「事実」では,これを底とする名詞述語文が作れる。

(18)事実,来た人はだれもいなかった。→　来た人が誰もいなかったのは事実だ。

③発話される時,語の後にポーズが置かれる。また,語尾のイントネーションが若干上昇する。平板型の単語ではその点は顕著に表れないが,起伏型のアクセントを持つ「勢い」の場合には,この用法では平板型になる。

(19)（名詞）いきおいがいい。
(20)（副詞）いきおい,みんなが賛成することになった。

④時や様態等の他の副詞にくらべて前文の必要度が高い。また,後続文全体に係るため,いわゆる陳述副詞のように特定の述語と呼応することはない。西尾（1984）は,「結果」と並んで「概略」をあげているが,前文の必要度が低いと考え,ここでは取り上げない。

ここで取り上げている語の前文の取り込み方は語によって異なる。
①「実際」「事実」は,前文の一側面を後続文で示す。
「X 実際,Y」では,X の,もしくは X に関連する具体例が Y に来る。Y が疑問文でもいい。ひとつの具体例,根拠をあげるという点で,次の例にみるように「本当に」に近い意味も持つ。

(21)「テレビ観ないんですか」
「飽きた」
「まだこれからじゃないですか」
<u>実際</u>,田中徹はまだまだこれからだと思っていた。（ゴールデン）

「X 事実,Y」は,X の証拠を Y にあげるという標識で,「その証拠に」といった意味に近い。多くの場合「事実」と「実際」は置きかえが可能だが,Y は事実であることが必要で,仮定の話や意志,疑問の文は来にくい。『現代副詞用法辞典』（1994）は,「事実」と「実際」の意味の違いについて,「「じじつ」が話者の冷静な確信を暗示するのに対して,「じっさい」は現実に照らした話者の納得を暗示する」（同 181）と記述しているが,こうした用法の違いと対応していると思われる。以下の用例で下線は原文のものを示す（以下,同様）。

(22)「そば博覧会」という全国規模のイベントを開催するには,いささか小規模な集落である。｛<u>事実</u>・実際｝,人口 4000 人の過疎地帯である。（『そば往生』）

(23)・・・たちまちマラリアの患者数は増加することが考えられる。｛事実・実際｝，そのようなことは各地で観察されている。（国会会議録）

(24) 死ぬときは一緒に死のうネ」というのが妻の口癖であった。｛実際・＊事実｝，自分としても病弱の妻を残しては死ねない。（『癌は，神様から届いたプレゼントだった』）

(25)ところで｛実際・＊事実｝，麻雀には運不運以外に，明らかな実力というようなものってありますか。（Yahoo!知恵袋）

なお，「実際」には，独立用法と「実際に」と「に」が付く場合がある。以下の例では，どちらも可能である。

(26)あんたは犯人じゃねえと俺は思っているし，｛実際，・実際に｝そうなんだろうよ。（ゴールデン）

(27)昔に戻ろう，とポール・マッカートニーが｛実際，・実際に｝願っていたのかどうかは分からないが，青柳雅春はまさにそんな思いで，「あの時に戻らないといけない。あの時の仲間を助けなければならない」という一心で，歩みを進めていた。（ゴールデン）

(28)僕みたいなおじさん世代も一応，英語に接しておいた方がよいと思ったのだが，｛実際，・実際に｝勉強してみると結構大変だ。（日経 2013.2.18）

しかし，以下の(36)～(38)の例のように，直後の述部が連体修飾節におさまり，係りが直後の述部に限定される場合には，「実際に」のほうが自然である。

(29) 片桐さん，｛＊実際，・実際に｝闘う役はぼくが引き受けます。（『神の子どもたちはみな踊る』）

(30)ホームヘルパーと言う仕事に興味があります。｛？実際，・実際に｝働いている人からの意見や給与，時間などの待遇などが知りたいです。（Yahoo！知恵袋）

(31)株を｛？実際・実際に｝買ってみよう。

②「勢い，結果」は，前文のことがらの経緯，内容を受ける。

「X 勢い，Y」は，X の推移の仕方に注目し，それを Y でとりあげる標識となっている。「X の流れで」といった意味になる。

(32) 当然,私と部下は私という強烈な個性を持つ「家長」に率いられた擬制家族になる。勢い,仕事も遊びも一緒だ。(『ガサ!』)

(33)女は廊下の突きあたりにある戸棚から,寝具と蚊帳を運んで来た。勝次は,勢い,女が床をのべるのを見守る格好になった。(『紀州ミステリー傑作選』)

(34)この際とばかり,いかなる余りものも見逃すものかと興奮していた。勢い,ナイフを持つ家長の近くへ近寄りすぎたりする。(『ムツゴロウの動物交換術』)

「X結果,Y」は,後続文にXの結果が来るわけで,もし「その結果」とすれば,接続詞の働きであり,述語を取り込んで「する結果」「した結果」と従属節を作ることも可能である。また,「結果」の後続文は,文字通り前文の結果になるので,次の(23)～(26)の例のように「結果は」と主題化することが可能な場合も多い。

(35) 民主党は左派の活動家の面々,共和党は右派のティーパーティの人たちの顔色をうかがうばかりだ。結果,一方は「増税反対」を掲げ,他方は「財源確保」を叫び,予算一つすらまとめられない状態が長く続いた。(日経2013.3.11)

(36) こんな状態の毎日でした。入社したばかりの頃は夢も希望もありましたが,しばらくしたら,うつ病の薬が増えるコトになってしまいました。結果,本日退社。これから,またしばらくの間,自分自身を見つめ直そうと思います。(Yahoo!ブログ)

(37) この日もいっさい釣り糸は垂れず,ウグイ集めだけに従事した。結果,クーラー・ボックスはあっという間に満杯に。(Yahoo!ブログ)

(38)したがって,当地の人々はいきおい屋内で過ごす時間が多くなる。結果,家庭内で可能な外部とのコミュニケーション,すなわち通信に対するニーズが高くなる。(『腕木通信』)

ただし,次の例のように,「結果」の前文と後続文が因果関係にない時には,「結果」は主題化しにくい。

(39)都内のラジオ局の送信アンテナは,東京都内か千葉県にあります。充分受信範囲ないです。{結果,・＊結果は}病室の壁がラジオの電波を遮へいしていると思われます。(Yahoo!知恵袋)

(40) 市民税は時期になれば勝手に自宅に支払い用の綴りが届きます。｛結果,・＊結果は｝届く綴りは国民年金,国民健康保険,市民税の3種です。（Yahoo！知恵袋）

ここで取り上げた語は,Xの一側面を示すという点に,いまだ名詞の実質性を残しており,その接続詞性には限界がある。機能的には接続詞の性格も持つが,接続詞になりきってはおらず,いまだ名詞の性格も残している点で,名詞の副詞的,接続詞的用法と考えるのが妥当だろう。

表9-1は,「実際」「事実」「勢い」「結果」の4語と,形態的に「実際」と重なるところのある「実」について文中での用法を比べたものである。

表9-1　用法一覧

用法	実	実際	事実	勢い	結果
―の	△	○	○	○	○
―は	△	○	○	○	○
―に（副詞用法）	○	○			
―だ（名詞述語用法）		○	○	○	○
独立副詞用法		○	○	○	○

「実際」「事実」「勢い」「結果」の4語は,「の」「は」で受けることができ,また名詞述語用法がある点でその名詞性が明らかである。「実」にも名詞的用法がないわけではないが,「実のところ」のほか,「実の娘」「実の親」といった血縁関係を示す場合がほとんどで,形容詞的用法に限られている。そして,「実は」「実に」は副詞化している。すなわち,「実」には名詞の実質性が乏しく,そのことが「実」の副詞化をすすませていると考えられる。それに対して,ここで取り上げた語は,名詞性は明らかだが,副詞的ふるまいもする。名詞の言い切りによる口跡のよさ,それによる躍動感が好まれるためか,いずれも話しことばで使われることが多い。

なお,ここでみた名詞の副詞的ふるまいとは逆に,副詞の名詞的ふるまいを松下（1930）が指摘している。松下は,品詞について論じた中で,変態品詞ということを述べている。この多くは,たとえば「先生ぶる」「学生らしい」といった,動詞でありながらその内部にほかの品詞を含むといったものを指すのだが,この変態品詞の中に,副詞性名詞をあげている。これは,「どうせ行くならすぐがいい。」「それはまだがよかろう。」といった副詞を指す。

4　動詞の名詞的ふるまい [3]

名詞は格助詞を後ろに取ることが多い。しかし, 次のように動詞も格助詞を取ることがある。次は, 言い切り形の例である。

(41) 負けるが勝ち。
(42) 足るを知る。
(43) 見ると聞くとは大違い。
(44) そんなばかなことを言うがいい。
(45) 行くに違いない。
(46) 泣くに泣けない。

次は, 連用形の中止形とテ形の例である。

(47) お読みになる。
(48) 買い物をしに行く。
(49) 待ちに待った運動会
(50) 笑いに笑った。。
(51) 見ての通り
(52) 傘をさしての帰り

格助詞というのは, 対象と対象の関係を示すのが役目だから, 名詞に付くのが一般的と言える。そこで, 上の例のように, 動詞に格助詞が付いた場合には, その動詞を名詞と考えるのか, あくまで動詞と考えるのか, その根拠は何かといったことが問題になる。ある語が動詞か名詞かを考えるにあたって, まず名詞とは何か, 動詞とは何かが問題になる。動詞には活用があり, 名詞にはないということが言われるが, 川端（1978）のように名詞に活用を認める人もいる。ここでは, 基本的に名詞は「体」を示し, 動詞は「用」を示すと考える。この「体」が意味することは, 活用の有無はひとまず問わず, 語の意味が固定したものと定める。「体」には, 「机」「ごはん」といった具体的なものだけではなく, 「愛憎」とか「勉強」「丁寧」といったことがらや様も, 抽象化され静止的なものとして概念化しているという点で, 名詞に含まれるのは明らかである。その意味では, その具体的なものや抽象的なことがらが概念化された「モノ」や「コト」は, より名詞性が強いと言ってもいいかもしれない。他方, 「用」は, 叙述的で現実の現われを表す。

動詞それぞれの語が持つ「名詞性」「動詞性」によって, 動詞の名詞化する度合いも一様ではない。サ変動詞の語幹は, 語としては名詞だが, 動詞的性格を持っている。「机

する」と言えないのは,「机」にその動詞性がないためである。動詞の連用形である中止形には,「遊び」「泳ぎ」といった名詞化したものがある。これがなぜ名詞と言えるかといえば,動詞の言い切りの形「遊ぶ」「泳ぐ」は,単独では「体」としての固定した実体を持たず,あくまで「動き」の本質を失っていない。それに対して,連用形は抽象的なことがらを内容とする固定した存在と考えられる。動詞の連用形にも,一方で,語のレベルでは完全に名詞になりきっていないものもあるようだ。たとえば,「食べ」「飲み」という名詞はない。その場合でも,複合名詞になれば語全体で名詞になるし,また,次のように構文によって名詞として働く場合もある。

(53) 食べ歩き
(54) 飲み食い
(55) ミルクの飲みがいい。
(56) 減りが早い。
(57) 動きが鈍い。
(58) 流れが速い。

サ変動詞の語幹それ自体も名詞として安定しているとは言えない。たとえば,「電話」はモノとしての意味もあるが,「電話頼む」という場合は,機器の電話を意味しない。これは,構文によって決まる面もあるが,むしろ「でんわ」という語が持つもともとの性格によるのではないだろうか。普通我々が「でんわ」という語の意味を思い描く時,電話の機器しか思い浮かばないということも,電話するという動作しか思い浮かばないということもなく,両者渾然一体としているというのが正確なところだろう。

サ変動詞の語幹と動詞の連用形は名詞になりきっていて,名詞の中で動詞的性格をもつものと考えた時,話し手は意識の中で,こうした名詞とそれと等価の意味を持つ動詞とをどう使い分けているのかということが問題になる。公園のブランコのそばで一人の子どもが友達にブランコに乗ることを誘う時,次のような言い方のどちらも可能である。

(59) 二人乗りしようよ。
(60) 二人で乗ろうよ。

「春風」と「春に吹く風」は意味が似てはいるが,「春風」は特定の風に対する呼び名であって,名付け機能を持っている。「二人乗り」も名詞として実体を持っているから,「二人乗りしようよ」と言った時,「二人乗り」は,二人にとって,少なくとも話し手にとって

既知のことがらである。「二人で乗ろうよ」にはそうした意味合いはない。「デモる」「ミスる」「タクる」「パニクる」「ググる」といった名詞それ自体を活用させたような表現があるが,これは,「デモをする」「タクシーに乗る」という場合の行為としての実体を捨てて,そこで行われる動作だけを取り出そうとしている表現と見ることができる。

以上,動詞の名詞的ふるまいを見てきたが,動詞が副詞的にふるまうことも多い。西尾（1984）が動詞から副詞への転成としてあげている例は「あまり」「つまり」「はじめ」と,動詞性が感じられないほど副詞化しているが,他にも「あいついで」「あらためて」「いたって」「思い切って」「思わず」「重ねて」「きまって」「進んで」「はじめて」「残らず」「ふるって」等をあげることができる。

5　形容詞の名詞的ふるまい(4)

形容詞の連用形にも次のように名詞として使われるものがある。

(61) 遠くがいい。
(62) 近くにある。
(63) 多くを語らない。
(64) 朝早くから夜遅くまで仕事に励む。
(65) その点は古くから指摘されている。

この場合,形容詞の連用形が名詞化していると言えるのは,格助詞を伴えること,連体修飾を受けること,一定のアクセントの変化があることになる。ただし,アクセントの変化は,動詞の場合のように顕著ではなく,次のように平板型の形容詞だけに見られる。

形容詞の言い切り形	名詞化したもの	連用形
とおい	とおくから	とおくて
おそい	おそくから	おそくて

一般に,「大きい」「重い」等の形容詞は,ほかとは違うそのもののありさまを述べたてている。一方,「遠い」「近い」等はそのものと他のものとの関係を表している。三上（1955）は,こうした形容詞は,修飾の内容が品質的ではなく外延的なため,連体になる場合「遠くの」「近くの」「多くの」という形をとると述べている。名詞化する「早い」「遅い」「古い」には,スピードや新旧という「さま」の意味はなく,「とき」の意味に限定されている。

(66) ラッシュの混雑が朝早くから遅くまで続いた。
(67) しけが続くが, 遅くにはおさまる。
(68) 死刑廃止論は古くからある。
(69) お茶は古くは別室で供したが, 現今は食事のあとすぐお茶を出すこと
が多くなった。

次に,「遠く」「近く」「多く」の用法についてもう少し詳しく見てみよう。
「遠い」「近い」を述語として用いるときには,「海は遠い」「冬が近い」と, 物理的時間的な距離を示すが, 限定用法になると (78) のように修飾句で比較の基準が示されない限り, (77) のように物理的距離は表しにくくなる。

(75) 遠い親戚 (関係が遠い)	近い親戚 (関係が近い)
(76) 遠い将来 (時間的に遠い)	近い将来 (時間的に近い)
(77) ?遠いスーパー	*近いスーパー
(78) 駅から遠いスーパー	駅に近いスーパー

ただ, 名詞が「国」の場合は,「遠い国」「近い国」が物理的な距離も表す。これは,「国」という語の意味が必ずしも「モノ」に限定されず幅のあることと関係があるように思われる。もちろん「近くて遠い国」の場合は, 物理的な距離を意味しない。明確に実体のある距離の遠近を言うならば,「遠くの」「近くの」が用いられる。

遠くの親戚 (距離的に遠い)	近くの他人 (距離的に近い)
遠くのスーパー	近くのスーパー

「遠く」が「遠いところ」と違う点は,「遠いところ」には「ところ」という場所が言明されている点だろう。

(79) 遠くに　　多摩の山並みが見える。
?遠いところに
(80) お近くに　　お出かけの節はお立ち寄りください。
?お近いところに

また,「遠い」「近い」に次のような副詞的用法がある点は, ほかの形容詞と変わらない。

(81) 鈴木さんは, 近く, これまでの歩みを本にまとめる。
(82) 遠く, ギリシャ, ローマの昔にもこういったことはあった。

「多い」は,「遠い」「近い」と同様外延的意味を持つ形容詞で, そのもののありさまではなく, 量について述べている。中川正之（1975）は, 朱（1956）を引用して「およそ属性を表示せず, 単純に数量を表示する形容詞―“多”と“少”－は直接名詞を修飾できない。」（同 37）と述べている。ふつう「多い図書館」と限定的には使えない。しかし,「白髪が多い頭」（同 31）「その辺で一番多い事故は・・・」のように, 何が多いのか, どのように多いのかが示されると, 修飾部全体で名詞を修飾することができる。「数多い」は, 次の例のように直接名詞を修飾できる。これは,「数が多い」と同義とみてよいからだろう。これらの連用形の「多く」「数多く」は実体を持つ。

(83) 数多い教え子の支持を取り付けようと動いている。

この例で「数多い」は「教え子」を修飾している。すなわち,「教え子は数多い」。この文を「数多くの教え子の支持を取り付けようと動いている。」とすれば,「教え子の中の多数」の意味になる。「数多くのデパート, スーパーで買い物をしましたが, ・・・」という文は,「買い物したデパート, スーパーが数多い」ということで,「デパート, スーパー」全体の数については構文的には何も述べていない。
「多い」「数多い」を限定修飾的に用いる時には,「数多い＋名詞＋の中（から・でも）」という文の形をとることが多いようだ。

(84) 展示されているのは, その数多いコレクションの中から選んだ 12 枚だ。

以上, 文法的な性質を同じくする語の種類である品詞が, その意味素性と構文によって異なるふるまいをすることを見た。コマーシャル等では, 次のような表現を目にすることがある。

(85) かわいいは作れる。
(86) タッチでキレイを逃さない。
(87) まるで梅酒なノンアルコール
(88) はたらくを楽しもう。

人が通常用いる品詞の使い方とあえて異なる使い方をしているために,こうした表現が人目を引く効果を持つと言える。

6　ふるまいの異なる同義語

6.1　イ形容詞とナ形容詞

物事の有り様を示すのに用いられる「静かな」「きれいな」「元気な」という一連の語がある。学校文法では「形容動詞」と呼ばれてきたが,この呼び方は適当ではない。古文では,「静かにあり」「堂々とあり」と,もともと動詞を伴っていたから「形容動詞」だが,現代語では,動詞性はない。この「形容動詞」については,品詞論的にどう考えるか,これまでさまざまな取扱いがなされてきた。そのひとつは,形容動詞を名詞と考える立場である。この考えが出てくるのは,名詞に「だ」が接続した場合とここで問題にしている語が,次のように同じ活用を示すからである。

学生だ　学生じゃない　学生だった　学生になる　学生<u>の</u>
静かだ　静かじゃない　静かだった　静かになる　静か<u>な</u>

時枝（1950）は,「静かな」「静かだ」「静かに」は,「静かだ」の活用ではなく,「静か」という一語に助動詞の「だ」が続き,その「だ」が,「な」「だ」「に」と活用すると考える。その根拠として,次のような理由をあげている。

①一般の意識として我々は「静か」「大胆」等を一語とみていること。
②「彼は健康を誇にしてゐる」と「彼は非常に健康だ」の「健康」を,どちらが名詞でどちらが形容動詞であるかの判断は困難で,名詞の意味論的な問題であること。
③「静かだ」を形容動詞として立てると,その敬語的表現である「静かです」も一語と見なければならなくなること。（同 1950, 1988：110-113 から）

佐久間（1940, 1983）は,連体形が性状表現の活用の基本形と考え,それによって性状語を,「第一種」（あかい,ほしい）,「第二種」（すきな,愉快な）,「第三種」（同じ）に分ける。これは,現在,日本語教育で一般的な「イ形容詞」「ナ形容詞」と,形容詞をふたつに下位分類する立場のもとと言える。寺村（1982）は,いわゆる「形容動詞」を,連体形を決め手として,統語的にも意味的にも名詞と形容詞の間にあるものと考え,「名詞的形容詞」（名容詞）というひとつの品詞を別に立てた。

従来，形容動詞と呼ばれてきた語と形容詞と名詞との間に，明確な境界線は引きにくい。名詞は，格助詞を伴う点がその大きな特徴なので，「を」や「の」を伴うか否か，また「な」や「い」を伴うか否かでテストしてみると，次のように分布は連続する。

表 9-2 「イ形容詞」と「ナ形容詞」

	「い」を伴う	「な」を伴う	「を」を伴う	「の」を伴う
赤	○	×	△（赤を塗る）	○
あたたか	○	○	×	×
静か	×	○	×	×
健康	×	○	○	○
病気	×	△（病気なわけ）	○	○
特別	×	○	×	○

このことから，いわゆる形容動詞，ナ形容詞と呼ばれるものから名詞の間は連続的で，線引きが難しいことがわかる。いわゆる形容動詞を名詞に入れれば，その中には「静か」「確か」等，格を取らないものが入ってしまう。一方，これをナ形容詞，もしくは別品詞とした場合には，「元気な人」「元気のもと」という「元気」の二通りの用法を区別しないことになる。しかし，ここでは，「イ形容詞」「ナ形容詞」という品詞分類を取る。その理由は，外来語は，「ロマンチックな」「クールな」と「ナ形」を取ることが多く，日本語においても「ロマンチック」「クール」は名詞でないことは明らかだから，これらの「ナ形」はもとから形容詞と言わざるを得ないこと，また，「大きい」「大きな」とふたつの形を持つ形容表現があることも，ふたつの形容詞の存在を示していると考えられる。適当なイ形容詞がない時，人はナ形を使って性状表現を作るのであろう。

6.2 「X の」と「X な」

ナ形容詞の中には，連体修飾する時に「の」を取るものがある。田野村（2002）は，その選択の要因について，次のような項目をあげている。

①形容動詞そのものの種類や性質によって決まる面がある。

②文脈に依存している面がある。

③時代差，文体差，個人差等の要素も係っている。（同 207-208）

このうち,②の例として,形式名詞「の」の直前では,「の」が選ばれることはなく「無名なのは」となることをあげている。桜井光昭（1964）は,このほかに修飾句を受ける場合,単独では「有名の」と言えないが「タバコ好きで有名の同氏」が可能となること,また,形式名詞に接続する場合,「しかし事件は結局曖昧のまま残された」「ところが,一般の学生は,このような運動にわりに冷淡のようだ」（同 37）と「の」も可能なことを指摘している。田野村（2002）は,「有名」「無名」といった「有」と「無」の対立を持つ語を取り上げ,先の選択要因①について,「「な」類の形容動詞は程度の大小を問題とすることのできる属性を表すのに対し,「の」類の形容動詞はそうであるかないかとしか言えない択一的な属性を表す」（同 209）と述べている。これは,「な」が付加すると形容詞的になり,「の」が付加するとその意味は固定的になると解釈できる。名詞性が明らかな名詞「味・現金・罪・やくざ」に「な」が付加して「味な,現金な,罪な,やくざな」となるとその形容詞性が明らかになるが,そうした現象とも関連があると思われる。

6.3　「X い」と「X な」[5]

本節では,ほぼ同義に使われる「イ形容詞」「ナ形容詞」,具体的には「小さい」「小さな」「大きい」「大きな」について,その選択要因,意味の違いを考えてみたい。

次の表 9-3 は「い」と「な」の両方を伴うことが可能な語の一覧と KWIC2 データにおける頻出頻度である。

表 9-3.「い形」「な形」の頻度

い形		な形		い形		な形	
浅黒い	3	浅黒な	0	手荒い	1	手荒な	1
あたたかい	53	あたたかな	3	ナウい	3	ナウな	0
甘辛い	1	甘辛な	0	幅広い	107	幅広な	0
意地悪い	1	意地悪な	2	腹黒い	1	腹黒な	0
大きい	1013	大きな	1935	ひ弱い	0	ひ弱な	2
おかしい	173	おかしな	34	間近い	9	間近な	5
おめでたい	5	おめでたな	0	真っ黒い	4	真っ黒な	8
きめ細かい	16	きめ細かな	19	真っ白い	7	真っ白な	11
細かい	135	細かな	45	まん丸い	0	まん丸な	0
四角い	14	四角な	5	柔い	0	柔な	1
小さい	530	小さな	774	柔らかい	32	柔らかな	2
茶色い	12	茶色な	1				

ここにあげたものの中で，下線を引いた「大きな」「小さな」「おかしな」だけは,それ以外の語が「な形容詞」の活用をするのに対して,連体形しか持たないという点で特異である。たとえば，「あたたかな」には，「あたたかだ」や「あたたかになる」という形がある。ところが，「大きな」「小さな」には,「大きだ」「大きになる」といった活用の形がなく，名詞修飾のこの「な形」形しか持たない。ということでは,むしろ形容詞の「大きい」「小さい」「おかしい」が，名詞修飾する時に限って,「大きな」「小さな」「おかしな」という形を満つと考えた方がよいだろう。表中の語の「い形」と「な形」の使用頻度を比べてみると，「大きい」「小さい」では，「な形」の方が際立って多く用いられているのが目を引く。

「大きな」「小さな」を「大きい」「小さい」の特殊形と考えると，その使用範囲は限られているように考えられるが，現実には「な形」の方が多く用いられている。次の表は,形容詞が終止形として用いられる場合と，体言（名詞）に連なる場合の数を比較したものである。参考までに「おかしい」のデータも添える。

表 9-4. 「い形」「な形」の用法別頻度

	終止用法	連体用法
大きい	552	461
大きな	—	1935
小さい	127	403
小さな	—	774
おかしい	163	10
おかしな	—	34

「い形」が使われる時

先の表 9-3 にあげた終止用法と連体用法をもう少し詳しく見てみることにする。まず終止用法としたのは，次のものである。

①言い切りの形。

(89)本体は，トースターよりびとまわり小さい。

②「が」「から」「ので」「のに」「ながら」「し」「と」等の接続助詞を伴うもの。

(90)既存の産業に比べるとスケールは小さいが，活気はすごい。

(91)子どもはまだ小さいから，教育費もかかりません。

(92)低迷続きの県高校野球界に，小さいながらびとつの明かりをともしてくれたといえよう。

(93)被覆面積が大きいと，身体からの放熱が抑制されて暖かく，逆に露出部分が大きいと放熱が盛んになり涼しくなる。

③引用の「と」を伴うもの。

(94)世界で十四番目の額で，「まだまだ小さい」と，タイ政府スポークスマンは不安解消につとめている。

(95)小さいといえども，成熟したオスは，よしはらの中で約三十平方センチの縄張りを持つ。

(96)逆のものは，極性が小さいと考えてよい。

④終助詞「か」「ね」「よ」「の」等を伴うもの。

(97)DATA の値が SAIDAI の値より小さいか，または等しければ，移しかえないで，次のカードを読む。

(98)国会議員の役割が大きいね。

⑤「だろう」「です」「の｛です・だ｝」を伴うもの。

(99)その波及効果は大きいだろう。

(100)つまり，抵抗は固く丈夫なほど爆発は大きいのだった。

これらの例では，「小さい」「大きい」が述語として使われていることが明らかで，いずれの例も「い形」を「な形」に置き換えることができない。

「な形」「い形」の使い分け

体言（名詞）に連なる場合には，次のように「い形」も「な形」も使われる。

(101)底に小さいあなをあけた試験管に，あえんをいれ，ビーカーまたはコップに，き硫酸をいれておきます。

(102)糸をとめるには，しんどう板の真ん中に小さなあなをあけて，糸をとおしてとめ

るようにします。

しかし，体言に連なる場合をよくみてみると，「い形」が修飾するのは圧倒的に形式名詞が多い。次の表 9-5 は，「大きな」「大きい」「小さな」「小さい」それぞれが名詞に接続する場合のその名詞を，上位 6 位まで並べたものである。

表 9-5 「い形」「な形」に接続する名詞（頻度順）

	1		2		3		4		5		6	
大きい	もの	52	こと	32	ほど	27	とき	15	場合	14	ほう	13
大きな	影響	85	声	47	問題	34	役割	34	被害	33	変化	28
小さい	もの	33	とき	21	の	21	ほう	17	ほど	14	子･こども	13
小さな	あな	18	町	17	目	15	声	14	子･こども	11	もの	12

これを見ると，「な形」はいわゆる名詞に接続するが，「い形」は，形式名詞に接続することが多いのがわかる。形式名詞に接続するということは，その形容詞と名詞の関係が述語用法に近いということを示している。

(103) 全国の病院数，ベット数は増え続けているものの，地域格差は依然として大きいことが，29 日，厚生省がまとめた「病院報告」で明らかになった。

この例で「明らかになった」のほ，「地域格差が依然として大きい」ことだから，この「大きい」は述語用法である。この用法を先の終止用法に含めなかったのは，こうした「い形」は，先の終止用法とは異なり，「な形」に置き換えることが可能なためである。連体修飾節の中で，「い形」「な形」が述語のように用いられるのは，続く名詞が次のような場合である。

①「ため」「の」「こと」「ほう」「ところ」「せい」等の形式名詞。

(104) ドルが強い基本的な理由は，米国の財政赤字の規模が非常に大きいため，米長期金利が高くなっているからだ。

(105) 夢二の女の目があれほどに大きいのは，メランコリイのめがねをかけていたせいかもしれない。

(106) 経済面での被害が予想以上に大きいことが次第にわかってきた。

(107) 彼女は背が小さい方で，決して美しくはなかった。

(108)ぼくは体はでかいんじゃけど，気は小さいとこもある。

②「うち」「とき」「ころ」「場合」等の時を表す名詞。

(109)田植機の普及で，苗が小さいうちに移植され，作期が早まっているのは事実だ。
(110)うちは子どもが小さいとき，よくよその子どもさんを呼んで泊めていたわね。
(111)誠は小さい頃からおとなしい子だったという。
(112)ロールキャベツは，煮込む鍋が大きい場合，動いて形がくずれるのを防ぐために，落としぶたをするとよい。

③「だけ」「くらい」「ほど」「わり」等の副助詞

(113)その穴は，画面の側では小豆のように小さかったが，裏から見るとちょうどじょうご形に広がって，一ドゥカット貨幣かもう少し大きいぐらいになっており，あたかも婦人の麦藁帽の冠飾りのようであった。
(114)両選手とも体が小さい割にがっしりしていて，脚力も素晴らしかった。

上にあげた語は，「な形」を取ることも場合によっては可能だが，実際には，ほとんど「い形」を取っている。これらの語に「だ」が接続して，助動詞に相当する表現を作る場合があるが，この場合も「い形」が用いられることが多い。

(115)・・・・・・一時的な所得増加からの消費支出性向はちいさいはずである。
(116)平均的な場合は，最悪の場合よりも最適の場合にずっと近く，路長は最適値より39%大きいだけだ。
(117)しかし，魚群がいくつか発見されており，また魚体も大きいことから，関係者の期待は大きいようだ。
(118)丸顔で目が大きいせいだろう。

こうしてみてくると，体言に連なる場合でも述語用法であれば，「い形」が用いられることが多いと言える。連体修飾節の内容が，「より」を用いた比較の文の場合にも，その「い形」「な形」は述語用法である。

(119)このことから，ユタールの膨張の割合は，水より大きいことがわかる。

(120) しかし,おしゃもじよりずっと大きいラケットで打つのだから，野球のようにまさか空振りはしないだろうと，だれでも考える。

次の表 6-6 は，先の表 9-4 の連体用法における比較文の数を，「い形」「な形」で比べたものである。

表 9-6　比較文の頻度　() 内は素データ数

~より大きい	18%　(81)	~より小さい	16%　(63)
~より大きな	1%　(20)	~より小さな	0%　(3)

ここでも述語的な用法の場合には，「い形」が多く用いられるのがわかる。

ここまで述べてきたように，体言に連なる用法でも，その「い形」「な形」が述語的に用いられることはあり，その場合は，終止用法と同様,「い形」がよく用いられる。ところが，そうした述語的な用いられ方でありながら「な形」もよく用いられる場合がある。そのひとつは，名詞が形式名詞「もの」の場合で，「もの」は「な形」ともよく結びつく。先の表 6-3 を見てもわかるように「い形」の 1 位の名詞であると同時に，「小さな」6 位,「大きな」7 位の名詞にもなっている。

(121) ばねばかりは，20Kg ぐらいまではかれる大きなものがよい。

(122) ぐい呑みで酒を呑んだ味を知ってからは，京杯のような小さなものでは酒は呑めなくなる。

(123) 今の見通しでは,貿易収支の黒字が相当大きなものになる。

(124) ほとんどを海外に依存しているわが国において，国産原油発見の意義は大きなものではなかろうか。

(125) 米国の平和運動でソ連が果たしている役割は，大統領が示唆したものよりもずっと大きなものだ。

最後の例は「大きな役割」という語の結びつきの強さも関係しているだろうが，「もの」という形式名詞が実体を意味する名詞性を強く持っているために，33) 34) のような「もの」が明らかに存在物を表し，それを「大きな」「小さな」が修飾する場合だけでなく，36) 37) のような述語用法であっても「な形」が使われていることがわかる。

述語的な用法でありながら「な形」もよく用いられるもうひとつの場合は，国廣他 (1982) があげている例である。国廣らは,連体修飾節のなかの述語には「な形」が来にくいとして，次のような文をあげている。

口が小さい花瓶がほしい。

？口が小さな花瓶がほしい。

この場合「ほしい」のは,「小さい花瓶」ではなく，「口が小さい花瓶」である。つまり，連体修飾節の中の述語用法には「な形」が来にくいということで，その趣旨に異論はないが，ここであげられている「口が小さな花瓶」という用例自体は,筆者には十分可能なように思える。実際，次に見るように連体修飾節の述語として「な形」が使われる例は決して珍しくない。

(126) 目ばかり大きな男の子。

(127) 最初は体の大きなタヌキが餌を食べに来る。

(128) 忍びだこの大きなやつが，両足親指の付け根にできていた。

(129) 径の小さなメネジは,バイトで切ることが不可能なので，タップで切削する。

(130) 前に出された腰高の戸板に,ゆでたばかりの，太長い爪のわりに，甲がやや小さなズワイガニが，無造作に山積みされていた。

最後の例は「小さなズワイガニが山積みされていた」わけではなく，「甲が小さいズワイガニ」が「山積みされていた」わけで，この「小さな」は，述語用法である。上にあげた例では，名詞修飾の主語と,修飾される名詞との関係は「男の子の目」「タヌキの体」「メネジの径」のように全体部分関係になっている。たしかに，「い形」は述語用法に使われることが多いが，この全体部分関係はその例外的なケースで,こうした構文では，修飾節全体が形容詞のように機能しているので「な形」も使われると考えられる。

「な形」「い形」が修飾する名詞

連体修飾節内の述語用法にはもっぱら「い形」が使われることを見た。では，形式名詞以外の名詞に「い形」「な形」が接続する場合，「な形」「い形」によって，接続する名詞に違いはないのだろうか。表 9-7 は，それぞれに続く名詞のリストである。実は，「い形」に接続する名詞としては形式名詞の頻度が最も高いのだが，ここでは形式名詞を除いた名詞で見ている。こうしてみると，まず第一に「な」に続く名詞には抽象名詞が多いことがわかる。実際次の例に見るように,抽象名詞には，「い形」は接続しにくい。

(131) 若い世代を代表する書き手として　大きな人気を集めている。

(132) それに，すさんだ心の人が時折見せる　小さなやさしさが何より好きだからと語る。

一方，「大きい」に続く名詞には，具象名詞，中でも空間関係を表す語が多い。「小さい」に普通名詞が続くことは少ないが，その場合には，「値」に代表される数量関係の語の来るのが特徴だ。すなわち，「大きい」「小さい」は，客観的な大きさ，物理的な大小を問題にしていると言える。「い形」でなければならない名詞としては，唯一「小さい順，大きい順」の「順」があげられる。この名詞のみ修飾語と名詞との関係が，他の名詞が，たとえば，「大きな地震」から「地震が大きい。」への言い換えが可能なのに対して，「順が大きい。」とは言い換えられない外の関係にある。

大きさについて，人は，物理的な大小だけでなく，心理的に大きいと言いたいことも多い。あるいは，客観的な基準はなく，心理的な大きさしか問題にできないことがらも多い。その時に，物理的な大きさと区別して「大きな」を用いると考えられる。

(133) だけど，小さな池の大魚に飽きたらず，ニューヨークに出てきたら，大きな池のメダカになっちゃった。

(134) 健康が何よりだと言っていた病弱で小柄な大叔父の大きな頭には，まだまだ多くの古代史の引き出しがあったに違いない。

「大きい柱」と「大きな柱」，「大きい壁」と「大きな壁」，「大きい鍵」「大きな鍵」，「大きい曲がり角」「大きな曲がり角」，「大きい影」「大きな影」，「大きい溝」「大きな溝」，「大きい山」と「メリケン粉の大きな山」，「大きい動き」「大きな動き」といった同じ名詞と結ぶ例を見ると，抽象的な大きさを問題にする時には，「な形」でなければならないようだ。

表 9-7 名詞との結びつき

「大きな」に続く名詞

意義，　意味，　価値，　ウエイト，　影響，　効果，
教え，　救い，　励まし，　声援，　拍手，　反響，　感銘
被害，　事件，　戦争，　選挙，　盗難，　犠牲，　衝撃，
打撃，　損害，　痛手，　利益，　うまみ，　金，　強み，
権限，　プラス，　マイナス，　変化，　動揺，
思い出，　圧力，　足跡，　イメージダウン，　違い，
開き，　特徴，　特色，　問題，　課題，　議論，　焦点，
争点，　エポック，　危険，　リスク，　ミス，　事故，
あやまり，　原因，　理由，
善行，　動き，　うねり，　役割，　活躍，　犠牲，
ショック，　幸せ，　関心，　かかわり，　かぎ，
夢，　冒険，　かけ，　ねらい，　可能性，　転機
ため息，　あくび，　のび，
政府，　集落，　町，　村，　市，　店，　酒場，グラス，　炎，　会社，
川，　袋，　バッグ，　コンピュータ　　子ども，　声，　音，　力
サケ，　くろあげは，
はち，　かき（果物）

「大きい」に続く名詞

お墓，　お寺，　家，　建物，　お屋敷，
グループ，　靴屋，　岩，　アトリエ，
アパート，　スペース，　カーブ，
アップダウン
ライト，　レンズ，　コンピュータ，
花火，　流れ，　貼り紙，　活字，　はた，
こぶ，　目，　顔，　ミス，　順

「小さな」に続く名詞

心配り、親切運動、善行、幸福、夢、
波風、美徳、努力、働きかけ、叫び、
声、炎、政府、島、岬、池、川、谷
県、村、都市、道
生命、子ども、胸、目、肩、動物、
虫、花、
家、学校、ビル、飲み屋、旅館、　町、会社、店
教会、劇団、箱、　入れ物、コップ
子、力

「小さい」に続く名詞

円、車、角度、穴
値、声、流れ、
工作物、

この「大きな」が抽象名詞と結びつくと，その大きさも抽象的になり，次の例に見るように「意味のある，重要な」といった意味を帯びてくる。

(135)野球やテニスにくらべて，テニスがもつもうひとつの大きな特徴は，打球回数が比較にならないほど多いことだ。

(136)投票率を高めることは，どこの選管でも大きな悩み。

一方，「小さな」も心理的な大きさについて用いられる。しかしこの場合，「小さな」は，「意味がない」という抽象的な意味にはならず，むしろ逆に「小さいながら意味のある」といった意味になるようだ。

(137)長野版の小学生の詩「小さな目」に小学5年生の息子のクラスで，これまでに六人が掲載されました。

(138)高橋さんにとって・今回の“小さなコンサート”で子ども連の心に残した感動は高橋さんの感動でもあった。

(139)このドラマは，小さなサーカス団をいじめる暴力団員が，山の奥深い谷間で殺される推理サスペンス。

(140)若者のまち，東京・原宿のファッションは，実は埼玉が原産一この夏，岩槻市の小さなメーカーが作ったイラストをプリントしたTシャツが，原宿を，渋谷を席巻した。

(141)大草原の小さな家。

(142)明治十八年，新宿駅前の小さな果物店から出発した「高野」は・いまや日本一高価な土地に店舗を構える「衣」と「食」の専門店。

一般に「小さい」ことは価値の低いことにつながりがちだが，「小さな」はそれとほ異なる，むしろプラスの意味を担っているようだ。次の表9-8は，名詞修飾用法の場合の「な形」「い形」全体に占める「な形」の割合を分野別[6]にみたものである。自然科学系にくらべて，社会科学，文芸の分野の方が「な形」の使用頻度の高いことがわかる。単位はパーセント。

表9-8「な形」の分野別頻度

	自然科学系	社会科学系	文芸
大きな	60	79	86
小さな	31	54	72

こうしてみると，「な形」は決して特異な形ではなく，むしろ物理的な大小以外の心理的な大きさについては，「な形」の方がふさわしいと言える。慣用句では「大きなお世話」「大きな顔をする」のように「な形」が使われる。これも具体的な大きさではなく，心理的な大きさが問題にされているからだろう。

「な形」を使うわけ

最後に,「な形」が心理的な大きさを表す理由を考えたい。
「大きな」「小さな」は,歌にもよく出てくる。たとえば,「大きなたいこ」「おおきな栗の木の下で」「小さなスナック」等がある。「大きなたいこ」の歌詞は,「おおききなたいこ　どーんどーん,ちいさなたいこ　とんとんとん,おおきなたいこ,ちいさなたいこ　どーんどーん　とんとんとん」となっている。しかし,「イ形容詞」を使っている次のような歌もある。

だれかさんが　だれかさんが
だれかさんが　みつけた
ちいさい秋　　ちいさい秋
ちいさい秋　　みつけた

この歌では,「すました耳にかすかに聞こえるモズの声」や「わずかなすきから入る秋の風」に秋を見つけており,まず言いたいのは「小さいことがら」である。はじめから「小さな秋」と言ってしまっては,余情が生まれないように思われる。では,なぜ「な形」は心理的な大きさを表すのだろうか。

足がいたい！　　いたい足を引きずる。
雛祭りは楽しい。　　楽しい雛祭り
ぶりのさしみはおいしい。　おいしいぶりのさしみ

名詞修飾の「おいしいぶりのさしみ」では，終止用法の言い切りの「おいしい。」が持っている感動の意味・陳述性がなくなっている。「そういう属性を持った」という意味になり，概念化している。

父親の手は大きい。
大きい父親の手
大きな父親の手

手の単なる物理的な大きさを述べるには，「大きい」がふさわしいが，話し手の印象として，心理的な大きさを述べたいなら，「い形」では不十分で，「な形」がふさわしいと考えられる。

先に表 9-2 で,「い形」「な形」を持つ語の一覧を示したが,これらの語においても,客観性ではなくその心理面を強調したい時,「な形」が使われると考えられる。

以上,品詞の間の連続性について考えてみた。品詞分けと言うと,所与のものを分類しているという印象を与えるが,我々は,品詞に縛られて言葉を使っているわけではない。桜井(1964)には映画の広告として「魂の触れ合いに冴える清冽の感動」という例が挙げられているが,今日でも品詞の枠を飛び出した用法は多くある。

(143)まるで梅酒なノンアルコール(商品名)
(144)タッチでキレイを逃さない(広告)
(145)かわいいは作れる(広告)

こうした表現に新たな意味を盛り込めるのは,私たちが慣習として作り上げてきた言葉の規範が現にあるからこそだと言える。

注

(1)9 章 2 節は,三枝(1992)の内容を発展させたものである。
(2)9 章 3 節は,三枝(2013)の内容を修正したものである。
(3)9 章 5 節は,三枝(1993)の内容を修正したものである。
(4)9 章 6 節 3 は,三枝(1996)による。
(5)記載のない辞書として,たとえば,三省堂『大辞林』21 刷,『新明解国語辞典』第 3 版がある。
(6)自然科学のデータは, KWIC2 データから新聞のデータと文芸関係のデータを除いたもの,文芸のデータは, KWIC2 データの,小説・シナリオその他 14 冊,短編 25 編のデータ,社会科学のデータは,経済の専門書 3 冊のデータである。

おわりに

最後に本書で述べてきたことをまとめておく。

第1部1章では,まずこれまでの陳述の考え方を振り返った。もともとモダリティとは,直説法,仮定法,命令法という文の述べ方の違いを表すものだったが,日本語では,英語の場合等とは異なり,法が構文的に区別されず活用形の中に含まれている。こうした活用形のあり方に注目した日本の文法家の中で,三上（1953）は,同じ「書く」にも,陳述度がゼロの不定法と陳述度が1の文末終止法とがあり,かつ両者は離散的ではなく連続的な存在であることを指摘している。本書では,動詞の言い切り形の,三上の言う陳述度が1の場合を叙述形,陳述度がゼロの場合を概念形と呼んで区別し,それがどのように文の中にあらわれているかを観察した。この区別によって,「彼は歩くのに杖を使う。」と「彼は歩くのに彼の息子は車を使う。」という,従来「目的」と「逆接」と呼ばれている用法の違いが,「の」の前の陳述度によって生じていると説明することができる。

第2部2章では,語形の共通性に注目することによって,従来別の語として扱われてきたものが実は同じものであり,その違いは,語形の違いから引き出されることを論じた。具体的には「ので」「のに」「だけで」「だけに」の4語を取り上げた。この4ッ語を取り上げたのは,次のように,形と意味に共通するところがあるためである。

（1）外国へ旅行するので,まとまった金が必要だ。

（2）外国へ旅行するだけに,まとまった金が必要だ。

（3）ちょっと旅行するのに,そんなに金が必要か。

（4）ちょっと旅行するだけで,そんなに金が必要か。

まず,「で」と「に」はともに「だ」の連用形とも考えられることを述べた。助詞か助動詞かを区別するのは構文と考えられるので,「ので」を含む句が主文の述語の格成分になりえない時には,助動詞的性格が強く,理由を表すと考える。一方,「に」は後件の事態が成立する場面を示す意味合いが大きい。「の」と「だけ」では,「だけ」は「丈」が語源と言われ,名詞性が強い。「の」には,1章で述べた概念形と叙述形を受ける場合とがあり,名詞代用の「の」は概念形,叙述全体を受ける「の」は叙述形を受けていると言える。「ので」節と「だけで」節を比べれば,「ので」節の前では述語を丁寧体に変更することが可能で,述部に叙述性がある。「のに」には,大きく「見るのに金が必要だ」と「見るのに見えない」という目的と逆接と呼ばれる用法があるが,この違いは,前者は前件が動作文で動詞の言い切り形現在しか来ないこと,後者は,前件後件に対比的な要素があることによる。後者では後件に話し手の意向や命令は来ない。「だけで」は,「だけ」の限定の意味から,他の要素の存在を前提にしない,因果関係を表す場合には成立しにくい。「だけに」は「のに」と同様,用法に幅があるが,基本的には「あなただけに教える」と「環境保全が

叫ばれているだけに　活発な議論があった」の用法に代表される。前者は,目的語を限定し,後者は,後件の成立条件をひとつの場面に限定するので,理由の意味を持つと考えられる。

第3部では,話し言葉でよく使われる「って」を取り上げ,「って」が①用法の広がりを持つこと,②語形変化の体系を持つことをよっつの章に分けて論じた。まず3章では「って」という語形が「来てくれないってひがむ」という引用の用法,「せがれが嫁もらおうって年になった」という連体修飾用法,「自転車に乗るっておもしろい」という提示用法,「そう言うなって。」という終助詞の用法を持つことを,似た用法を持つ「と」との比較をしながら論じた。「と」にも格助詞，副詞，引用，接続助詞と,様々な用法があるが,実は連続した用法であり,そこに共通するものは「と」が名詞に接続する場合はもとより陳述性を持つ語句，文に接続する場合においても，「と」によってその陳述性が失われ,「と」節は想念を表すということであった。それに対して「って」は引用の意味合いを失わない。「と」と異なる「って」の働きと意味を考えるにあたって,①「って」が連用形の形をとっていること,②連用形の前に，促音が置かれること,の2点が重要と考えた。すなわち,「って」が連用形という形を取っているために接続の仕方の自由度が大きく,まｔら,連用形の前に促音が置かれる。後者は発音上は声門の緊張と閉鎖によるポーズを意味し,「って」の前の述語に陳述性のあることが示されていると考えられる。こうした点から,「と」とは異なる「って」の陳述表現をそのまま主文に引き込む働きが説明できる。

4章では逆接と呼ばれることの多い「たって」「だって」について,語形を出発点としてその用法を観察し,ここにも引用,逆接,終助詞的用法,さらには接続詞という用法の広がりがあることを論じた。接続詞の「だって」には「どうして寝ないの？－だって、宿題終わってないんだもん。」という人に逆らう用法と、それに相反するような「A:ごめん。遅れちゃった。－B:だって、今日学校あったもんね。」という共感を示す用法とがある。後者の用法は、「だって」の話し手が対話相手の側に立って、ともに外側の状況と向き合うと考えれば両者を統一的に説明できること、また、「だって」は相手の言動に対して発話されるというより、相手が問いたださずにはいられなかった「だって」の発話者の言動に向けられることを述べた。文中の「ても」「でも」「たって」「だって」と、接続詞の「でも」「だって」とはその意味において基本的に同じものと言える。

5章では「言う」の条件形である「ってば」「ったら」が提題にも使われることを,係助詞の「は」「なら」と比較しながら述べた。また,「ってば」「ったら」が主格しか受けないのに対して,「って」は,「私は牛肉って食べない。」と主格以外もとることができる。「ってば」と「ったら」では,仮定条件を含む「ってば」は「～と言えば～と言えないこともない」と発話内容を弱め,確定条件を含む「ったら」は,時間的継起関係をを持ち仮定性が弱く,後件の制約が「ってば」に比べて少ない。

最後の6章においては,①引用,②話題の引き込み,③反復,④伝聞,⑤言いつけ,⑥問い返し,⑦強調に分けることのできる「って」の様々な用法が,①「って」で受ける句の発話者

が誰であるか,②引用句末に「だ」の付加が義務的であるか否か,③主文の述語の有無と,また述語が必要な場合その述語の性質,④「って」の省略の可否,という4条件によって区別されることを論じた。一方,逆接の「って」は,①逆接,②主題の添加,③反発,のみっつに分類できる。累加の「も」を構成要素に持つ「ても」「でも」が並べ立ての意味を基本とするのに対して,「たって」「だって」は「とする」の条件性と「だ」という言い切り形の陳述性から,一方で係助詞的な働きをし,一方では反語的な逆接の働きをする。

全体を通して明らかになったことのひとつは，もともとは動詞を内包する「って」が，片や接続詞，片や終助詞へと大きく分化し，それとともに陳述性を帯びていく点である。この変化は，一方で述語により近い助動詞を経て，陳述だけを担う終助詞への分化であり，また一方で，これまた述語性を持った接続助詞から接続詞への分化である。渡辺（1974：52）は，終助詞について「文末近くに現れるものほど，また文頭にも現れやすい」として，「ねえ，母さん，五時に出発だったね。」「よー，元気そうじゃないかよ。」という例を挙げている。終助詞だけでなく接続詞にもこの変化は見られ,文頭で聞き手の発話を受ける「だって」と，文末で「明日は雨が降るんだって。」とこれまた他者の発話を受ける「だって」には，聞き手への働きかけという意味的に共通するものがある。また一方で，「って」の述語の主体が一般化することで「って」は係助詞に近づく。こうした語形の観察から「って」の連続性を示すことができた。また,引用,話題の引き込み,訴えかけの「って」には，ほぼ同じ意味で「ってば」「ったら」あるいは「ったり」という形がある。これら tte, ttari, ttara, tteba, ttarou という語形は,使役を表わすーaseru や受身を表わすーareru が活用するのとよく似て,「って」が全体としてひとつの語形変化の体系を持っていることを示している。

第4部7章では,「が」「けど」の用法を観察した。話し言葉の資料分析からわかったことをまとめると,次のようになる。

①総数約 1500 のうち,「けど」の使用が 65%を占め,圧倒的に多い。それに続く「が」でも 14%に過ぎない。②接続助詞と呼ばれてきたが,「けど」は,発話末,談話末でもよく用いられる。③「が」「けど」「けれども」は男女の使用頻度に大きな差が見られないが,「けども」はもっぱら男性が用い,「けれど」はもっぱら女性が用いる。④文中で,「が」は普通体を受けることが多く,「けど」「けども」は「です・ます体」に接続することも多い。文末が丁寧体の場合,文中の「が」は丁寧体を取り,「けど」類は普通体の場合も半数近くあった。しかし,文末が普通体であっても文中で丁寧体が使われることもあり,話し言葉においてはレベルシフトが頻繁に起こっている。⑤これらの助詞とともに用いられる述語には,「と思うけど」「条件形＋いいけど」といった話し手の判断を控え目に述べる表現,「ある・いる」「と言う」といった客観的な叙述表現が特に多い。⑥「と思うけど」の使用が多いことから,「けど」は,普通体の直截さを和らげ,発話の丁寧度を高める働きをしていると言える。「が」「けど」類の意味,用法については,大きく,①前置き,②対比・逆接,③言い切りの回避,④注釈,のよっつに分けられることを述べた。「が」は,格助詞の「が」が出自と考えられるが,石垣（1944）は「思ふが悲しさ」という上代の例が,平安期には「程なく籠りぬべきなめりと思ふが悲しく侍るな

（天の羽衣）」と変化したことについて,「が」が接続助詞として使われるようになったのは,主格の「が」が用言を承けるようになったこの時に始まると述べている。「けど」類は,もともと条件を表すものであったが,近世前期に活用語一般の終止形に下接するとともに,接続詞としての用法も現われる(土井洋一（1969：415）ということから,現代における「が」「けど」類の様相は,この陳述形を受けるに至った時から始まっていたと考えることができる。

本章では生の会話資料を用いて「が」「けど」類の用法を観察した。その際,これまで日本語文法において重要な指標のひとつとされてきた三尾の丁寧化百分率がうまく機能しないという結果になった。その大きな理由は,実際の会話では様々な条件が働いて整った文が取り出せないからである。終結部が普通体の文では,文全体のスタイルも普通体のままで変化しないという三尾のそもそもの前提が必ずしも成り立たず,その反例が現実には見られた。文法面からのみ論じるならば,スタイルシフトの起こりやすい条件,起こりにくい条件をあげることは依然として可能だが,発話を包括的にとらえようとすると,接続助詞の種類がスタイルの選択に果たす意味自体は相対的に小さくならざるを得ないと思われる。特に,「が」「から」といった陳述表現を受ける接続助詞の場合にそれが言える。現在の文字化された音声情報のない会話資料では発話の様相が読み取れない面が大きい。今後の文法研究の大きな課題と考える。

一方で,実際の発話が脚本の台本とは異なって,中止,中断や倒置が頻繁に起こるものであるなら,これまで接続助詞とされてきた語が中核的な意味を持ちつつ,文の様々な位置で,したがって接続助詞という品詞にとどまらず機能するのは自然なことだと言うことができる。

8章では,「だ」について,これが述語要素であるとともに,極めてモダリティ性の高い語であることを論じた。終助詞が文頭,文中に現れることは,先の渡辺の指摘にあるようによく耳にする現象ではあるが,命題の主要な構成要素である名詞述語の「だ」が,「それにだ･･･」のように間投助詞的に使われたり,「ざまあみろ,だ。」のように文相当の句を受けるのは特異な現象と言える。そこで,「だ」が文内の必須要素となっているかどうかを,「だ」の省略可能性の観点から見てみた。まず,「だ」が名詞述語としての述語性を持っているのは,「だ」の省略ができない接続詞の一部（「だから」「だったら」「だって」等）と,文中の名詞類を受け後ろに助詞が続く場合（「だの」「だか」）である。ただ,これらの「だ」は,述語性を残してはいるものの,「です」には置き換わらず,一語化している。「だか」については,「誰が持ち主だかわからない。」と,疑問詞があれば成立する疑問文が,「田中さんが持ち主｛＊だか・か・かどうか｝わからない。」と,疑問詞がない疑問文では「だか」が成立しにくいことが問題とされてきた。言語資料を見てみると,実際には疑問詞がなくて「だか」が使われる例は少なく,その数少ない例では叙述がペアで「夏が来たんだか来なかったんだか」のように使われており,基本的に名詞を受ける並列の用法と同様のものと考えることができる。先にあげた以外の,「だ」の省略が可能な条件形をとる接続詞（「だと

すれば」「だとしたら」等）と, 引用句では,「と」の持つ概念化の働きによって「だ」が概念化するので,「です」には置き換わらない。また, 引用句の場合は, 言い切りの場合と同様, そもそもこの述語の「だ」はなくてもいいものなので, 省くことができる。ただ, 書き言葉では省略しないことが多い。接続助詞が後ろに続く「だ」（「だし」「だが」等）は, 叙述の陳述度が高く省略ができない。この場合の「だ」は, 名詞述語としての性格が強い。文末の言い切りの「だ」は, 書き言葉では省かない。しかし, 話し言葉では, 話し言葉の持つ現場性に支えられて, 統語的には義務ではなく, 命題に関わらないという点でモダリティ性が高いと言える。しかし, そのモダリティ性にはレベル差, すなわち, 自分自身に向けた発話か他者に向けた発話かという違いがある。自分自身に向けて「だ」を用いる時には, 感情の吐露, 非難, 発見, 思い当たりの表明といった場合があげられるが, この時「だ」の他者に向けた伝達のモダリティは発動されない状態にある。言い切り形で自分自身に向けた発話は, 男女ともに用いる。言い切り形で他者に向けた発話は男性だけが用いる。主張, 宣言, 命令, 疑問, 問い返しの用法が多い。男性だけという条件があるのは,「だ」の持つ強い感情表出性のためである。そこで, 女性は,「だ」を省くか,「だ」に終助詞を付加するか, あるいは,「のだ」という客観性の高い形式を用いて「だ」の持つ語気の強さをやわらげるということをする。

最後の第 5 部 9 章では, 名詞, 形容詞, 動詞と名付けられたそれぞれの品詞に属する語が, その意味素性と構文によって異なるふるまいを見せる, その有りようと条件を見た。名詞にはもともと名詞的性格を持つ語, 形容詞的性格を持つ語, 動詞的性格を持つ語, 副詞的性格を持つ語があり, それが構文によって形容詞的ふるまいや副詞的ふるまいをする。措定文の名詞述語は形容詞的にふるまい,「事実」「勢い」「結果」「実際」は, 名詞でありながら副詞的にふるまう。ほかに, 動詞の名詞的ふるまい, 形容詞の名詞的ふるまいを観察し, 最後にふるまいの異なる同義語を取り上げた。たとえば,「小さな」「小さい」のように「ナ形」と「イ形」を持つ語の場合, その心理的な面を取り上げたい時には「ナ形」が, 客観的な面を取り上げたい時には「ナ形」が使われている。商品名に使われた「まるで梅酒なノンアルコール」といった表現にも, 我々が品詞分けという慣習による規範にしたがって言葉を使いながら, その規範をいわば逆手にとって, 語に新たな意味を吹き込んでいることが観察できる。

言葉の機能というのは, 語形が文の中で果たす役割であって, 機能が語形の中にもともと備わっているわけではない。ある語がどういう機能を持っているかを問う前に, どうしてこの語形がその意味を担うことになったのかを考えたい, というのが本書の意図するところ, 出発点であった。本書で取り上げた「だ」は, 日本語の判断を示す判定詞として命題を

構成する極めて基本的な述語であるが, それが文頭で「だって」という接続詞の構成部分として, 命題の外で用いられる, と同時に文末で「へーん　だ」と終助詞のようにも働くという興味深い振る舞いをする。「が」「けど」類も文中で接続助詞として働く割合とほぼ同じくらい, 文末で言い終わりに使われている。また, 生の会話資料を観察すると, そもそも文中, 文末という区別がさほど意味を持たない。本書で観察した「って」もまた用法の連続性を持っている。しかも, そうした用法全体がひとつの整った体系をなしているという事実が観察できた。動詞の活用形と対応するように「って」が変化する形を持っていることはこれまた興味深い。しかし, 考えてみれば, 意味の連続性, 語形の体系性は言葉にとって当然のこととも思われる。文法家は語の用法を把握しやすいように様々に分類を行うが, 言葉を使う人が分類にしたがって発話しているわけでもなく, そのような分類を必要とはしていない。言葉が意味の連続性, 体系性を持たなければ, 記憶負担が大きすぎて, 使いこなせないという側面もあり, 人は自然に, あるいは, 意図的に, その語の使われ方から中核的な意味を引き出し, それを場面の持つ条件に合わせるように変更を加え使っている。本書は, そうした言葉のあり方のひとつの側面に触れたものだと考える。

用例出典

Yahoo,国会議事録,および,本の全タイトルを示した用例は,国立国語研究所公開コーパス BCCWJ の「少納言」からのデータである。

KWIC1 は,国立国語研究所が 1990 年当時所蔵していたデータベース,KWIC2 は,情報処理振興事業協会技術センターの作成になるもので,新聞一月分（1983 年）,計算機マニュアル・理科系教科書・科学雑誌計 30 冊,小説・シナリオ・随筆等計 21 冊,短編小説 25 編からなる。

公開会話データ

外大：「JLPTUFS 作文コーパス」東京外国語大学留学生教育センター教育研究開発プロジェクト 2011 年 3 月

女性：現代日本語研究会（1987）『女性のことば・職場編』ひつじ書房

男性：現代日本語研究会（2002）『男性のことば・職場編』ひつじ書房

新聞・雑誌等

助詞助動詞：『現代語の助詞助動詞一用法と実例』1951 国立国語研究所

日経：日本経済新聞

朝日：朝日新聞

毎日：サンデー毎日

シナリオ

冬：向田邦子『冬の運動会』新潮社

家族熟：向田邦子『家族熟』新潮社

幸福：向田邦子『幸福』新潮社

男どき：向田邦子『男どき女どき』新潮社

あうん：向田邦子『あ・うん』新潮社

阿修羅：向田邦子『阿修羅のごとく』新潮社

思い出：向田邦子『思い出トランプ』新潮社

寺内：向田邦子『寺内貫太郎一家』新潮社

隣：向田邦子『隣りの女』文春文庫

蛇蝎：「蛇蝎のごとく」,毛糸：「毛糸の指輪」,びっくり：「びっくり箱」,母上：「母上様・赤澤良雄」,金魚：「きんぎょの夢」：向田邦子『蛇蝎のごとく』大和書房

おこげ：中島丈博「おこげ　OKOGEJ1992」,死んでも：石井隆「死んでもいい」,シコ：砂本量・水谷俊之「シコふんじゃった。」シナリオ作家協会編『‘92 年鑑代表シナリオ集』映人社

水の旅人：末谷真澄「水の旅人 KIDS」,ひき逃げ：周防正行「ひき逃げファミリー」,月は：崔洋一・鄭義信「月はどっちに出ている」『‘93 年鑑代表シナリオ集』映人社

漫画

鎌倉：西岸良平『鎌倉ものがたり』双葉社

美味 25：雁屋哲 1990『美味しんぼ 25』小学館

美味 28：雁屋哲 1991『美味しんぼ 28』小学館

ちびまるこ：さくらもも子『ちびまる子ちやん大野君と杉山君』ホーム社

となりの山田君：「となりの山田君」朝日新聞

小説

ゴールデン：伊坂幸太郎『ゴールデンスランバー』新潮文庫

遺骨：内田康夫 2007『遺骨』文春文庫

池袋：宮藤官九郎 2005『池袋ウエストゲートパーク』角川書店

模倣：宮部みゆき 2006『模倣犯』新潮社

三毛：赤川次郎『三毛猫ホームズの怪談』角川書店

君を：山田太一『君を見上げて』新潮社

栗：「栗の木の思い出」『Just Health』1993. 9.

夫婦：「夫婦の階段」『週間朝日』1994. 4. 22.

さぶ：山本周五郎『さぶ』新潮社

会えて：石井ゆうみ『会えてよかったね』講談社

三姉妹：赤川次郎『三姉妹探偵団 3』講談社

女社長：赤川次郎『女社長に乾杯』新潮社

太郎：曽野綾子「太郎物語高校編』新潮社

待ち伏せ：山本周五郎『待ち伏せ』新潮社

梅安：池波正太郎『梅安料理ごよみ』講談社

病理：大平健『豊かさの精神病理』岩波書店

龍：宮部みゆき『龍は眠る』新潮社

つぐみ：吉本ばなな『TUGUMI』中公文庫

デート：赤川次郎『一番長いデート』集英社

季節：山本周五郎「青ぺか物語・季節のない街」『山本岸郎全集 14 巻』

豊かさ：大平健『豊かさの精神病理』岩波新書

金田一：天樹征丸『金田一少年の事件簿 1　オペラ座館・新たなる殺人』講談社

法：植松正「成文法の文章」林大・碧海純一編『法と日本語』有斐閣

オペラ：赤川次郎『三毛猫ホームズの歌劇場』角川書店

夢見る女：安岡章太郎『質屋の女房』新潮社

出典のないものは作例である。

引用文献

辞典類

田中晴美編 1988『現代言語学事典』成美堂

飛田良文・浅田秀子 1994『現代副詞用法辞典』東京堂出版

松村明編 1988『大辞林』三省堂（1992　第 21 刷使用）

松村明編 1971『日本文法大辞典』明治書院

渡辺実 1989「陳述」『国語学大辞典』東京堂出版

日本語文献

朝山信彌 1931「語尾に「に」を有する古代象徴辞の一問題」『國語國文』星野書店

足立さゆり 1995「会話の流れにおける尊敬語の視点とシフト」『日本語の研究と教育　窪田富男先生退官記念論文集』専門教育出版

石垣謙二 1944「主格「が」助詞より接續「が」助詞へ」『國語と國文學』21 巻 3-4 號（服部四郎・亀井孝・築島裕 1981『日本の言語学　第 7 巻　言語史』所収）

石垣謙二 1955『助詞の歴史的研究』岩波書店

石井正彦 2002「日本語の形態論」飛田・佐藤編『現代日本語講座　第 5 巻　文法』出版社？

井島正博 2002「主語のない名詞述語文」『日本語学』12 月

市川孝 1965「接続詞的用法を持つ副詞」『国文』1 号　お茶の水女子大学国語国文学会

井上史雄 1998『日本語ウオッチング』岩波書店

今村和宏 2007「「のだ」の発話態度の本質を探る－「語りかけ度」と「語りかけタイプ」－」一橋大学留学生センター紀要 10 号

岩井智子 1988「「から」と「ので」意味と用法及びその指導法」『昭和 62 年度日本語教育研修会実修課程報告書』日本語教育学会

氏家洋子 1969「文論的考察による接続助詞『の』の設定」『国文学研究』41 集

内田安伊子 2001「「けど」で終わる文についての一考察－談話機能の視点から－」『日本語教育』109

大津栄一郎 1993『英語の感覚（上）』岩波書店

奥田靖男 1985「おしはかり（二）」『日本語学』2 月

奥田靖男 1985『ことばの研究・序説』むぎ書房

沖裕子 1995「対話型接続詞における省略の気候と逆接―「だって」と「なぜなら」「でも」－」中條修編『論集　言葉と教育』和泉書院

沖裕子 1997「新用法からみた対話型接続詞「だって」の性格」『信州大学人文科学論集　文化コミュニケーション学科編』31

尾上圭介 1990「文法論―陳述論の誕生と終焉―」『国語と国文学』67 巻 5 号（（『文法と意味Ⅰ』くろしお出版 2001 所収使用）

尾上圭介 1982「現代語のテンスとアスペクト」『日本語学』1 巻 2 号（『文法と意味Ⅰ』くろしお出版 2001 所収使用）

影山太郎 1993『文法と語形成』ひつじ書房
金澤裕之 2002「近代語ー話しことばにおける文の内部の丁寧さ」『國文学』5 月号
鎌田修 2000『日本語の引用』ひつじ書房
カモンオーン・コモンワニック, 沢田奈保子 1993「名詞述語文の日・タイ対象研究―認知語用論的観点からー」『言語研究』103
川端善明 1978『活用の研究ⅠⅡ』大修館書店
木枝増一 1937『高等国文法新講品詞篇』東洋図書
金賢娥 2013「引用構文における発話動詞の潜在―複文としての分析」『日本語文法』13 巻 1 号
金水敏 2001「テンスと情報」音声文法研究会編『文法と音声Ⅲ』くろしお出版
日下部文夫 1956「口語動詞の活用の考え方」『岡山大学法文学部学術紀要』7
日下部文夫 1961「アクセントの現象二三」『言語生活』7 月号
日下部文夫 1968「現代日本語における助詞分類の基準―助詞の相関―」『言語研究』53 号
工藤真由美 2002「日本語の文の成分」飛田・佐藤編『現代日本語講座　第 5 巻　文法』明治書院
国廣哲彌 1962「日本語格助詞の意義素試論」『島根大学論集』12 号（川本茂雄他編 1979『日本の言語学』第 5 巻所収を使用）
国広哲弥 1992「「のだ」から「のに」・「ので」へ　―「の」の共通性―」『日本語研究と日本語教育』名古屋大学出版会
小泉保 2008『現代日本語文典』大学書林
小泉保 2000『言語研究における機能主義　-誌上討論会-』くろしお出版
小出慶一 1984「接続助詞「ガ」の機能について」『アメリカ・カナダ十一大学連合日本研究センター紀要』7
国立国語研究所 1951『現代語の助詞・助動詞　一用法と実例ー』秀英出版
小林幸江 1979『「に」のつく副詞, 「と」のつく副詞』『日本語学校論集』6 号
小林好日 1936『日本文法史』刀江書院
此島正年 1973『国語助詞の研究　助詞史素描』桜楓社
三枝令子 1989「続・日本語ワンポイントレッスン」『月刊言語』18 巻 4 号
三枝令子 1990「「だけに」の分析」『言語文化』27 巻　一橋大学
三枝令子 1992「名詞の形容詞的ふるまいー名詞述語文についての一考察―」『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究ー11』情報処理振興事業協会技術センター
三枝令子 1993「動詞・形容詞の名詞的ふるまい」『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究ー12』情報処理振興事業協会技術センター
三枝令子 1993「語形から機能を知るーので, のに, だけで, だけに, の分析を通してー」『言語文化』39 巻　一橋大学
三枝令子 1995「「って」の構文的位置づけー「と」による引用と「って」による引用の違いー」『日本語と日本語教育　阪田雪子先生古希記念論文集』三省堂
三枝令子 1995「「だって」「たって」の本義とその用法の広がり」『日本語の研究と教育　窪田富男先生退官記念論文集』専門教育出版
三枝令子 1996「「小さな旅」と「小さい旅」」『言語文化』33 巻　一橋大学
三枝令子 1997「「って」の体系」『言語文化』34 巻　一橋大学

三枝令子 1999「提題の「ってば」「ったら」―「珠美ったら,無茶言わないでよ」－『一橋大学留学生センター紀要』第 2 号
三枝令子 2001「「だ」が使われるとき」『一橋大学留学生センター紀要』第 4 号
三枝令子 2007「話し言葉における「が」「けど」類の用法」『一橋大学留学生センター紀要』第 10 号
三枝令子 2013「名詞から副詞,接続詞へ」『一橋大学国際教育センター紀要』第 4 号
阪倉篤義 1974『改稿　日本文法の話　第三版』（1995 年第三版使用）
佐久間鼎 1983『現代日本語法の研究《改訂版》』（初版は 1940）くろしお出版
桜井光昭 1964「『名誉の』と『名誉な』」『口語文法講座３　ゆれている文法』明治書院
佐竹久仁子 1986「「逆接」の接続詞の意味と用法」『論集　日本語研究（①）現代編』宮地裕編　明治書院
定延利之 2010「「た」発話を行う権利」『日本語/日本語教育研究１』ココ出版
荘司育子 1992「疑問文の成立に関する一考察「デス」という形式をめぐって」『日本語日本文化研究』2　大阪外国語大学
白川博之 1996「「ケド」で言い終わる文」『広島大学日本語教育学科紀要』6
白川博之 2009『「言いさし文」の研究』くろしお出版
杉浦まそみ子 2007『引用表現の習得研究　記号論的アプローチと機能的統語論に基づいて』ひつじ書房
砂川有里子 1988「引用文における場の二重性について」『日本語学』9 月号
鈴木重幸 1972『日本語文法・形態論』むぎ書房
鈴木睦 1997「日本語教育における丁寧体世界と普通体世界」田窪行則編『視点と言語行動』くろしお出版
鈴木睦 1993「女性語の本質一丁寧さ,発話行為の視点から」『日本語学』12 明治書院
鈴木義和 1992「提題のナラとその周辺」『園田学園女子大学論文集』26 号
高橋四郎 1931「動詞の終止形―辭書・注釋書を中心とする考察―」『國語國文』1 巻 1 号
高橋太郎 2005『日本語の文法』ひつじ書房
竹内美智子 1973「副詞とは何か」『品詞別日本文法講座　連体詞・副詞』明治書院
田中章夫 1984「4　接続詞の諸問題　－その成立と機能―」鈴木一彦・林巨樹編『研究資料日本文法　第 4 巻　修飾句　独立句編』明治書院
田昊 2013「「言いさし」の「けど」類の使用実態に関する一考察　-日本語教育文法の視点から-」『日本語教育』156 号
田野村忠温 2002　「形容動詞連体形における「な/の」選択の一要因―「有名な」と「無名の」―」『計量国語学』23 巻 4 号
趙華敏 2001「反論という発話行為における『だって』と『でも』の機能について一話者の態度から見て」『同志社女子大学大学院文学研究科紀要』創刊号
寺村秀夫 1978『日本語の文法（上）』国立国語研究所
寺村秀夫 1981『日本語の文法（下）』国立国語研究所
寺村秀夫 1982『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版
寺村秀夫 1984『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
寺村秀夫 1991『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版
土井洋一 1969「第 2 章接続助詞十　けれども＜現代語＞」松村明編『古典語現代語助詞助動詞詳説』學燈社（6 版 1987 を使用）
時枝誠記 1950『日本文法　口語篇』岩波書店（1988 年改版第 13 刷を使用）
中右実 1980「文副詞の比較」『日英語比較講座第２巻　文法』大修館書店

中川正之 1975「多・遠と的―日本語との比較からー」『アジア・アフリカ語の計数研究』1 号
中田祝夫・竹岡正夫 1960『あゆひ抄新注』風間書房
中野はるみ 2005「転成名詞の文中での意味のあり方―「たのし・さ」と「たのし・み」－」『長崎国際大学論叢』5 巻
永野賢 1951「「から」と「ので」とはどう違うか」『国語と国文学』
西尾寅弥 1984「品詞の転成」鈴木一彦・林巨樹編『研究資料日本文法　第 1 巻　品詞論・体言論』明治書院
西山佑司 2003『日本語名詞句の意味論と語用論　－指示的名詞句と非指示的名詞句―』ひつじ書房
仁田義雄 1987「条件づけとその周辺」『日本語学』9 月号
仁田義雄 1989「現代日本語文のモダリティの体系と構造」仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』くろしお出版
仁田義雄 1997『日本語文法研究序説―日本語の記述文法を目指してー』くろしお出版
日本語記述文法会編 2003『現代日本語文法４　第 8 部モダリティ』くろしお出版
日本語記述文法会編 2009『現代日本語文法 5　第 9 部とりたて　第 10 部主題』くろしお出版
野田春美 1995「ガとノダガー前置きの表現」『日本語類義表現の文法（下）複文・連文編』くろしお出版
野田春美 1997『「の（だ）」の機能』くろしお出版
野田尚史 1989「真性モダリティを持たない文」仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』くろしお出版
野田尚史 1986「複文における「は」と「が」の係り方」『日本語学』5　明治書院
野田尚史 1998「「丁寧さ」からみた文章・談話の構造」『国語学』194 集
芳賀綏 1954「“陳述”とは何もの？」『國語國文』23 巻 4 号（服部四郎他編 1978『日本の言語学』第 3 巻所収を使用）
萩原孝恵 2008「人間関係と接続詞「だって」の使い方」『昭和女子大学大学院言語教育・コミュニケーション研究』3
橋本進吉 1959『国文法体系論』岩波書店
蓮沼昭子 1995「談話接続語『だって』について」『姫路獨協大学外国語学部紀要』8
浜田麻里 1995「トコロガとシカシ　逆接接続語と談話の類型」『世界の日本語教育』5
林知己夫 1996『日本らしさの構造』東洋経済新報社
林栄一監訳 1975『ブロック日本語論考』研究社出版
原口祐 1971「『ノデ』の定着」静岡女子大学研究紀要 5 号
日野資純 1963「いわゆる接続助詞『ので』の語構成―それを二語に分ける説を中心としてー」『国語学』52 集
ビルマン, オリビェ 1988「間接話法の日仏比較対照一文中の会話文＋「と」を中心として」『日本語学』9 月号
藤田保幸 1982「準引用」『待兼山論叢』15
藤田保幸 1986「文中引用句「～ト」による「引用」を整理する一引用論の前提として一」『論集　日本語研究（一）現代編』明治書院
藤田保幸 2000『国語引用構文の研究』和泉書院
藤村逸子 1993「わからないコトバ, わからないモノー「って」の用法をめぐってー」『名古屋大学言語文化部』
星野和子 1986『現代語における「も」の用法』東京女子大学日本文学科
堀井令以知 1974「名詞文の機能」『アカデミア』97
前田直子 1993「逆接条件文「～テモ」をめぐって」益岡編『日本語の条件表現』くろしお出版

前田直子 1995「ケレドモ・ガとノニとテモー逆接を表す接続形式」宮島・仁田編『日本語類義表現の文法（した）複文・連文編』くろしお出版
松田剛史 1985「「て」,連用形,「と」の分布」『大谷女子大国文』15
益岡隆志,田窪行則 1989『基礎日本語文法』くろしお出版
益岡隆志・田窪行則 1992『基礎日本語文法　改訂版』くろしお出版
松尾捨 1969「第 1 章格助詞五　と＜古典語・現代語＞」松村明編『古典語現代語助詞助動詞詳説』學燈社（6 版 1987 を使用）
松下大三郎 1930『標準日本口語法』中文館書店（復刊（増補校訂）勉誠社 1977 を使用）
松村明 1944「助詞の異同について」『日本語』三月号
三尾砂 1942『話言葉の文法』帝国教育会出版部（『話言葉の文法（言葉遣篇』くろしお出版 1995 を使用）
三上章 1953『現代語法序説』（1972 年復刊,1987 年版使用）くろしお出版
三上章 1953『現代語法新説』（1972 年復刊,1991 年版使用）くろしお出版
三上章 1960『象は鼻が長い』くろしお出版
三上章 1968「述語としての体言」『三上章論文集』くろしお出版
水谷静夫・星野和子 1994「 名詞から副詞まで一語類の新しい枠づけ」『計量国語学』19 巻 7 号
南不二男 1974『現代日本語の構造』大修館書店
嶺田明美・冨田由布子 2009「接続詞「だって」の談話における昨日」『学苑』826　昭和女子大学
三宅武郎 1934「述詞」『音聲口語法』（服部四郎他編 1978『日本の言語学』第 3 巻所収を使用）
三宅武郎 1937「動詞の連體形に關する一つの疑ひについて」『國語と國文學』14 巻 11 号
宮田幸一 1948『日本語文法の輪郭』三省堂
泉子・K・メイナード 2000『情意の言語学』くろしお出版
泉子・K・メイナード 2005『談話表現ハンドブック』くろしお出版
森岡・宮地・池上・南・渡辺『シンポジウム日本語②　日本語の文法』学生社
森川正博 2009『疑問文と「ダ」』ひつじ書房
森重敏 1956「「て，って」「てば，ってば」「たら，ったら」について」『国語国文』23－11
森重敏 1965『日本文法一主語と述語－』武蔵野書院
森田良行 1985『誤用文の分析と研究―日本学への提言』明治書院
森野宗明 1969「第 2 章接続助詞八　が＜古典語・現代語＞」松村明編『古典語現代語助詞助動詞詳説』學燈社（6 版 1987 を使用）
森山卓郎 1992「文末思考動詞「思う」をめぐって－文の意味としての主観性・客観性－」『日本語学』Vol11
森山卓郎 1988「日本語動詞述語文の研究」明治書院
山口堯二 1980『古代接続法の研究』明治書院
山口堯二 1983「疑問表現の原理」『國語國文』52 巻 3 号
山口堯二 1995「逆接仮定表現の末流」『語文』64　大阪大学
山崎誠 1996「引用・伝聞の「って」の用法」『国立国語研究所報告集 17』
山田進 2000「「いい」の意味論－意味と文脈－」『日本語　意味と文法の風景－国広哲弥教授古稀記念論文集－』ひつじ書房
山田孝雄 1908『日本口語法』實文館,（1993 年版を使用）

山田孝雄 1922『日本口語法講義』實文館
山田孝雄 1908『日本文法論』宝文館（1993 年版を使用）
湯沢幸吉郎 1957『増訂　江戸言葉の研究』明治書院（1991 年増訂 3 版使用）
吉井量人 1977「近代東京語因果関係表現の通時的考察―「から」と「ので」を中心として―」『国語学』110 集
吉田茂晃 1988「ノダ形式の構造と表現効果」『国文論叢』15 神戸大学文学部国語国文学会
李徳泳・吉田章子 2002「会話における「んだ＋けど」についての一考察」『世界の日本語教育』12
李明熙 2011「話し言葉における名詞文の文末形式の使い分け」『日本語/日本語教育研究』2　ココ出版
劉雅静 2012「一語名詞文から見る「ダ」の意味機能―中国語の“是”との比較を兼ねて―」『日本語文法』くろしお出版
渡辺誠治 1995a「題目提示に関する『¢』と『ッテ』」『さわらび』4 号　神戸市立大学
渡辺誠治 1995b「ある要素に対する新規の属性の取り入れに関わる形式－「ッテ」と「φ」を中心に―」『日本語・日本文化』21 大阪外国語大学
渡辺実 1971『国語構文論』塙書房
渡辺実 1953「叙述と陳述―述語文節の構造－」『国語学』第 13・14 輯（服部四郎ほか編『日本の言語学　第三巻　文法Ⅰ』所収 1978 大修館書店）

外国語文献

Alfonso,A. 1974 *Japanese Language Patterns* Vol.2　講談社
Bally,C. 1950 *Linguistique Generale et Linguistique Francaise* A.Francke S.A.,Berne
Benveniste,E 1966　*Problems de linguistique générale* Gallimard Paris（岸本道夫監訳 1983『一般言語学の諸問題』みすず書房
Givón,T. 1995 Isomorphism in the Grammatical Code *Iconocity in Language* Simone,R.(ed.) Amsterdam.Philadelphia:J.Benjamins
Halliday,M.A.K. 1970 Functional Diversity in Language as Seen from a Consideration of Modality and Mood in English *Foundations of Language* 6 pp.322-361
Halliday,M.A.K.1985 *An Introduction to Functional Grammar* Eduard Arnold
Li,C.N. 1986 Direct and indirect speech : A functional Study　*Direct and indirect speech* Coulmas F.(ed.)　Mouton de Gruyter
Lyons,J. 1995 *Linguistic Semantics An Introduction*　Cambridge University Press（初版は 1932）
Miller,R. A. 1969 *Bernard Bloch on Japanese*　Yale University（R.A.Miller 編　林栄一監訳 1975『ブロック日本語論考』研究社）
Martin,S.E. 1988 *A Reference Grammar of Japanese* Tuttle
Palmer,F.R. 2007 *Mood and Modality* Second edition　Cambridge University Press
Wierzbicka,A. 1974 The Semantics of Direct and Indirect Discourse *Papers in Linguistics* Vol.7
Yakobson,R. 1980 *The Framework of Language* MIchigan Studies in the Humanities(池上義彦,山中桂一訳 1984『言語とメタ言語』勁草書房）